

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

東方孤傀劇／＼Noキミヨン？Noウドンゲ？Yesうどみよん！

【作者名】

因田司

【あらすじ】

アリスが患う奇病により、幻想郷が混沌に陥っていく……
影に住民達が抗うも、其の地、幻想郷は刻一刻と確実に形を変えていた。

そんな中、皮肉にも其の影響によりもう一つの物語が始まっていた。

しかし其処にも、影と共に新たな刺客が忍び寄る。

其は影を討ち、愛を深めてゆく二人の恋物語……

「東方孤傀劇」コドクのアリス」「東方孤傀劇」ナラクのアリス」から派生した

うどみよんが主人公の二次創作作品で、二作品の外伝的なものです。

原作を知っていれば、もっと楽しめるかもしれません。

本編に比べ百合展開が多めです。

アナログ感満載の挿絵も時々載せております。
サブタイトルに「」が付いている回がそうです。
首を90度曲げたり、時には逆さまにしてみたり、
いろいろな角度からお楽しみ下さい。

恋のキツカケ〜the Reason of L
Overs〜

鈴仙No.1〜とある洞窟

〜

……やっぱり、良い曲ね……「東方妖々夢〜Ancient
Temple」……

みよんさんはもう寝ちゃったようですね……
半霊にくるまって、気持ち良さそうね……

！……………そう言えば……

私とみよんさんが初めて出会ったのは、
あの夜……ちょうどあの満月の様な月夜でしたね……
尤も、偽物の月でしたけど……

〜永遠亭（過去）

鈴仙「……ふふふ。月の事ばかりに気を取られて……
既に私の罠に嵌まっている事に気が付いていないのかしら？」

妖夢「!？」

鈴仙「貴方の方向は狂い始めている。もう真っ直ぐには飛んでい
られない！」

妖夢「そういえば、幽々子さま。

なんであいつが鳥なんですか？兎じゃあ……」

幽々子「兎は、皮をはいで食べると、鳥になるの。覚えておきなさい」

鈴仙「嘘を教えるな。つつか、無視するな！

私の目を見て、まだ正気で居られると思うなよ！」

鈴仙No.2とある洞窟

……あの時は、師匠や姫様の邪魔をさせないために
必死だった……

当時は、人間という生き物が怖くて仕方がなかった……

次に彼女と出会ったのは、花の異変の時……

みよんさんが今度は一人で異変調査の為に

永遠亭にやって来たのよね……

（永遠亭（過去））

妖夢「……誰か居ないのかな」

鈴仙「また勝手に上がり込んで！

今日は何の用？」

妖夢「あ、貴方じゃなくてももう少し

知識のありそうな方を探しているのです」

鈴仙「喧嘩を売りに来たのね」

妖夢「言い方が悪かったです。

幻想郷に詳しい人を探していたのですが」

鈴仙「残念ながら、うちの人は花の異変に

何故か無関心なんですよ」

鈴仙No.3とある洞窟

……わざわざ一人であんな竹林にある

永遠亭に来るかしら……？ 異変調査とは言え

彼処に用事を持ってくるなんて……人間ってきつと……

私は、密かに好きになっていった……

あ……私もみよんさんと白玉楼の階段で

会いましたっけ……？

……どちらにしても、あの時は酷い事を

言ってしまったなあ……まだ謝れてないし……

また明日に謝ることにしましょう……

そして今回の異変……

私が見ると師匠が使う薬の調達をしていた時に
奇病にかかったアリスさんに直接睨まれて……

く玄武の沢（過去）

鈴仙「てゐ！」

そんなとこに落とす穴掘らないで！

はやく師匠に買った薬届けなきゃいけないのに……」

てゐ「鈴仙、いいじゃないの。」

ここは誰が通って落ちるか私は知りたいんだウサ。

もう少して終わるから……待ってほしいウサ」

鈴仙「帰るよ、……あら？」

何かしら、あの黒い影……？」

アリス「!!」

鈴仙「!!」

てゐ「……………鈴仙?……………まさか帰ったの?」

てゐ「よいしょ、フウ……………」

えっ?黒い影……………」

アリス「……………」

てゐ「行っちゃう……………」

……………何だったんだウサ?」

鈴仙「……………」

てゐ「って鈴仙!!どうしたウサか!?

鈴仙「……………」

てゐ「わぁ、目が、鈴仙の目が……………」

い、急いで永遠亭に戻らないと!!」

鈴仙No.5とある洞窟

……………恐ろしかったわ……………」

あれ程視線を恐ろしく感じる事は無かったわ……………」

私も、目で人を狂わせられるけど、

其以上に命に関わるような眼力を……………」

私が師匠の元で看病してもらった時に、

私の安否を確かめに、みよんさんが駆けつけてくれた……
道中でマリス達に阻まれようとも……

〽迷いの竹林（過去）

鈴仙「みよんさん！」

妖夢（！……う、うどん……さん……？）

鈴仙「大丈夫ですか！？」

……はい、私の解毒薬を！」

妖夢「……!?ゲホツ!!」

鈴仙「……良かった……」

鈴仙（マリス）「……チツ……」

妖夢「……私は、無用の長物……では……？」

鈴仙「何を言ってるの!？」

そんなこと、思うはずがないわ!!

其は偽者の誘惑！マリスの罠よ!!」

妖夢「！マリス……ですって!？」

鈴仙「私は貴方を呼び捨てにはしませんよ!？」

それに、私の目に関するはありません！

……本当は……本当は私は……」

妖夢「！」

鈴仙「……………ですが、その前に……………」

…………… 此处で寝ていてください……………」

私が…………… みよんさんの敵をとってみせます!!」

鈴仙 No. 6 とある洞窟

…………… 嬉しかった……………」

私の事を気遣ってくれる人が此の世にいたなんて……………」

その時私には仕事がたくさんあって

一緒に行けそうにもなかった……………」

でも、師匠が許可をくれた…………… 私に気を遣って……………」

そうして私は、みよんさんと一緒に旅を始めたのよね……………」

マリスを利用する悪者を倒したり、

異世界の剣士さんと共に戦ったり、

他にも、道中で悪さをするマリス達を討ち倒したり……………」

厳しい二人旅だったけど、楽しかったわ。

でも、まだ異変は終わっていない……………」

師匠や霊夢さん達も頑張っている……………」

私達も…………… やれるだけの事をやる…………… 其だけよ…………… !

…………… もう夜も遅いですね……………」

みよんさんに迷惑をかけたらいけませんし、

私も寝るとしましょうか……………」

!…………… みよんさんの半霊…………… 気持ち良さそう……………」

///…………… 私も…………… くるまらせて貰おうかしら……………」

マリス・マーガトロイドNo.1とある洞窟入口

~~~~グウ……！

ヤット見ツケタト思ツタラ……

寝ル時マデイチャイチャトオオ……！！

アノママダト、イズレギリギリアウトナ事ニナツテ……

~~~~私ト……

私ト魔理沙ガ会エナイノヲ尻目ニイイ~~~~！！

ソナナ事ハサセナイワ……

二人ノ仲ヲ……恋慕の情ニ手ヲ出サナイd、イヤ……

出スカモシレナイワ……！マアイイ！

トニカク引キ裂イテヤルワ……！

此ノ先アノ二人ガ行ク所デ、

恋愛感情ニトツテ致命的ナイタズラヲシテヤルワ……

明日ガ楽シミネ……クヒヒヒヒ……！！

ファースト・デーディング・ウィズ……

未明の葛藤

とある洞窟

妖夢「……んん……んん……!!………フウ………」

妖夢「!……東の空が……もうすぐ朝ですか………」

妖夢（!いけない……幽々子様の元にいた時の癖が……）

鈴仙「ZZZZZ……ZZZZZ………」

妖夢「……う……うどんさん……!?私の半霊に………」

鈴仙「ZZZZZ……ZZZZZ………」

妖夢「………」

妖夢（そう言えば……あれからかなりの月日が経った……

幽々子様は元気でいらっしやるのでしょうか……?）

妖夢（……あの御方が召し上がった料理はすべて私の手料理……

其の私が居なければ………）

鈴仙「ZZZZZ……ZZZZZ………」

妖夢（……とは言え、そう動こうにも

うどんさんが居て出られないし、其以前に

私はづどんさんを守らなければなりません……)

妖夢「……幽々子様……御許し下さい……」

とある道中

幽々子「待ちなさ〜い!!」

ミステイア「イヤア〜!!

夜明け前なのに……寝させてよお!!」

幽々子「妖夢が居なくても、何とかするもん……」

異変終わらなくてももう我慢できないわ……!今度こそ捕まえてあげる!」

ミステイア「か、勘弁して〜!!

焼き鳥だけには……焼き鳥だけにはされたくないわ!!」

幽々子「……桜符『完全なる墨染の桜 開花』」

ミステイア「!!せ、扇子が……!」

本気だああ……た……た……た、助けてえええ〜!!!」

とある洞窟

妖夢「……………」

鈴仙「……んん……………フワア……………」

妖夢「！……………起きましたか……………」

鈴仙「!?みよんさん……………早いんですね……………」

妖夢「はい、かつて幽々子様の元にいた時は早起きをずっと繰り返してきましたから……………」

鈴仙「……………!!」、「ごめんなさい……………！あな、貴方の半霊を……………/ /」

妖夢「大丈夫ですよ。其よりも……………昨夜はよく眠れましたか？」

鈴仙「は、はい……………しかし……………気持ちいいですね……………」

妖夢「私の半霊は普通の幽霊よりは冷たくはないんです。半分幽霊であり……………半分は人間なのですから」

鈴仙「凄いですね……………モフモフですう……………羨ましいですう……………」

妖夢「!!/ /うう、うどんさん……………朝食はどつですか？」

鈴仙「!!わ、忘れてました……! つい……す、すみません……!」
妖夢「此の山の麓に行き付けの里があります。
其処で食べる事にしましょう」

く人間の里入口

鈴仙「!ひ、人がいっぱい……恐いです……」

妖夢「大丈夫ですよ。うどんさん、手を……」

鈴仙「!え……?」

妖夢「私がついてますから……」

鈴仙「あ……////……」

妖夢「!……い、行きましょう」

く人間の里中央部

妖夢(……手を繋げば、大丈夫だと思いましたが……)

鈴仙「////……」

妖夢「……そ、その……//……うどん……さん?」

鈴仙「!!ななな……何でしょう……?」

妖夢「あの……私の後ろに……ぴったりくっつく……と言っ
のは……」

鈴仙「!!あわ……!ごめんなさい……!手を繋いでいるのに……!!」

妖夢「此処の皆さんは、私を知ってます。

活気もありますからマリスはそう簡単に近付けませんよ」

鈴仙「!そ、そうなんですか……?」

妖夢「幽々子様のお使いでよく此の里に訪れてましたから判るんです……」

妖夢「!見えました……彼処です」

鈴仙「?民家の様ですが……大きいですね……」

妖夢「此の里唯一の飲食店なんです。

同時に色んなジャンルの店も中にあるんですよ」

鈴仙「其は便利ですね……みよんさんが通うのも納得できますね

……

……何と言っお店ですか?」

妖夢「『望龍亭』です」

鈴仙「!……カッコいいですね……しかし、何故其の名前に……?」

妖夢「此を見て下さい」

鈴仙「！此は……龍神……ですか？」

妖夢「ええ。此の里の中心には幻想郷の最高神である、龍神の石像があるんです」

鈴仙「！もしかして……」

妖夢「はい……店先から『龍』の像を『望』める……其処から『望龍亭』の名が付いたんですよ」

鈴仙「成程……！」

妖夢「更に此の像は目の色によって此の先の天候が判るんですよ」

鈴仙「！ほ、本当ですか……!？」

妖夢「はい。白い時は晴れ、灰色は曇り、青色は雨……当たる確率は七割と聞いていますが、凄く役に立ちますよ」

鈴仙「！目が……赤くないですか!？」

妖夢「赤色は……予測不能、主に異変が起きている時ですね」

鈴仙「……マリスが影響してるんですか……」

妖夢「恐らく……私達も頑張らなければならぬ様です……」

住民「おつ、冥界の嬢ちゃんじゃあないかい！」

妖夢「！お久しぶりです」

鈴仙「!!（小声で）だ……誰………です……？」

妖夢「此の方が店主ですよ」

住民「？其の………後ろの嬢ちゃんは誰だい？」

鈴仙「!!~~~~~」

妖夢「！え、ええ……」

住民「！分かった、何処かの里長の娘さんだ！
其の方の護衛してるんだろ？御苦労さんだねえ」

鈴仙「!?!い、いえ………私は……」

妖夢（は、話を反らさないと………!）

「此方では大丈夫ですか？マリスの被害にあってませんか？」

住民「あ？嗚呼………今のところ問題は無いよ」

妖夢「そうですか………其は何よりです」

住民「………にしても最近世の中物騒になってきてるなあ。

人に化ける化け物……マリス……だっけか……
ソイツ等が彷徨いてるって噂だろ？

だが、俺達みたいな此の里の男達はその程度じゃうるたえないし、
出てきたところで、里総出で退治するだけさ」

鈴仙（ほ、本当です……みよんさんの言った通りです……）

住民「！そうだ、俺の店で喰ってけよ！

こんな時間に来るって事は朝飯食ってないんじゃないか？」

妖夢「え……？ええ……そうですが……」

住民「其なのに一人で護衛もやってて大変だろう……

今回特別に奢ってやるよ！」

妖夢「！え……ど、どうも……」

鈴仙「!!あ……ありがとう……」ざいます……」

住民「腹が減っては何とやら……さあ、入りな入りな！」

く人間の里中央部 望龍亭内

鈴仙「あのお兄さん……親切なんですな……」

妖夢「ええ……此処等辺りでは特に親しい間柄ですから」

鈴仙「あの……みよんさん……」

妖夢「？」

鈴仙「さっき……庇ってくれて……ありがとうございます……」

妖夢「！／＼／＼せ、席も此処にしましょうか！」

鈴仙「！は、はい……そ……そそつですね……！」

鈴仙（マリス）（……トコロガ、ソウ八問屋ガ

卸サナインダヨネエ……アツサリ侵入ヲ許シチャツテサ……ケケ

ケツ……）

鈴仙「其にしても……みよんさんって博識ですね！

私、感動しちゃいました……！」

妖夢「！ありがとうございます……」

為になって下されば……何よりです」

鈴仙（マリス）（……妖夢ガ此処ニ連レテ来テルノ八知ツテタ……

本体ノ私モ、此処ニ通ツテイタモノ……何回モ会ツテ話モシテタン

ダカラ……）

鈴仙「あ……飲み物と食べ物、頼んできますね？」

妖夢「！御願います」

鈴仙（マリス）（ダガ）……直接襲ッテモ勝テル望ミハ薄イ……
何セ……ドチラモ強者ヲ護ル從者ナノダカラ……
其二、此八住民同士ノ結束モ堅イ……
マダ他ノ『私』ヲ呼び寄せラレナイ今ハ、タコ殴リニサレルカモシ
レナイ……）

妖夢「……………」

鈴仙（マリス）（マア）……遠クカラ見逃サナイ様ニ、朝食食ベナガラ
ジックリ計画ヲ立テルトシヨウカシラ……サアテ……ドウシヨ
ウカナ……）

鈴仙「お待たせ……買ってきましたよ」

妖夢「……………」

鈴仙「……………？どうしました？」

妖夢「……………」

鈴仙「？飲み物がどうかしましたか……？
もしかして、飲み物……要らなかつたですか？」

妖夢「！い、いえ……そうではないんですが……その……………」

鈴仙「？……………？、？……………」

妖夢「君の瞳に……乾杯……かな……？」

鈴仙「!!」

鈴仙（マリス）「!？」

妖夢「〜〜／／／……」

鈴仙（マリス）（ハアアア!?）〜ク、果物絞ツタ飲ミ物デ
何デ其ノ台詞ガ出テクルノヨ!!?
普通、醸造シタ飲ミ物デ言ウベキデショウガ……!!

鈴仙「〜〜嬉しい……」

鈴仙（マリス）（其処デ納得スルカ!!）

鈴仙「私……一度も言われた事がないんです……嬉しいです……」

鈴仙「い……頂きます／／……!!」

妖夢「!!!」

鈴仙（マリス）「!!!」

妖夢「〜〜〜う……じいさん……??其……私の……／／／／」

鈴仙「チィィ〜〜〜……!!!」

妖夢「!?わ、わあああ……………!の、飲みすぎです……………!!」

鈴仙(マリス)(オイオイオイオイ……………!!

!アノ兎……………モシカシテ自分ガ何シテルノカ氣付イテナイノ……………!!)

妖夢「……………あの……………ノノこ、溢れそつで……………ノノ」

鈴仙「!! ×% 〜〜!?

(謝ってる様だがストローくわえてる為、何言っているのか判らない)」

鈴仙(マリス)(アア、見テランナイワ……………ト言ッテモ後口姿ガ正面ニアルカラ、視線ヲソムケヨウニモ……………)

鈴仙「……………ノノノノ」

妖夢「……………え?うどんさんのを……………私に……………」

鈴仙「ノノ〜〜……………(コクコクッ)」

妖夢「……………チィ……………」

!!お、美味しいです……………!」

鈴仙(マリス)(〜〜自分等ノ飲ミ物ニ、一口モ手ヲツケナイッテドウイウ了見ヨオオオ〜〜……………!?)

コップ「グシャアア!!!」

鈴仙(マリス)(コンナ朝ッパラニ訳判ラナイ、デモギリギリナ事シテンジャナイワヨ!

其ノ後間接キツスニデモ持チ込ムツモリ……!?
子供連レモ来テルノヨ!? 不埒ヨ!! F U R A C H I!!)

子供「おかーさん……あのウサギねーちゃん、こわーい……」

鈴仙(マリス)(!!身体中ニ目ガ……!マズイ……
イツノ間ニカ擬態ガ解ケカケテ……!)

子供「……コップつぶしてるよー」

母親「そうね……きつと、嫌な事があったのね」

鈴仙(マリス)(~~~ホツ……見ラレテナカッタ様ネ……)

子供「おかーさん、ユリの花がさいてるー」

母親「んー?何処に咲いているの?」

子供「ほらー、あのおねーさんたち。さいてるー」

母親「!!??」

鈴仙(マリス)「!!」

母親「〜ど、何処で……其の言葉を覚えたのー？」

子供「だってー、おかーさんが読んでたもん」

母親「!!!」

鈴仙（マリス）「……」

母親「〜あ……貴方も何れ……分かるわ……」

さ、さあ……帰りましょ……何か……買ってあげるわ」

子供「！やったあー！」

鈴仙（マリス）（ソウカ……其ノ手ガアツタカ……此ヲ利用スレバ

……!）」

母親「ご、ご飯……美味しかった？」

子供「うん！」

鈴仙（マリス）（フッフ……アンタ……」

子供ノ癖ニ、ナカナカディープナ要素ヲ知ツテルジャンイノ……）」

鈴仙（マリス）（ヨーシ……ソウト決マレバ……!）」

鈴仙「すみ……す……すみません……!!」

め……目を瞑ってたので……」

妖夢「い……いえいえ……／＼／＼い、良いんです……」

?「ねーねー」

妖夢&鈴仙「!？」

鈴仙「此の子も知ってるのですか？」

妖夢「いえ……知らない子ですが……」

子供「おねーちゃんたちってー、どーしてここにいるのー？」

鈴仙「！えっと……」

妖夢「私達は、少し旅にくたびれたから休んでるんですよ」

子供「ふーん……じゃあねー……」

子供「おねーちゃんたちって『ユリ』なの？」

妖夢&鈴仙「!!？」

子供「そーなの？ゆーり!？」

妖夢&鈴仙「／／／／……!!」

子供「おにーちゃんはいないのー？」

おにーちゃんと、おねーちゃんてびったりなのにー!!

おねーちゃん二人ってさー！『ユリ』なのお!？」

鈴仙（こ、此の子……／＼／＼……!）

子供「ねーねー、ど・う・な・の!?ゆ・り・な・の!?」

妖夢「……よく聞いて貰えますか？」

子供「んー？」

妖夢「ゆりと言えば、そうなりますが、
そつと言えない場合もあるんですよ？」

子供「!?ア……ちが……う……の……？」

妖夢「貴方も、きつと……判るときが来ますよ」

子供「!!~~~~ウウウ……!!」

妖夢&鈴仙「!!」

子供「!!ウワアア~~~~ン!!!
おねーちゃんたちのブアカアア~~~~!!!!」

鈴仙「……走っていきました……」

妖夢「何か……罪悪感が……」

住民「ああ……あの子、戻って来てたんだな」

妖夢「！どういふ事です？」

住民「前は俺ん店にちよくちよく遊びに来てたんだが、ここ数日はつたり来なくなってたんだ。引越したのかと思ってたんだが……」

妖夢「……………」

住民「御免な。アイツはよく人の都合に口を突っ込むんだ。必ず誤解してな……勘弁してやってくれんか？」

妖夢「はい……………」

鈴仙「？どうしました、みよんさん？」

妖夢「！いえ……何でもありません……」

「ご飯も食べましょう。冷めてしまいますよ？」

妖夢「御馳走様でした」

鈴仙「御馳走様でした……………」

住民「此処等では其の刀を抜く必要はないから、気楽にゆっくりして行きな？」

妖夢「ありがとうございます」

住民「護衛も頑張れよ!」

鈴仙「あの……何度も助けて下さり……すみません……」

妖夢「……」

鈴仙「……あの子の事ですか?」

妖夢「!はい……」

鈴仙「大丈夫です、きっと……あの子も判ってくれますよ」

妖夢「そうだと良いのですが……」

く人間の里 とある路地裏

子供「くくチノノ……畜生……ノノ!!」

子供（マリス）（何……何ナノヨ……!?居ヅラクシテヤロウ
ト思ツタノニ開キ直リヤガツテ……!!

何デ……子供ニ、コンナ健ゲナ子供ニ何テ事ヲ教工込モウトシテル
ノヨ……!?

愛ハ此処マデ人……イヤ、妖怪ヲ盲目ニスルノ……!?

?「おいおい……其の程度かよ?」

子供（マリス）「!?」

?「正体は判ってんだ。其のままで良いぜ?」

子供（マリス）「!アンタハ……」

?「アイツ等を引き剥がすのは至難の技だ。
だから、私が協力してやる」

子供（マリス）「……何ノツモリ?」

?「私にも倒したい奴が居るんだ。

此の先に多分、アイツ等と合流する筈なんだ……
倒したい奴が居合わせれば、互いに協力するのが当然だろ?」

子供（マリス）「……私ヲ知ツテルノ?」

?「勿論。其にお前等の凄さも充分伝わってるしな」

子供（マリス）「……利用シヨウトシテルノネ?」

? 「とんでもない。きちんと使役されてやるぞ」

子供(マリス) 「襲ウカモシレナイノニ?」

? 「喰われれば強化されるんだろ? むしろ大歓迎だ」

子供(マリス) 「……良イワ。デモ其ノ前ニ……」

別ノ『私』達ヲ呼バナクテハ……」

? 「待ってるよ……今度こそてめえをブツ倒し、
私のがし上がってやる……!!」

ウィスプの諫言、プリマヴェーラの嘆き

妖夢 No. 1 人間の里 中央部

…あの子供……何か引つ掛かる……「望龍亭」の
店主さんも言ってた……

「……数日ぱったり来なくなってた」と……

来なくなってた子供が戻って来ることがあり得るのか……？
親達が禁止してた来店を解禁したとは考えにくい……
こんな危険な世の中なら尚更だ。

其に子供にしては……あの言葉……あり得ない……あり得ない

……

!!もしかして……!

!携帯に着信が……!

こゝ此の着信音は……す、「墨染の桜」……!
ま……まさ……まさか……!!

!すみません……うどんさん……!

電話がかかってきた様で……失礼致します……

TEL: 西行寺幽々子 魂魄妖夢
人間の里 中央部

妖夢「も……も……もしも……？」

幽々子「もしもしいー？よーむー？」

妖夢「！……は……はい……」

ゆ……ゆゆゆ……幽々子……様……？」

幽々子「元気してるかしら？」

妖夢「！げ、元気……してっ！おおおおります……はい……」

幽々子「紫から聞いたわよ、貴方達？今回の異変の

元凶である蒲焼の側近を倒したんだってー？お手柄よ！」

妖夢（？蒲焼……？もしかして竜宮の使いである

永江衣玖の事かしら……？とすると……側近とはあの狼女……）

（迷いの竹林（過去）

影狼「……今の私は機嫌が良いから、

一つ交渉しようと思うの……」

妖夢「……？」

（交渉？……今更……）

影狼「衣玖様の計画を邪魔をしないのだったら、
貴方達を此処から立ち去らせてあげるわ……！」

鈴仙「！衣玖様……？」

妖夢「確か……あの竜宮の使いですね……」

影狼「……但し……あくまで邪魔をするなら、この竹林ごと貴方達を薙ぎ払ってあげるわ！そして……」

鈴仙「……！」

影狼「貴方達で晚餐をしてあげる……自分のためのね……」

く人間の里 中央部（現在）

妖夢「いえ……あれは咲夜さんや慧音さん……其に……うどんさんの……お陰です……」

幽々子「実はね？御褒美あげようかなーと思ってたけど、来ないから渡せないわ？どうしましょう？」

妖夢「!!も!!申し訳ございません……!!
いずれはあ……貴方様の元に馳せ参ずる事を……!!」

鈴仙（……みよんさんがしきりに謝ってます……御主人様からでしようか……？）

妖夢「私には……まだ先代より受け継ぎし意志が……残っております……!!
……!!
決して……自ら其の使命の灯火を……己で吹き消すと言う愚行は……!!」

幽々子「固い固い！。で？『いずれ』っていつかしら？」

妖夢「!!みよ……?!」

幽々子「フフフ……怒ってないわよー？」

妖夢「!!!ヒツ……！」

幽々子「！そうそう、よーむー。

晩御飯はしばらくは困る事なさそうだからねー 安心してー」

妖夢「へ……？そ、其は………いったい………ど、どついつ………事で？」

幽々子「ほらほら、声を聞かせて頂戴？」

ミスティア「助けてよおお〜!!!」

妖夢「!………鳥か………」

ミスティア「また其の反応か！勘弁してえ!!」

鈴仙「………波長を調整します。聞こえなくなる筈です」

妖夢「!ありがとうございます………」

ミスティア「!〜、〜〜!!〜〜!〜、〜〜!!

(!違った、今逆さ釣りなのよ!!頭に血が上りそう!た、助けて〜
!!)「

妖夢「!本当ですね………流石です、うづおんさん!」

幽々子「挨拶も終わった様ね？」

妖夢「!!は……はい………はい………」

幽々子「じゃあ本題。妖夢、貴方に言いたい事があるのよ」

妖夢「!?な………何でございましょう……？」

（……まさか………つごんさんとの………別れ話を切り出せとでも………!?）

幽々子「其はあ………」

妖夢「……ゴクウツ………!!」

住民「キヤアアアアアアアア………!!!」

妖夢&鈴仙「!?」

幽々子「フフフ………異変解決も頑張らないといけない、て事かしら」
「？」

妖夢「!え………?え？」

幽々子「そゆ事よ、フッフ……じゃあねえ」

妖夢「!!お、御待ち下さい……幽々k」

ガラ携「ブツッ、ツーツ、ツーツ……」

妖夢「……………」

鈴仙「みよんさん……!」

妖夢（幽々子様は……私達を応援して下さってる……

其の御期待に……答えなくては!）

「ええ……!此の先から聞こえましたね……行きましょう!!」

VS 春を告げる妖精 リリーホワイト

〜人間の里 中央部

リリーホワイト「うううう……!!!」

鈴仙「!リ、リリーホワイトさん……!？」

妖夢（二人の住民に、抑え付けられてる……!）

住民 「此の妖精!〜凶暴だぞ……!？」

住民 「二人でも……お、抑えきれん……!」

リリーホワイト「わああああー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

住民 & 「!?わああ!?!」

住民 「!あんだ……だ、大丈夫……!?!」

妖夢（……みよんですね……）

リリーホワイトさんが攻撃する時は

興奮した時だけで、人を襲う事は滅多にないと言っが……（

リリーホワイト「ううう……ううううう……」

妖夢（其に……最後に宴会で会った時と比べて

明らかに様子がおかしいですね……

顔もやつれきって、目も血走ってて……（

リリーホワイト「ううう……」

妖夢「うどんさん、皆さんを避難させてください!」

鈴仙「!?みよ、みよんさんは……?」

妖夢「私が相手をします!」

鈴仙「でも……」

妖夢「皆に怪我を負わせる訳にはいきませんし、

妖精一匹、どうって事ありませんよ?」

住民 「!冥界の嬢ちゃん……!」

妖夢「皆さん、私が相手になります!下がって下さい!!」

住民 「みんな、離れるお!!
勝負の邪魔になるぞ!!」

リリーホワイト「……!!」

妖夢(……此方に気付いた……仕掛けてくるか?)
「じぶんさんー!御願いますー!」

鈴仙「判りました!さあ、此方へ……!」

住民 「!す…済まんナイテテテ……!」

住民 「悪いね……妖精一匹まともにやりあえんなんて……」

住民 「気を付けてくだせえよ、嬢ちゃん!

其の妖精、マリスに喰われてる可能性があるぞ!」

妖夢「承知の上です!」

リリーホワイト「あああああ……は……る……だああ……」

妖夢「え?」

リリーホワイト「春です春です春です春です張るです春です春です

HALです春です貼るです春です春ですか春だす春です春です春
です春です

春です春death春です春です春です春春はるはるハるはるは
る

鈴仙「みよんさん……!!」

妖夢「心配かけましたね……もう大丈夫ですよ」

リリーホワイト「~~~~~」

妖夢「どうやら……此の様子からすると
マリスには浸食されてなかったようです……」

リリーホワイト「う、うう~~~~ん……」

妖夢「!……気が付きましたか……」

リリーホワイト「!よ、妖夢さん……鈴仙さん……!」

妖夢「お久しぶりですね……こんな形で
再会したくはありませんでしたが……」

リリーホワイト「御願いです!!た……助けて下さい……!!」

妖夢「!？」

鈴仙「何があつたんです？」

リリーホワイト「実は私……貴方達が白玉楼を出て直ぐに
妖怪の山に春を告げに行っていました……」

こんな事態になっても春告精の役割を果たさないと、と違って

……」

鈴仙「？其と……何が関係してるんでしょうか……？」

リリーホワイト「其の途中で休憩の為に

一本の桜の木の根元に腰掛けたら……其の木は

潜伏してたマリスの擬態だったんですよ！」

妖夢&鈴仙「!!」

リリーホワイト「食べられそうになって……命からがらで逃げ切れ
ましたが……」

マリスの浸食で木々が……春の木々がどんどん枯れていつてるん
です……」

鈴仙「人だけでなく、物質まで……」

リリーホワイト「今年の春が無くなってしまふと思つと、
気が気で無くなって……気付けば此処に……」

妖夢(成程……春を失うという恐怖からの自己の喪失……此が原因
ですか)

リリーホワイト「今……貴方達から……春を感じます……」

妖夢&鈴仙「!!」

リリーホワイト「御願いです！私を……傍に置かせて欲しいの……

!

春が失われていくと思つと、生きた心地がしないのです！

まだ春を充分告げられていないのに……私、終わりたくありません

!!

妖夢「良いですよ、付いてきてください」

鈴仙「！」

リリーホワイト「！ほ……本当ですか……？」

鈴仙「でも……大丈夫なんですか？」

妖夢「彼女を此処から連れていけば、里の住民達も安心できるでしょう？」

鈴仙「！……そうですね」

リリーホワイト「私……二人の護衛を頑張ります！」

妖夢「人間の里を出るとしましょう……
皆さん、お騒がせしました……」

住民「いや、俺達も助かったよ。嬢ちゃん達のお陰で
大事に至らなくて良かった。三人も此から気を付けてな」

妖夢「はい。御二方も御大事に」

リリーホワイト「すみませんでした……！」

住民「良いって……妖精さんもマリスには注意しろよ」

住民 「頑張つて春、告げて来いよ！」

妖夢「では、失礼します。行きましょう……うどんさん」

鈴仙「！はい……／＼／＼……」

鈴仙No.4 人間の里 中央部 人間の里 出口

……みよんさんは本当に凄いです……

あんなにたくさんの人と接することが出来るなんて……

……私も……師匠の薬を売る為に来た事があるけど……

やっぱり人間は怖かった……うまく話が出来なかったなあ……

でも……みよんさんと居れば、何も怖くはない気がする……

今度人を見かけたら……勇気を出して話してみようかしら……？

今回はリリーホワイトさんもいる……此の旅……

何だか楽しくなりそうですね……

人間の里

出口付近物陰

マリス「フウン……本当ニ合流シタワネ……」

デ？アイツガアンタノ言ツテタ『倒シタイ奴』ナノ……？」

？「嗚呼……そうだ……春告精、リリーホワイト……」

調子こきのプリマヴェーラ野郎だ」

マリス「……カク言ウアンタモ春告精デシヨ？ネエ……？」

マリス「リリーブラック？」

リリーブラック「リリーホワイト……てめえの時代は終わりを迎えるんだよ……」

捻り潰して、今年こそ私が……此の世に黒い春を届けてやるぜ!!」

If・ブランとノワール

「妖夢、なんだか最近、春が遅くない……?」

「そう……ですね。春雪異変の時とはちょっと違うみたいですけど、春が少し遅い気がします……」

「……何か心あたりはある?」

「すみません、鈴仙さん……。春告げ妖精のリリー・ホワイトをまだ見てないくらいしか、わかenらないです……」

「ん、そっか……。でも、旅に出て、そろそろ消耗品も切れてきてるし、1回人間の里に入って補給しつつ、情報を探ろうか」

「そう、ですね。医療品も少しずつですが、底が見えてきてますし……」

「それじゃ、決まり。一番近い人間の里は……」

「「こちらですよ、鈴仙さん。」

「流石、妖夢！頼りになるね！」

鈴仙は妖夢に抱きつくと、妖夢はみよんな鳴き声を上げた

「みよん!?!」

「ど、どうしたの?」

「な、なんでも、ないですよ!?!」(ね、鈴仙さん、いい匂いするっ)

同じ女性としても羨ましい彼女の董色の髪はサラサラでいい匂いがし、胸だつて私よりも、大きい。それに、薬の調合だつて出来る

「妖夢……？どしたの……？」

「な、なんでもないですよ！？そ、そんな事より、ほ、ほら、鈴仙さん！人間の里、見えてきました！！」

「あ、ホントだ！」

「は、早く行きましよう！！」

私たちは人里に付くと、まず消耗品から買い漁った

「おじさん、これ10個買つからおまけできませんか？」

「お、可愛い嬢ちゃんだから、それで売ってやるよ」

「みよん……そ、そんな可愛いなんて……あ、そつだ、おじさん。最近何か気になることつてありますか？」

「そつだな……。嫁の好きな花が咲かないし、何より、桜が咲かない……事だな。嬢ちゃん、妖怪だろ？リリーちゃん、見なかったか？」

「リリー……つて、リリー……ホワイトの事かしら？」

「そつだぜ、兎の嬢ちゃん。まだ、あの子の春を告げる姿を見てないんだ」

「やっぱりそつですか……」

「まあ、ただ遅いだけかもしれないねえしな。あ、そうだ、嬢ちゃん達、これやるよ」

渡されたのは、二枚の券

「ウチで大量に買ってくれた礼だ。この里の甘味処で使える券だ。甘い物でも食べさせてゆっくりして行ってくれ」

「わっ！ありがとうございます！おじさん！」

「ありがとうございます」

「いいって事よ。それじゃ、まいどあり」

――

「れ、鈴仙さん！」「妖夢っ！」

店を出てすぐに私と鈴仙さんは同時に名前を呼んだ

「わ、わわ、れ、鈴仙さん、お先にどうぞ」

「よ、妖夢を方こそっ」

「い、いえ、鈴仙さんの方こそっ」

「こんなやりとりが少し続き、」それじゃ・・・と「鈴仙さんが話を切り出した

「ね、妖夢。さ、さっきもらった券で甘味処・・・行きたいなあ・・・

なんて……」

ぴよこぴよここと兎の耳が私の反応を伺うよう、動いている

「も、勿論です！私も鈴仙さんと一緒に食べれたらいいな……って思ってたんです！」

そう、彼女に言うと鈴仙さんはまるで、向日葵が咲いた……かのように笑い、私の片手を取り走り出した

向かうは甘味処。

甘味処まで来ると、外からでもわかる餡の甘い匂いがわかった

上品な甘い香り。

店の中に入り、席に着くと、温かいほうじ茶が出された

「お茶なんて久しぶりだね、妖夢」

「そうですね、鈴仙さん」

ずずず……と飲むとほうじ茶の独特な渋みとうまみの味。

幽々子様もお好きだったなあ

「ね、妖夢。注文何にする？」

「あ、そうですね。それじゃ、私は白玉ぜんざい……にします」

「外からでも餡のいいにおいしてたもんね。んー。妖夢が白玉ぜんざいなら、私は、あんみつにしよう」

注文して、しばらくお茶を飲んでいると白玉ぜんざいと、あんみつが出てきた

「いただきます」

一口、白玉と粒あんを口の中に入れると、餡の上品な甘さが口の中に広がる

もちもち、と白玉が口の中で良い塩梅の甘々。

ふと、向かい側に座っている鈴仙さんを見ると、手で頬を押さえながら幸せそうに、あんみつを頬張っていた

「ね、妖夢。そ、その白玉ぜんざい、一口……くれないかな……なんて……」

「あ、べしぞ、あんぞ」

皿を差し出すと、美味しそうに食べる鈴仙さん

「んー！妖夢の白玉ぜんざい、美味しい！ね、妖夢、こっちも食べて見てっ」

鈴仙さんは何気なく、匙にあんみつを掬い私の口元に運んできた

(こ、これって!!え!?か、間接キス(接吻)!!)

ぷしゅつぷしゅつと音がするような勢いで顔が赤くなっていくのがわかる

「わわわわ、っ、れっ、鈴仙さんっ!」

「はい、妖夢」

多分、鈴仙さんは気がついて居ないのだろう。
わ、私だけが意識してるの？

でも、ここここで食べなかったら、多分鈴仙さんは悲しそうな顔をするかもしれない

そ、それだけは避けないと

意を決し鈴仙さんの匙からそのままもらう

その瞬間、餡の甘さと密の甘さが口の中で広がるが、同時に熱くなった頭もどンドン、更に熱くなっていく

「お、美味しいです・・・」

その一言が精一杯

「でしょ！全部終わったら師匠や姫様、てみを連れてこよう。あ・・・でも、妖夢と二人だけの秘密なものいいかも」

身体が熱すぎるのを自覚しながら無心で白玉ぜんざいを食べ終わる頃だった

何かに見られている

熱かった身体が一気に冷え、ピリリと嫌な視線に反応すると、鈴仙さんも同じだったらしい

小声で話しかけてくる

「妖夢。気づいているっ」

「はい。急いで支払いして、出ましよう」

「そっね、急ぎましよう」

券を店員に渡し、すぐに店を出る。

ねっとりとした嫌な気が私たちを見ている

「……鈴仙さん、走りましょう。里の外まで」

「了解。妖夢」

なんとか、里に被害が無く里の外まで出ると、その瞬間、黒い弾が私たちの方に放たれた

「っ!!」

反応し、抜刀と同時に、弾を切り裂く

「……出てきなさい」

鈴仙さんも同時に構え、背中合わせてフォローする形で陣形を取る
出てきたのはリリーホワイトの服をまるで墨で染め上げたかのよう
な真っ黒な服を着たうり二つの人物と、マリス。

「アンタたち、ナニイチャツイテンノヨ!!」

「あんだ達の春も黒くしてやるっ!!」

「マリスっ……。それに、リリーホワイト……?」

「やっぱり、あんだ達だったのね!春を奪っているのはっ!!」

「アンタたち、バッカリニ、イイオモイナンテサセナイッ」

リリー（仮）とマリスが間髪入れず弾幕を撃ち込んできた。

リリー（仮）の弾幕は凄まじく、大量の弾幕を放ってくる

それだけならいいのだが、複数のマリスが逃げ道に弾幕を張り、除

除に追い詰められた

なんとかかかいくぐってきたが、鈴仙の背中に黒い弾幕が迫る

「鈴仙さん！避けてっ!!」

駄目だ。間に合わない

鈴仙さんが被弾する直前、他の弾が黒い弾を弾いた

「っ!？」

「春ですよー」

「リリー!？」

「私はリリーホワイトですよー。ブラック、いい加減諦めたらどうですか?」

「五月蠅いっ！今度こそお前を倒し、黒い春を幻想郷に届けるんだっ!」

「ど、どうなってるの……?リリーが二人……?」

「も、もしかしたら同じリリーさんでも、別人なのかもしれないです……」

リリーホワイトがリリーブラックの弾幕を邪魔してくれたおかげで、離れていた鈴仙さんと急いで合流し、彼女の怪我を確かめる

よかった……。大きい怪我はないようだ。

本当に良かった

「・・・はあ、えーと、妖夢さんに鈴仙さん。彼女の世話は私が引き受けますので、そちらの顔色の悪い方をお願いします」

「あ、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「いえ、こちらにも彼女を放って置いた非がありますからねえ。それでは、始めましょうか」

再びリリーブラックはもの凄い量の弾幕を張り、それを迎撃するかのように、リリーホワイトが弾幕を張る
完全にリリーブラックを、リリーホワイトが押さえてくれ、マリスに集中することが出来た

「コノ、リアジユウガアアアアア!!!」

マリスの弾幕は避けづらいものが多く、二人で背中合わせて弾を捌き、弾幕が開けた瞬間、妖夢がマリスに突っ込み、周囲の弾幕を鈴仙が打ち落とす

増殖していくマリスをリリーホワイトとブラックの弾幕の残滓に飲まれ、上手いこと増殖が出来ていないようだ

「マリスっ！これで最後っ！」

妖夢と鈴仙が同時にマリスと撃ち、そして切り刻み、最後のマリスを滅ぼす

「クソッ！オボエテロ!!」

「ちくしょ・・・また、負けた・・・」

そのときには既に、リリーホワイトの方もブラックに打ち勝ち、戦闘が終わっていた

チンツと、鯉口をならし、威嚇しながら被弾し、落ちたブラックに妖夢は近づいた

「ひいー」

「・・・リリーホワイトさん、彼女、切りますか？」

「いえ、大丈夫ですよ、これから、レティのところに連れて行って、お仕置きしてもらいます」

そのとき、ホワイトの笑顔がブラックに見えた・・・

「それでは、そろそろ私はいきますね。春ですよ」

リリーホワイトはブラックを小脇に抱え、そのまま去っていった

「は、春の件は、これで解決・・・かな？」

「そ、そうですね・・・」

「ね、妖夢。今度こそゆっくりお茶しに行かない？」

「そ、そうですね！今度は何食べようかな・・・」

里に戻るため、走ってきた道を戻り、二人は甘味処に戻っていた

E V I L L e c t u r e

とある道中

妖夢「……………どうですか、リリーホワイトさん？」

リリーホワイト「大分良くなりました！」

鈴仙「良かったわね」

リリーホワイト「助かりました、やはり貴方達は凄いです！」

妖夢&鈴仙「!! / / / / ………………」

リリーホワイト「私は護衛を頑張りますので、
気にせず旅をして下さい！」

? 「あら、貴方はいつぞやの……………」

妖夢「! ……………誰だ？」

影狼「久しぶりね、二人とも」

鈴仙「!! あ、貴方は……………影狼……………! 今泉影狼……………!」

影狼「！名前を言ってくれるなんて嬉しいわね」

妖夢「当たり前じゃない。貴方達の名前は
今や幻想郷全域に知れ渡ってるわ。でも……」

く迷いの竹林（過去）

影狼「衣玖様の計画を邪魔をしないのだったら、
貴方達を此処から立ち去らせてあげるわ……！」

鈴仙「！衣玖様……？」

妖夢「確か……あの竜宮の使いですね……」

影狼「……但し……あくまで邪魔をするなら、
この竹林ごと貴方達を薙ぎ払ってあげるわ！
そして……」

鈴仙「……！」

影狼「貴方達で晚餐をしてあげる……
自分のためのね……」

くとある道中（現在）

妖夢「……貴方達は私達の手で幻想郷転覆を
目論んだ罪で、牢屋に入れられた筈……」

影狼「釈放されたのよ。何故かね。他の皆もそうよ」

妖夢「！あの閻魔様が……貴方達を許したと……!!」

影狼「私達も困惑してるのよ。此だけの事をして
何で釈放されたのかってね……」

影狼「聞いたわよ、貴方達が最近噂になってるカップルだって？」

妖夢「！うどんさんには手を出させんぞ……!!」

影狼「!?待って待って！剣を構えないで……
今其どころじゃないから……！」

妖夢「！……どういづつもりだ？」

影狼「私達は、正邪を探してるだけなの！」

鈴仙「！……龍宮の使いの腹心だった妖怪ね？」

影狼「そう、そうよ。もしかしたら
逃げたのかもって、皆で血眼になって探してたのよ」

リリーホワイト「！あれ……もう一人いませんでした？」

影狼「！ああ、雷鼓の事？そうよ。一度小槌の力から自立した彼
女も

いなくなってたって時はびっくりしたわ」

鈴仙「そうだったんですか……」

影狼「まあ、貴方達も頑張りなさいよ？じゃあね！」

影狼「頑張つてさあ！……結婚しなよお……！！」

妖夢&鈴仙「!!!？」

妖夢「……た……大変なんです……敵の方も……／／／……」

鈴仙「そ……／／／……ですね……」

リリーホワイト「……春ですねえ……」

鈴仙（マリス）「……フン、ムカツク……」

リリーブラック「何がだ？」

鈴仙（マリス）「アノ閻魔ガアイツ等ヲ許シタ事ヨ。
アイツナラ普通、斬首位ハ言イ渡ス筈ナノニ……」

リリーブラック「そつえば、逆賊の頭領の龍宮の使いの腹心
二人が行方不明と聞いたが……お前が持つてるんだろ？」

鈴仙（マリス）「其ノ通りヨ」

リリーブラック「へっ……仕事がはええな、相変わらず」

リリーブラック「！折角だ……お前達に少し、教えておきたい事がある」

鈴仙（マリス）「ソナ事シテル暇ハ……！ホラ……行ッテシマウワ
……！」

リリーブラック「てめえ等……分裂できるだろつが」

鈴仙（マリス）「！ア……………」

椀（マリス）「……………デ、追跡スレバ良イノ？」

リリーブラック「其の天狗の千里眼で追うんだ。良いな？」

椀（マリス）「判ツテルワヨ……………」

リリーブラック「さてと……………まずお前達に見せたいものがある」

鈴仙（マリス）「何ヲヨ？」

リリーブラック「人形劇だ」

鈴仙（マリス）「……………ハ？」

リリーブラック「お前達は、あの二人を潰したいんだろ？」

鈴仙（マリス）「！エ、エエ……ソリヤア……」

リリーブラック「奴等はどのようにして距離が縮まってしまうか……私が人形劇で再現しようと思う」

鈴仙（マリス）「何デ、イキナリ……？」

リリーブラック「今から私が、レクチャーするから！
よく聞いとけ!!分かったな!？」

鈴仙（マリス）「ハイハイ……」

リリーブラック「ちょっと待ってろ……準備……するからな！」

鈴仙（マリス）「！舞台マデ……其処マデ本気ニナラナクテモ……」

リリーブラック「よいしょ……よし、できた……やるぞ！」

リリーブラック「どういう処で距離が縮まってしまうか!?!
さっきの光景の様に、二人が道を歩いてたとする！」

とある道中

リリーブラック「チャーンチャチャ…… チャチャチャーララン
……」

鈴仙（マリス）（……ナンデ出始めガ『青空の影』ナノヨ……？）

鈴仙人形（リリーブラック）「遅いわ…… もう待ち合わせの時間、来
てるのに」

鈴仙（マリス）（！ウツワア……ヘタクソナ人形ネ……子供ノ落書キ
カ……？）

妖夢人形（リリーブラック）「やあ、待たせたね、セニヨリータ」

鈴仙（マリス）「チョイ待ち!!」

リリーブラック「！いきなりなんだよ?」

鈴仙（マリス）「ナンデ『セニヨリータ』ナノヨ!?

奴等八互イニ『うどんさん』『みよんさん』ッテ呼ンデルワ!!」

リリーブラック「…人形に関しては細けえな……」

言葉使い位どうでも良いだろうが……チッ、分かったよ、全く……」

Evil Lecture)Take2)

くとある道中

妖夢人形（リリーブラック）「やあ、待たせたね、うどんさん！」

鈴仙人形（リリーブラック）「みよんさん……！もう！

どうして遅れたのよ!? プンブンっ……」

妖夢人形（リリーブラック）「いやあ、すまんね……剣を磨いてて遅くなってしまった……君を守る為のね」

鈴仙人形（リリーブラック）「!!みよ……みよんさん……ノノノ」

鈴仙（マリス）（……モウ……此ノ際、黙ッテオコウカ……）

妖夢人形（リリーブラック）「さあ、おいで……」

鈴仙人形（リリーブラック）「はい……!」

リリーブラック「とおこおるおが!!

此処で異変は発生する!!」

鈴仙（マリス）「!？」

鈴仙人形（リリーブラック）「!? キャアア、蹴っつまづいて……!」

妖夢人形（リリーブラック）「!!みよ……!!?」

鈴仙（マリス）「!!!」

鈴仙人形(リリーブラック)「いたたたあ……………!? / / あ……………」

妖夢人形(リリーブラック)「…………お、重いです…………ごん………… / /
さん……………」

鈴仙(マリス)「!!」

(~~~~イケナイ…………構図……………!!)

鈴仙(マリス)『イリュージョナリイブラスト』!!!」

リリーブラック「!? ワワッ……………!!?」

鈴仙(マリス)「~~~~~!!!」

リリーブラック「い…………いきなり何するんだよ!!」

鈴仙(マリス)「ハア…………ハア…………其ノ小生意気ナ兎人形ノ…………
首ヲ抉リ取ツタダケヨ」

リリーブラック「! うお…………本当だ、凄いコントロールだな…………!」

鈴仙(マリス)「ハア…………ハア…………! クッ……………」

リリーブラック「…………どうだ? 歯がゆいだろ? 悔しいだろ?」

鈴仙(マリス)「~~~~ク、クソオオオオ……………!!!」

リリーブラック「! じついつ事態が連続で起きることになり、

二人の距離が縮まってしまっただよ……
さて……此の事態に陥ってしまった原因を探ろうか……」

リリーブラック「しかし簡単だ……
原因はたったひとつ……此だ!!!」

鈴仙（マリス）「!!?」

リリーブラック「此の!!石つころが!!悪い!!!」

鈴仙（マリス）（……妖夢人形デ叩クナヨ……）

リリーブラック「此が、二人の距離を縮めてしまったと言っても過言じゃない。こんな小さな石ころでさえも簡単に恋愛の道具になってしまう……皮肉なもんだ」

鈴仙（マリス）「……」

リリーブラック「其に……奴等は私の見る限り奥手だ。余程の事が起きない限り、奴等の距離感は縮まらない……だが、逆に何か起こればソイツは一気に縮まる……じゃあどうすれば良いか?」

鈴仙（マリス）「……」

リリーブラック「簡単だ……コイツ等を取り除けば良い」

鈴仙（マリス）「!!」

リリーブラック「其の原因を取り除けば
奴等の距離は縮まらず、ずっと平行線を保つ筈だ。
そうなれば、自然に愛は冷めていく」

鈴仙（マリス）「！成程……其ナラ……！」

リリーブラック「まだある。其が人間なら、お前達が食えば、
擬態のレパトリーを増やせるだろ？より多くの住民を欺ける様
になる」

鈴仙（マリス）「!!」

リリーブラック「そして奴等から春が無くなれば、リリーホワイト
も弱体化し、
叩きやすくなるしな。まさに一石二鳥って奴だな」

鈴仙（マリス）「……………」

リリーブラック「……………」

鈴仙（マリス）&リリーブラック「イヒヒヒヒヒ……………!!」

鈴仙（マリス）「ワハアハハハハハア……!!!」

リリーブラック「イヒエへハハアハハハア……!!!」

〜少女爆笑中〜

鈴仙（マリス）「フフフ……アンタツテ……トンダ策士ネ……!!」

リリーブラック「分かって下されば……アハハ……嬉しいぜ……
」!!」

鈴仙（マリス）「ソウトナレバ……早速実行ヨ!!」

リリーブラック「よし、追いかけるか!!」

だが、先に行っててくれ! コイツ等片付けるから……!!」

鈴仙（マリス）「! ジャア手伝ウワ!!」

リリーブラック「お? 悪いな……!」

鈴仙（マリス）「トコロデ、気ニナツタンダケド……」

リリーブラック「何だ？」

鈴仙（マリス）「……リリーホワイト人形ハ？」

リリーブラック「論外」

ロマンス・スナイパー

YOU MU

とある道中

私達は、木々に囲まれた道を歩いていた。

私、みよんさんこと、魂魄妖夢と

うどんさんこと、鈴仙・優曇華院・イナバさん、

そして、リリーホワイトさん。

三人で人間の里を離れ、旅を続けている最中だった。

リリーホワイトさんもすっかり元気になって

楽しそうに私達と話していました。

すると突然……

「二人とも!!危ないですよ!!」

リリーホワイトさんが、私達の前に来て両手を広げた。
其も後ろ向きで。

「リリーホワイトさん…!?!」

何があったんでしょうと、

背を向け立ち塞がる彼女の前を見て驚いた。

大型のミサイルらしき物体が飛んできていたからだ。

某配管工のゲームに出てくる
砲弾を一つ目にしたような風貌だ。

幽々子様も其の砲弾によく苦戦されていた事を覚えている。

！いや、そんな事より今は……！！

このままだと、リリーホワイトさんに！！

私は必殺技を発動した。

『反射下界斬』!!!

リリーホワイトさんの前に、水色のバリアが出来る。

ミサイルは彼女の前で其のバリアにぶつかった。

作用により少数の弾幕とともに

ミサイルは反射され、飛んできた山の中腹に向かって飛んで行っ
た。

そして次の瞬間、

ピッツチュドオオツオオオーーーーーーン
!!!!!!!!!!

紫色の大爆発が山で起こった。

……誰か、被弾した？

効果音が似てるような……??

！だから、それどころではありません！！

「大丈夫ですか、リリーホワイトさん？」

リリーホワイトさんの前に回り込んで尋ねる。

彼女は目をギョッとつぶっていた。

「大丈夫ですか？」

リリーホワイトさんが目を恐る恐る開けた。

その瞬間、顔から汗がどっと出ていた。

「ありがとうございます……」

貴方が気付いてくれなかったら私達は……」

相当怖かったらしく、震えていた。

「……みよんさん、今のは……」

「間違いありません、マリスですね……」

……私達も狙われているという事ですか……

「リリーホワイトさんの緊張をほぐしましょう。」

何処かで隠れて休みます？」

「そうですね、急ぎませしゅー」

LILY BLACK
とある山腹

「……なあ、さっき恋愛を邪魔するものは先に始末するといったよな？」

「エエ……ソウネ」

「じゃあ、邪魔するのが今のところなくて私達だけだったら？」

「ドウスルノヨ？」

「遠慮なく私達がいかせて貰うにきまつてんだろ!!」

名前の付いているかどうかとも分からない山の中腹、
そこに設置されたマリスで出来た砲台に乗って私は叫ぶ。

私は、善を潰す先輩の立場として

突如幻想郷に出没した愛を憎む後輩達に

恋愛の距離はどう埋まるのか、人形劇でレクチャーしたばかりだった。

ソイツはさて置き……

マリスでできた席に座り、砲台マリスの標準の様な二つの目に私の目を合わせ、目標と着弾点を確認する。

一つからは並んで歩く一人と一匹、其にリリーホワイトを確認した。

もう一つから見えたのは、何も無い地面だった。

私が奴等が此の先必ず通ると推測した道だ。

微調整をしながら再び砲台に話しかける。

「……今私をバカだと思っただろ？」

「イエス」

「正直でよろしい。だがな、どうしてこんな事をするか判るか？」

「判らナイ」

「もし、此のまま何もなかったら、奴等は稀に自分で

其の出来事を作ってしまう事がある。姑息な事にな」

「！成程…可能性八無イ訳デ八無イノネ？」

「そうだ……だが、私は其のわずかな可能性が怖えんだ。

だから此方から一発で、ダイレクトで終わらすんだよ！

相手の名前も呼ばす間もなく、静かに、だがあっという間に終わらせる。

そうすれば、二人ともお前の本体の人形だ」

「……リリーホワイトハ？」

「其はダメだ。アイツは私が人形にする」

マリスの二つの目を通して標準を合わせる。

一人と二匹が通るポイントの地面に着弾する様に標準を合わせた。

もう一つの目で再び目標を見た。

ズームしたリリーホワイトを見ると胸糞が悪くなる。

特にあのふざけた笑顔……

思わず歯ぎしりが出る。

呆けた面で、のうのうと飛び回りやがってえ……!!

「死ね」

バツツシューウウウ!!!

……自由研究の時みたいな音だな。

ペットボトルのロケットか？

とりあえず、砲台マリスの砲口からミサイル型のマリスが出てきた。

そのまま私が定めていた着弾点に向かって飛んで行く。

あのミサイル、私も発射前のデザインを見せて貰ったが、

流星に恐ろしかったな。

紫色のミサイルの先端にひとつ目しかなかったからな。

狙いは正確に計算した。

何もないや必ずアイツ等にブチ当たる。

もし失敗して避けられてもミサイルマリスが自分で追尾する。
奴等に勝ち目は……無い。

だがあんなのが飛んできたのが気付けば……
気付けばだが……アイツ等発狂でもするんじゃないか？

「イェェェ……」

思わず笑いがこぼれる。

……ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

「？」

飛んで行ったはずのミサイルマリスがこっちに飛んできていた。

「はっ」

そして次の瞬間、

ピイツチユドオオツオオオーーーーーン
!!!!!!!

紫色の大爆発が起こった。

「~~~~マ、まさか……反射シテ来るトはア……!!」

あたり一面紫色の粘液で覆われていた。

着弾スレば、内蔵したマリステ追いつたモノだったらしい。

当然、着弾点に居た私も範囲内だった。

「……デ、ドウ思ウ、此ノ結果ヲ？」

突然粘液の一角が盛り上がり、一つの姿が作られた。

目標ノ一人だツタ兔だ。

粘液から足を引き抜き、溜息ヲつかれた。

「オイ……先に……此ヲ何トかシテクレエえええ……!!」

粘付イテ取れん……!!」

「判ツタワヨ…チョット待ッテ」

スルと兎マリスノ左耳が大きく裂ケ、
巨大ナ口となツて私ニ襲イカカッタ。

アぁ……アの剣士も…こついう風に襲われたら良イのニ……

「ふう……助かったぜ」

私は左耳に、骨までじゃないがしゃぶり尽くされたあと、大きく伸びをした。

「話ハ終ワツテナイワ。此ノ結果ヲドウ見ルノヨ!?」

兎マリスが詰め寄つて来た。

ワニみてえな左耳からよだれが垂れている。

「仕方ねえ……アイツに反射できる技があるなんて
知らなかったんだからよ……」

「私ハ知ツテタワ?二人トモ戦ツタ経験ガアルモノ!!」

「!?なんで教えてくれなかったんだ!」

「……アンタ…アノカップルハ最近チマタデ話題ニナツテイタノヨ？
アンタノ事ダカラ、テッキリ調べテタト思ツタノヨ!!」

少し怒ってるな……顔の半分だけ擬態が解け、別の奴に擬態して
いた。

コイツは……紅魔の魔女か……

だが、私が話題になっていたのを知らなかったのは事実だった。
幻想郷のいろんな情報を網羅してた私が……
多分すごく最近に話題になったんだろう。

「……チッ」

舌打ちが出た。

「此でも駄目なら……」

……仕方ねえ。

「究極だが……私でもやりたくなかったが……
あの手段を使うか……？」

「！何ナノ……其ノ手段ハ？」

だが……今は大っぴらには出来ない……

「……耳貸せ」

兎マリスが顔を戻し、耳を傾けた。

予想通り、裂けた左耳を大きく開けて……

私は耳の口の中にそれを話した。
いつ首を持っていかれるか内心ビクビクしながら。

「!!」

……予想通りの反応だ。

「だが、もう少し様子は見るとしよつか……」

今むやみに動いてもダメだ。

其に……奴等の情報も知りたいしな。

「追っぞ」

私は飛んで、敵を追いかけた。

兎マリスも巨大なひとつ目のハエに変身し、私の後を追った。

マリスが恐れた唯一の人物〜前編

L I L Y B L A C K

〜魔法の森

私達は、大分離れた草むらの中から
やっと追い付けた目標を見ていた。

視線の先には、私が目標にしているリリーホワイト、
そしてマリスが目標にしている一人の剣士と一匹の兎が
大木の根元に腰かけていた。

「ドウヤラ、休憩シテイル様ネ……………」

隣には、敵の一匹である兎、鈴s……………（名前が長くて呼びにくい）
〜もついい…!! 兎に擬態したマリスがいた。

まあ、いつもの事だったから気にしない。

「……………ネエ？」

「？何だ？」

「アノ手段ツッテ、イツニ使ウノカシラ？」

「！まだ待て……………あれはいざという時、じごくという時に使うんだ。
むやみに使って失敗すれば、全てがおじゃんになりかねん……………!!
其にしばらく奴等の勉強をさせる……………さっきの二の舞はまっぴら

」d

「！誰力来タワ……！」

「!？」

視線を前に戻した。

アイツ等の前にある草むらから一人の女性が出てきていた。

私が見たことがない奴だった。

またしても私はイライラした。

〜どうして此処は、私の知らない事ばかりなんだ……!？」

しかし、赤いな……

背中には紫の禍々しい翼まである……

身長からして妖精じゃねえな、アイツア……

「お前、アイツを知ってるか？」

……返事が来ない。

「？おい？聞いてなかったのか？」

首を曲げて再びマリスを見た。

兔マリスの様子が変わった。

青い瞳が今まで見たことがないくらいに縮んでいて、さっき怒っていた時よりもさらに擬態が解けかかっていた。身体のうちこちが黒色に戻っている。

(！「イツ、怯えてやがる……!!」)

私はひと目で判った。

だが、幻想郷の各地を襲い、破壊と侵略の限りを尽くすマリスが
此ほど怯えるなんて余程のことだぞ!!
アイツ、いったいどんな人物なんだ？

「……ワヨ」

「え？」

「逃ゲルワヨ……！早く……!!」

「!?おおおい……おい……!!」

私は兎マリスに羽を引っ張られ、その場を退場した。
羽！引っ張るな！デリーケートゾーンだぞ、其処!?

……出番も無いまま退却かよ……？
訳わかんねえな、ったく……

YOU MU

魔法の森

私は、魔法の森にある一本の大木の根元にもたれかかっていた。

傍ではうどんさん、そして彼女に抱かれた
春告精、リリーホワイトが眠っていた。

私達が此処で休憩している理由は、
このリリーホワイトさんが先刻の出来事で止まらなくなった
体の痙攣を療養する為だった。

うどんさんいわく、見た事もないものに対する
恐怖が痙攣の原因らしかった。

リリーホワイトさんだと、さっき私達に
飛んできたミサイル型のマリスがそうらしい。

人を喰い、其の姿や能力をコピーするマリスが
ひとつ目をギラつかせ、目の前まで高速で
近付いてくる様子を想像した。思わず身震いをする。
決して武者震いではない。

(マリスが、トラウマにならなかつたら良いんですけど……)

眠るリリーホワイトさんを見ながら、そう思う。

私が起きていた理由は、言うまでもなく二人の護衛だった。
二人に何かあつてはいけない……

其の事が頭にあつたのか、起きずにはいられなかったのだ。

リリーホワイトさんを見ていると

彼女を抱いているうどんさんにも当然視線が移る。

(……可愛いですね……寝顔……)

思わず顔が綻ぶ。

敵が来ないかという緊張も緩んだ。

!?いけない……

こんな時に敵が来たらどうする……！

油断してる時を突かれたら、

うどんさんを……二度と見られなくなる……！

其だけはいけない……あつてはならない……！

其に私は誰かの護衛をする事にある一種の誇りを感じていた。誰かを守る事が私、魂魄妖夢にとって誇りだったのだ。

私は、以前まで幽々子様の護衛をしていた時を思い出すが、頭を振ってすぐに其等を閉めだした。

最近此の事を思い出すと、うどんさんに申し訳ないと思いはじめていた。

(だから今は……心を鬼にする時だ……！)

私は周りを見渡し、敵の襲来を警戒した。

すると、

ガサガサ……

「此処……『森』っていつのかしら……？
随分複雑な構造をしているのね……？」

「……此の場所……さっき通った場所と同じよう気がしますが？」

「そう？私からしたら全然違う場所に見えるけど？」

私達がもたれている大木からそう遠くない目の前の草むらが揺れ、話し声が聞こえた。

声からして女の子が二人のようだ。

「誰だ!？」

私は腰を半分あげ、背中の二本の剣の柄に手をかけた。

こんなところに普通人間は来ない……

まさか、此処までマリス達が捜しに来ているのか？
有力な住民の能力を可能な限り喰い尽くすために……

「！ねえ聞いた？人がいたわよ！」

「ですが危険ですよ……もし襲って来ましたら……

私が先に突入します。貴方様は後から……」

「大丈夫よ、此処は私に任せて……」

そして草むらの中から一人の人が出てきた。

今まで見たことがない人だった。

身長は私やうどんさんよりも高く、大人の女性の雰囲気か漂っていた。
た。

……まるで仏様の様な微笑が顔にあっただからかもしれない。

赤いゆつたりとしたローブのようなものを着用している。

髪の毛は銀色で、木漏れ日を反射して光っており、

一か所だけ髪の毛が結われていた。

背中には紫色に光る、六枚の翼が広げられ、
六枚全てに紅色の禍々しい模様が浮き出していた。

その翼からして、種族は人間ではない事は明らかだ。

じゃあ妖精か…？もしくは、紅魔館の吸血鬼
レミリア・スカーレットさん達のお仲間…？

いや…妖精にしては大きすぎるし、

第一、吸血鬼という事はある得なかった。

……まだ昼下がりに入ったばかりなのだ。

「……もう一人いるんでしょう？」

どうして私達から隠しているんです？」

二本の剣…楼観剣と白楼剣を抜きながら、私は尋ねた。
会話からもう一人いることは既に把握できていた。

ならばソイツと戦う為に、霊力を温存しておかなくてはいけない。

其の人は剣を見て少し驚いたようだった。

しかしすぐに表情を戻し、恥ずかしそうに言った。

「あのね……私達ね……迷っちゃったのよ」

カランツ、カロオン……！

楼観剣と白楼剣を取り落してしまった。

すぐに拾おうとするが、手が動かせず拾えない。

(！え……??)

視線は相手に向けたまま、
体が硬直してしまっていた。

其の人物は微笑んでいた。

が、其の薄く開けている目からは
私では形容する事が出来ない、「何か」を感じた。

私はすぐに何が起こったのかを理解した。

(射すくめられた……!?)

何故だ……？ただ一言かけられただけなのに……！

その時私は、蛇に睨まれた蛙さながらの様だった。

(何をしている……！)

誰かの護衛をずっとこなし、沢山の強敵と
戦って来たのに、たった一人の敵に気圧されるなんて……!!)

そう言い聞かせても、やはり無駄だった。

私はすっかり怯えてしまった。

其の人が足を一步、私達の方に踏み出した。
私は無意識のうちにも其に合わせて一步下ろうとした。
動かせる事から、身体の硬直はどうやら解けたようだ。

だが解けたばかりだからか、うまく動かせず、
バランスを崩して、お尻から地面に落ちた。
其のまま手と足で無様に後ずさる。

その瞬間の私には誇りもへつたくれもなかった。情けない…

その人は歩を止め、途中私が落とした二本の剣を拾い上げる。

信じられない……長すぎて並の人間では扱えない楼観剣を、
片手で軽々と持ち上げるなんて……

「ふむふむ……此処には
こんな素晴らしい剣があるなんてね……」

二本の私の剣を、まるで値踏みでもするかのように眺めている。

「まあ良いわ」

そして、二本とも両手に持って再び此方に歩いてきた。

私は嫌な予感がした。

まさか……其の剣で……!?

だが、白楼剣は私達、魂魄家しか使えない筈……
其を知ってるかどうかは判らなかったが、
あの様子からだ……

(本当に……何者だ……?)

もし…白楼剣が使えるのなら……
私の知らない…魂魄家の者か?

其とも、マリスが襲い、手に入れて擬態した新しい姿なのか?

其とも……?

剣を二本とも取られてしまったら、もはや私になす術がない……

せめて……うどんさん達は守らないと……!!

私は震える体に鞭を撃ち、
リリーホワイトさんを抱いて眠る、うどんさんの前に移動した。
半腰になり、少しでも彼女達を敵から隠せる様に尽力する。

汗をすごくかいているのが判る。
だが、其を拭う時間など私にはない事は判っていた。

其の人が、遂に目の前に立った。
顔は相変わらず笑っていたが、私を見下ろす目は何処までも冷た
かった。

両手は、私の剣の柄を握っていた。

右手に楼観剣を持っていた。

覚悟を決めて、目をつぶった。

まぶたの裏で私の剣が、私に対し振り上げられる様子を想像してい
た。

どちらで斬るのか……白楼剣か？楼観剣か？はたまたは両方か？
だが、どれにしても幽霊の性質を半分持つている私には
致命的である事に違いはない。

だが、そんな事はどうでも良かった。

うごんさん達が切りつけられるよりはずっとマシだと思っていた。

其の時私の脳裏にもう一人、浮かんだ人物がいた……

(……幽々子様……)

……貴方様を思い出す事を拒んできた……

こんな……不甲斐無い私を……御許し下さい……

カチャッ……

金属音がした。

私はますます目を堅くつぶった。

そして、風を切る音が聞こえた。

「チエエイ!!!」

「!?イダ……!!」

私は両方の剣の柄で頭をしばかれていた。

「アハハハ……大丈夫よ、そんなに怯えなくても……!!」

目の前で笑い転げている。

まったく訳が分からなかった。

頭も痛かった。

「……?い……いつたい……??」

「!痛かったの……?ごめんなさい……!」

それほど強く振ったつもりは無かったんだけど……

あ、此返すわね?」

気付けば、両手に白楼剣と楼観剣の柄を握らされていた。

本当に訳が分からない……

「出てきて良いわよ!ちょっと休憩してただけみたい!」

其の人は、先ほど自分が出てきた草むらに声をかけた。

其処から出てきたのは……

「!?咲夜さん……!?」

いや、咲夜さんとは少し違つところがある……違つ人物か……?

咲夜さんが銀髪なのに対し、偽メイドは金髪で青ではなく赤を基調としたメイド服を着ていた。

「私は神綺。此方は自信作の夢子ちゃん！」

!?え…? 「自信作」……!?

「夢子でいじります……」

神綺様、お言葉ですが『自信作』は……」

「ーゴメン、流石にダメよね……取り消しっー！」

「…恐縮です」

……追いつけない……展開も……コントも……

「みよ……みよんちゃん……」

はっと後ろを振り返る。

うどんさんが起きていて神綺さん達におびえた目を向けていた。忘れていた……うどんさん、人見知りなんだっけ……!

リリーホワイトさんも同じだった。

むしろ、うどんさんに締めあげられて苦しそうだ。

「そ、そそ……其の……人達は……!?」

「だ……だ……だーれでーすかあ………??」

ガタガタ震えている。

拍子でトラウマが再発したら大変だ……！

「え……と……神……綺さん？」

「？んんんん？」

「もう一度……自己紹介……」

「よし来た、良いわよ！私は神綺。此方は夢子ちゃん！」

「夢子でござります」

「簡単に言つとお………私、魔界を創った人ね！

因みに夢子ちゃんは魔界のメイドさん!!」

「!?魔界いい……!?」

私達は見事に度肝を抜かれてしまった。

「!其より、貴方達………アリスちゃんが何処にいるか知らない?

あれから随分見てないけど……元氣してるのかしら……?」

!?アリスさん……!?

私は耳を疑った。

此の人達、もしかして……アリスさんの過去を知っている……!?

マリスが恐れた唯一の人物〜後編

YOU MU

〜魔法の森

「神綺さん！」

恐怖が和らいできたのが、私の喉から出てくる声はさっきと比べ、震えが少なくなった気がした。

「？何〜？」

「アリスさんの話……詳しく聞かせて下さい！」

私は思わず神綺さんに頼んでいた。そしてすぐに二本の剣をしまっただけでなく、慌てて背中の中に戻した。

アリスさんが「孤毒」にかかってしまった理由の一つに

「強い孤独感、深い心の傷」だと、永琳さんがテレビで仰っていた……其を幽々子様と見ていた事を思い出した。

今度は閉め出さなかった。

私の中にある大切な情報……

アリスさんが其の感情を抱いた理由……

もしかしたら、アリスさんの過去にあるのかもしれない。

ならば、是非とも聞かなければ……！

「……続き、気になったのね？」

突然神綺さんが半目になった。

半腰の私の前でしゃがむ。

私はまたもや動けなくなつた。

今回は目と呼吸のために喉しか動かせなかつた。

一方神綺さんは、半目のまま私のじつと見つめる。

そして、左手で私の顎を少し押し上げ、

右手の人差し指と中指、薬指の三本で私の喉をくすぐり始めた。

遊んでいるのか……

くすぐつたくて仕方がない。其に……怖い……

もしかしたら、此処からいきなり手刀で

喉を貫かれるんじゃないか……？

つばを飲み込もうとしてもその為には喉は動かせなかつた。

(いじわる……)

私は、うどんさん達の方に目だけを動かした。

ただ、助けを求めたわけではなかつた。

(私の方は大丈夫ですから、

貴方はリリーホワイトさんを守っていて下さい。

もう一人は何をするか分かりませんから……)

という、テレパシーでも伝わるかどうか怪しい
アイコンタクトをしたいが為だった。

しかしどうやら其が伝わったらしく、うごんさんは
リリーホワイトさんを堅く抱えながら、夢子さんの方に目を向け
た。

夢子さんは瞬きもせず私の方を見ていた。

「さて、よし……話そっかー」

神綺さんは私の喉から手を離して立ち上がった。

途端に、私は動けるようになった。

此が、魔界を作った神綺さんの……力なのか……?

其とも、只単に其の圧力に晒されて……緊張してただけなのか……
?

さっきまで触られていた喉に手を当てながら考え込む。

「じゃあねえ……二人とも、良い??」

突然神綺さんが「一番っ!!」って言うかのように
右手の人差し指高くあげた。

完全に油断していた。

考え込んでいた私は其を始終見ていたうどんさん達に比べ
反応が遅れてしまった。顔を急いで上げる。

しかし、其の指は既に下ろされ

ある言葉と一緒に私達に向けられていた。

「正座っ!!!」

ババツ
!!!!

正座には慣れていた。幽々子様のもとで働いていた時、
あの御方の前では無礼のないよう、いつも正座だった。

うどんさんも永琳さんの前で座る時はそうだったんだろう。
私の隣で正座をしていた。

「リリーホワイトさん、此处に座って下さい」

うどんさんが其の瞬時の出来事に呆気に取られていた
リリーホワイトさんに膝の上に来るよう急いで小声で催促してた。
彼女は其に答えてフヨフヨと飛んで其処に着陸した。

「速いわね……其のスピード、結構好きよ？」
ちてちて……」

正座する（リリーホワイトさんを除く）私達の前で、
静かに立つ夢子さんの隣で、神綺さんは話し始めた。

自らの翼を黒く変色させながら……………

「……………さっきも言った様に、私は此処とは違う」

魔界という世界を作ったの。つまり私は其処の神様っていうわけ」

何度聞いても驚いてしまう。

この人は、幻想郷とは違う次元で

幻想郷とは違う世界をたった一人で作り上げてしまった…

私が腰を抜かしてしまったのは、訳ない筈だったと

今更だが痛感した。

「そして、其と同時に私は、魔界に暮らす住民達も作ったの。

其の中で最強クラスなのが……………此処にいる夢子ちゃん！」

神綺さんの隣で夢子さんがメイドらしくお辞儀をする。

人を……………作り上げた??夢子さんも……………!?

！だから、さっき神綺さんは彼女を「自信作」と言っていたのか……………

「実はアリスちゃんも、魔界出身なのよ」

「!!じゃあ、アリスさんも……………貴方が……………!!」

「まあ、そんな感じね……」

私は絶句した。

此の人が……アリスさんを……魔界の何もないところから……？

「あ、質問する時は手えあげてね？判った？」

「はい……」

従わないとマズそうだ……気を付けよう……

「で、私達はそんなこんなで楽しく暮らしてたのよね……」

ふと話を止め、神綺さんは両手を後ろに組んでさっきまで私達がもたれていた大木を見上げた。

まるで、その時の魔界を思い出すかの様に……

「ところが、そんな中で突如異変が起きてしまったの」

「!?」

視線を私達の方に戻した神綺さんの顔が突然暗くなった。

其の目付きは、さっき私が感じたものと似ていた。

殺気すら感じた。

「幻想郷と言われている此処、人間界から

四人の人間と妖怪がやってきて突然暴れ出したのよ。
其の者たちの名前は……博麗霊夢、霧雨魔理沙、魅魔、幽香」

「!!」

れ、霊夢さん達が……神綺さんの世界で暴れた…!?

「ですが……どうして……??」

「!質問は手を上げて言う事っ!!……でも、良い質問だから答えてあげるわ」

………今のは流石にマズかった………次からは本当に気を付けることにしよう………

「どうやら、魔界の民間旅行会社の者達が、
魔界人を此の世界に勝手に送り出していた事が原因らしかったの
よね………
其を訴えるために此方へ乗り込んできたのよ」

? 旅行会社………?

そんな企業が、あちらには存在するのか………

でも、これ以上深追いするのもアレだった為、
其処は黙っている事にした。

「私達は、暴れられるのはたまらないから

其を食い止めようと戦ったんだけど、負けちゃってね………
もう魔界人を人間界に來させないと無理やり約束させられて
私は此処と、魔界を通ずるゲートを閉じたわ。

其で異変は終わりを告げ、魔界は平穩を取り戻したかのように見え

た……」

「ところが、其を黙ってなかったのがアリスちゃんだったの」

「！」

突然アリスさんの名前が出てきたので、私達はびっくりした。此の異変に、アリスさんがどう関わっていたのだろうか？

「魔界での防衛戦の際、霊夢達に負け、

さらに一方的に此方のせいになされたのがたまらなかつたらしくて、リベンジをするべく、もう一度彼女達に勝負を挑んだのよ」

「でももう一度コテンパンに返り討ちにされてね……」

其の後、勝負をした彼女達に酷い事をされたらしいのよ。

何でも、雑用として酷使されたり、縛られて本を盗まれたり……
メイド服を着させられたり、ストーカーされたあげく
究極の魔法をラーニングされたりとか……」

内心苦笑いをする。

……霊夢さん達のことだ……

喧嘩を売ってきたアリスさんを正当防衛と称して成敗し、
逆に自分達のために利用したに違いない。

アリスさんもいろいろと苦勞をしてたんだな……

「アリスちゃんは其でもおう……完っ全に頭に来た様で

ある日、私の前でこういったのよ……

『アイツ等をブツ殺して!!神綺様、そして魔界の皆の屈辱を晴らすわ
』!!

そして魔界を抜け出して、それっきり……連絡も一切来なかったわ
……」

神綺さんは力なくうなだれた。

そんな事があったのか……

アリスさんはこうしてこの幻想郷にやってきたのか……

魔界に着せられた汚点を払拭するという、大きな使命を背負って

……

(?!もしかして……!)

アリスさんは霊夢さん達に三度やられるきつかけ……

西行妖の異変を起こした幽々子様を凄く憎んでいた。

もしかしたら其処に、其の人間界への怨み、そして個人での怨みが
彼女を後押ししてたのかもしれない……

ふと、私の頭にある疑問が浮かんできた。

「神綺さん……」

私は今度は手を挙げながら声をかけた。

「?んん?まだ質問があるの?」

「はい……魔界からの入口は閉じられたのに

貴方達は……どうして此処に……?」

「！あ……」

声を出したという事は、うごんさんも其に気付いたんだろう。其から慌てて両手で口を塞いでいた。

「！其もいい質問ね！私が聞いてほしかったところ、ピンポイントで指してくる！貴方、最っ高よー！」

ベタ褒めだった。

疑問に思ってくる。此の人は本当に魔界の創造神なのか……？

いや、さっき私は其を二度、その身をもって味わっただろう……！

神綺さんが質問に答え始めた。

「私達が敗れた後、私が人間界へのゲートを閉じたと言ったわよね？もう、魔界の者が人間世界に来られないように。

でもその後、魔界人達は勝手に、しかも自力で人間界に行ける魔法を開発したの。

結局あの約束は知らぬ間に破綻を来してたってわけ」

……懲りないんだな、其の魔界の人達……

其程幻想郷に来たかったんだな……

手をあげてもう一言。

「……其で、神綺さん達も……？」

「そうーもう、無効になってるんだったら

私達もやっちゃえ!!……っっていう雰囲気だったわね」

なんて……ルーズな……

思わず本当に苦笑いをしてしまう。

「!そうそう……人間世界からもう一回、

訪問者があったわ。其もとてつもなく大きい船に乗ってきてね」

「!?船……?」

リリーホワイトさんが声を出す。

しかし、神綺さんは其を気に留めなかった。

「でも今度は、私達とは関係がないらしいのよ。

何でも人間たちに恐れられ、人間たちの手により此方に封印された、

とある大魔法使いを復活させるために来たらしいのよね」

私は、其の話に聞きおぼえがあった。

手を挙げる。

「神綺さん……」

「!質問ね……どつぞ?」

「其の人って……もしかして、尼さんではありませんでした?」

「!確かそんな事を話してたわね……でも、どうして知ってるの?」

確信した。

其の人物は、最近幻想郷に建立した命蓮寺の住職、
聖白蓮さんに違いない。

私は前に幽々子様が仰っていた話を思い出す。

伝説の僧侶であり、弟である命蓮の絶命により死を恐れ、
妖力に近い術によって若返り、不老不死、長寿の力を手に入れた白
蓮さん。

人間、妖怪と分け隔てなく接していたが妖怪との共存する事を望み
妖怪に加担していたことが人間達にばれ、悪魔扱いされ、遂には封
印された。

其処が……神綺さんの創り上げた、魔界だったなんて……！

「……何を驚いているの？」

「!?い、いえ……！すみません、なんでもありません……」

「まあその時は、其の人を連れて帰っておしまいだっただけど……
アリスちゃんがいる事を聞いておけば良かったなあ……」

そして私は、手を挙げた。

「?また質問ね?さてさてえ……今度はどんなポイントを突いてくれ
るのかしら?」

「……いえ……質問ではないのですが……」

「?じゃあどつしたの?トイレに行きたいの?」

隣から、うどんさん達の視線を感じた。
神綺さんに気を配りながら隣に顔を向ける。
二人とも不安そうな目だった。

私は頷く。

うどんさん達も頷き返す。

此は……此だけは、言わないといけない……！

「アリスさんは……此の世界にいます。元気ですよ」

「!? 本当!?!」

神綺さんが、途端に表情を変えた。

傍で静かに話を聞いていた夢子さんも思わず反応していた。

「ただ……その……」

「!?! どうしたの!?! なら場所も判るでしょ!?!」

お願い、言って! アリスちゃんが何処に居るかを……!

神綺さんが私の肩を掴んできた。

懇願している。

まるで誘拐された子供の場所を知りたがる母親のようだった。

うどんさん達が半分立ち上がり、身構えた。

私は首を振った、二人を制した。

「大丈夫よ！アリスちゃんを誘拐して
身代金……っていつつもりじゃないから！
只会いたいただけなのよ……！だから……!!」

……此を神綺さんが聞いたら……どう思うだろう……？

「今の所在は……誰も判らないです」

「!!え……」

神綺さんが一瞬表情を凍りつかせた。
そしてそのまま膝をついた。

私の肩からも手が離れる。

「其に彼女は……此の世界を……幻想郷を、支配しようとしているんです」

そういつてハツとする。

言い過ぎてしまったかもしれない。

神綺さんはうつむいてしまったまま動かない。
髪で完全に目が隠れていた。

「?……神綺様？」

夢子さんが後ろから神綺さんに声をかけた。
其の額には大量の汗をかいてる。

本当に余程の事をしてしまったかもしれない。

私は神綺さんから距離をとり、
背中の楼観剣の柄に手をかけた。

隣にうどんさんも同じく距離をとって手をピストル状にしていた。
リリーホワイトさんは不安げな表情で、彼女の背中に捕まっていた。

すると、突然神綺さんが顔をあげた。

「良いもんっ!! そんなに会いたくないなら良いもんっ!!
此方から探し出してあげる!!」

顔を赤くして、頬を膨らませてすねていた。

私達は呆気に取られた。

リリーホワイトさんは此で二度目になる。

……本当に、本っ当に魔界を一人で創ったんだよね?

「行くわよ、夢子ちゃん!!」

「!か、かしこまりました……!!」

神綺さんが小さくジャンプした。
するとその足下に大きな穴があいた。

紫様のとは別のものだ……!

其のまま、穴の中に落ちていった。
夢子さんも慌てて其の中に入る。

そしてすぐに二人の上半身が出て来た。
ギョツとする。

「あーアリスちゃんの事、教えてくれてありがとうね？バイバイ!!」

「し、失礼しました……!」

再び穴に入り、穴は消えてしまった。

茫然としていた。

どれだけ豆でっぼうを喰らった事だろう？鳩ではないが。

しばらくして穴のあった処を見ながら、私とづどんさんは一言。

「……道、迷わなかったんじゃないあ？」

私達は森の出口に差し掛かっていた。

此の先にさつきとは別の人間の里がある筈だ。

「……アリスさんにあんな事があつたなんて……」

「ええ……何だか、可哀想になってきました」

アリスさんは、魔界の数えきれない人全てを代表し、

其の人達を不遇により付けられた汚名から守ろうとしたのかも
しれない。

そう、さっき私が命を賭してまでうどんさん達を守ろうとした様に

……

其を思っていると、

私は、ある感情にとらわれている事に気が付いた。

泣きたくなっていたのだ。

アリスさんが可哀想だと思ったのもあるのかもしれない。

でもその時私には、別の感情があつた。

「……みよんさん？」

知らない間に立ち止まっていた様だ。

うどんさんが振り向いて立っていた。背中のリリーホワイトさん
も此方を見ていた。

「……怖かった……！」

正直に言つと、其が本音だった。

あれほどの恐怖は此の先そうないかもしれないが、其程怖かったのだ。

相手はどれだけ滑稽に振る舞つてくれようとも、

私から畏怖の念が払われる事はなかった。

神綺さんの目から何かを感じたのも、其が原因だったのかもしれない。

泣いてはいけない、泣いたら情けないぞ……そう思つても、涙は止まらなかった。

私の脳裏に再生されていく……

神綺さんの冷たい瞳。自らの剣を振り上げられる音。喉をくすぐる指の感触。

そしてうつむき、髪で目の見えない神綺さんの横顔。

「みよんさん……」

声がして、私は顔をあげた。

うづんさんが私の前に立っていた。

両手を広げている。

「来て下さい……みよんさん……」

躊躇いは不要なかった。

此の魔法の森での出来事は、今後も私の中でずっと残る事になるだろう。

だから其の分、うどんさんの胸の中は暖かく、安心できた。

うどんさんは、優しく頭を撫でてくれた。

リリーホワイトさんは何も言わずにうどんさんの後ろで目一杯、自らの羽根を伸ばしていた。

そのせいか、まるでうどんさん自身が妖精になったかのような様子だ。

「……私も、貴方のピンチに気付く事が出来なかった……
「はじめなさい……みよんさん……」

「……二人が……二人が無事で……良かったああ……！」

春の午後の日差しが、何処までも暖かだった。

黒は、黒で、黒なりに…

LILLY BLACK

影の森 黄昏の沼地下

「ああ〜あ……」

テーブルに立つ「パソコン」の前に置かれた一冊の本。
椅子の上から其の本を読みながら、私は溜息をついていた。

怯える兎マリリスにより

リリーホワイトが混じってた連中から離れた後、

たまたま近くにあった一か所の隠れ家に、私はマリリスを案内した。

因みに、魔法の森の外れにある此の辺りの森は、

既にマリリス達が木々を含む、全ての生物を完全に浸食し尽くしたら
しく、

「影の森」と呼ばれ、誰も近寄らない場所になっていた。

其処にある「黄昏の沼」のほとりに地下の隠れ家に続く入り口がある。
る。

！おっと、隠れ家は此処だけじゃないぞ？

幻想郷の各地に、私の隠れ家は存在するからな!!

……にしても、あれだけ乱雑に羽を引っ張ってくれるとは……

途中、いろんな意味で危なかったぞ、ありゃ……

そんな私の後ろからは擬態を解き、分裂して新たに三月精に擬態し
た

三体のマリスが、一緒に私の見ていた本を読んでいた。

タイトルは『幻想郷縁起』。

転生を繰り返して、今は九代目になったという稗田のガキが編纂したという代物だ。

「……俺も危険度『極高』になりたいけどなあ……………」

今私は花の妖怪、風見幽香のページを見ていた……………ていうか、いつも其処しか見てなかった。

其処に載っていた危険度『極高』の二文字は私の何よりの憧れなんだよな……………」

人間友好度『最悪』は私も同じようなものだったから良いけど。

同時に花の異変の時、彼女と対峙した時も思い出していた。

出現出来たと思えば襲ってくる、避けようのない弾幕の雨あられ……………」

「いとも容易く行われるエゲつない行為」とはまさにあの事だと思っ。

「……………なあ、どうしたら『極高』になれると思う？」

試しにマリス達に聞いてみる。

「コイツ等は人間も襲っし、其の姿を利用して二次災害も引き起こせる。」

『極高』くらい行ってもおかしくはない筈だ。

……………普通のアリスより、危険じゃねえか？

すると、サニーミルクに擬態したマリスが、

「……逆ニ其ノ姿デイル理由ガ知リタイワ？」

顔の右からこんな質問をかけてきた。

確かに今、私の姿は周りを取り囲む三匹の妖精マリスよりずっと大きかった。

恐らく人間の大人の女性くらいの大きさはあるだろう。

コイツ等いわく、博麗の小娘よりも大きいと言ってるが。

其に黒い角縁の眼鏡も掛けている。

イカすだろう？ ひと昔に流行ってたリケジョって雰囲気だ。

…白衣は何故か嫌だったから着てないが。

「私は、自分のアジト内では此の姿の方が落ち着くんだ。

口出しはしないでほしいがな……」

「ダカラ、ドウシテ其ノ姿ニナレタノカガ気ニナルノヨ！」

今度は左からルナチャイルドに擬態したマリスが

問い詰めてきた。…ったく、クリみたいな口しゃがって……

「此はクスリの影響だ。アジトに入ると必ず服用してる」

「？ アンタ妖精デシヨ？ 其ノ姿ニナル理由ツテアルノ？」

いちいち質問が多いな……

思い切って俺はカミングアウトを試してみる。

「…私は自分の身体が小さいのが一種のコンプレックスになってん

だ

「?ドウシテヨ?」

「前までな、よく里でうろついている人間のガキ共に

『チビ、チビィ!!』って馬鹿にされてたんだよ。

買い物に行く時なんかしょっちゅうだぜ?アレはムカついたな

……

『てめえ等の方もチビのくせに、よくそんな口が叩けるなあ!!!』

って怒鳴ったらよ。ピーピー泣いちゃって、親バカ共にボコられる
始末だ」

「……其八、自業自得ヨ」

私の頭の上からスターファイアに擬態したマリスが
冷たく言い放ちやがった。

「五月蠅えな……どうでも良いだろ……」

てか、もともとお前らには関係の無い話だろうが」

「何デ屋外デハ服用シナイノ?」

「こんな姿だと目立つし、やってる事にも目を付けられやすくなる。

俺は隠密派なんでな……外では私情を殺してるってわけよ」

「……色々大変ナノネ、アンタモ」

!同情か?……少し嬉しいかも……

「デモ大丈夫……扁平……其モステータスダカラ……」

「……ひじきのりにしてやるつか、てめえ等？」

…いきなり何でそっちに話を移すんだ？

よりによって一番気にしてたところを……こつもあっさりト真ん中を……

そう、クスリを利用してアジト内のみ毎回身体大きくしてるのは良いものの、

何故か胸だけはそのままだった。絶壁そのものだった。

はぁ……どうしてこつ……全体には作用されないんだろうか……

身体を見下ろして、もう一度溜息をついた。

そして目を本、そして「パソコン」の画面に移す。

画面にはさつき目標達に近付いていた、銀髪の女性の顔写真があった。

(……神綺、ねえ……?)

情報によるとコイツは此の幻想郷とは違う世界、「魔界」を創造したボスらしい。

そして驚いたのは、其処の住人達……生命体も創り、其の中には、コイツ等の本体であるアリスも入っている事だった。だから、アイツには逆らえないのか……納得した。

見ていた画面から、妖精マリス達に目を移した。

私が持つ『幻想郷縁起』の幽香のページから先のページへめくらせようと頑張っている。

……コイツ等は何もないところから創られた生命体の、感情が具現化したモノに過ぎないのか……

自分が創ったヤツの復讐心が、一つの世界に滅亡をもたらしてるとなるよ、

どう思うだろうな……悲しむだろうな……俺には関係ねえけど。

ぼんやりそう思いながら画面に目を戻し、「マウス」を使って画面を「スクロール」させる。

となると……創られた魔界人はまだいる筈だが……

すると一瞬体が震えた。此は……

「?ドウシタノヨ?」

「!マサカ…副作用ガアル訳…!?!」

「……違いよ、トイレだ」

私は『幻想郷縁起』を閉じて立ち上がった。

傍にあったトイレの扉を開けて、入り、そして閉めた……

と、見せかけてもう一度開く。

「いろんなものを下手にいじるなよ!!?
特に其処の棚の中は絶対にな!!」

そうして扉を閉め、鍵をかけた。

「……………」

案の定だ……やっぱりこうなると思った。

私がトイレから出てきて真っ先に目に飛び込んだのは、
目の前で不完全に融合し、化け物状態になった三月精マリスの姿
だった。

私の足元にはかなり大きめの瓶が、割れてはいないが転がって
いる。

『チヨットオオオオ……ドウナツデルノオオオオ……!!??』

三匹の声の不協和音になってる……背筋が凍りそうだ。

「言わんこっちゃねえ……悪戯も大概にしるよ……擬態すると思考まで
同じになるのか……?」

まあ、幸い薬同士調合するまではしてねえみたいだが……」

かがんで足元の瓶を拾い上げる。

「コイツは……『融化剤』だな。溶けにくい薬同士を互いに溶け易くするもんだが、

重くて持てず、他のヤツに引っかけたんだろう？」

んで、拭こうとしてくっつき、マリスが誤って溶けだし、其の様に
なった……

……やる事が単純なんだよ、妖精風情は……」

『!!妖精ハ、アンタデジヨウガアアア……!!!』

「俺を他の妖精と一緒にするな。

しばらくしたら元に戻る筈から、其のままでいる……反省するついでにな」

背を向けた。まったくガキも……妖精も嫌いだ。

「はあ……コイツ、結構重要なのに……」

また失敬し直さなきゃいけないじゃねえか……畜生……!」

悪態をつきながらさっきの「パソコン」がある机に向かった。

其の上に空瓶を置く。

すると、

「フフフ……フフフフフフ……」

「?どうした、そんなに笑って……そんなに自分がやらかした事が可笑しいか?

それとも自分の姿にか?

まあ、融合に失敗したお前等は可笑しいどころか、逆にキモいが……」

そう言いながら振り返ってみた。

三月精の様な化け物マリスは消えていた。だが、かわりに一人の妖怪が立っていた。

風見幽香が………立っていた。

顔には本で見続けていた、あの笑顔があった。

本で持っていた、純白の傘をたたくで持っていた。

「!!!」

面喰ってしまった。な…何で此処に!!?

思わず「アイエエ（ry）」と叫びたくなるが、流石に抑える。

「だが待てよ？……！此処にいるっていう事は……！！

「ま、まさか……幽香まで……やったのは本当だったのか…!?
私は……てつきりガセネタかと……!!」

「！私ハアイツヲ知ツテタノヨ？ズウ……ット昔カラネ？

サテ……悪口ニツイテ、何カ言ツテオキタイ事ハアルカシラ？」

シャキイーン……!!!!

突然幽香マリスの持っていた傘の先端から、ドス黒い鎌の刃が飛び出した。

其の根元には、向日葵の花びらを纏った大きな目玉があった。

やべえ……狩られちまう……！

！まさか……さっきの「融化」と幽香、掛け合わせてるつもりじゃねえよな……？

へへ……こりゃあ座布団どころの騒ぎじゃねえぞ……!?

!?ま、まま待った……傘の持ち方……バットみたいになってる……！

まるでリサイタルに来なかった……眼鏡をしばくガキ大将じゃねえか……!!

!!そつだ……！

「お、おい！……大人の女性を襲つつもりかよ……？
幽香に……流石にそんな事をさせるつもりは……？」

よし……殺し文句だ……！

いくら幽香に擬態したとはいえ、此を言えば、
ヤヴァい事を行えなくなる筈……！

ところが……

「……此デ逆ニ喜ンデ下サル方モイラツシャルノヨ？」

……まさにブーメランだった。

「其二私ハ……コイツトハ屈辱的ナ思イ出シカナイノヨ？ ストーカーサ
レタノヨ？ 幽香ニ……！」

……こうなったら使いたくはなかったが……最後の手段か……！

「……だ、だからって……他人にそんなことをするの？ 暴力はいけな
いワ!!

お願いよぉ……そんな事しちゃダメエ……！」

「……色気ヲ使ツテモ無駄。 所詮アンタハ妖精ナノヨ」

……黒すぎる笑顔が言葉の追い打ちをかける……！

此以上バラバラニスルト、イクラ妖精デモ再生シ辛イデシヨ？」

「ありがとうございますっすっすっ!!!!」

「……ヤベエ……新境地「ユウリリ」……誕生しそつだった……
まあ、其もアリっちゃあ、アリだったかも……」

「ところでよ……奴等をきちんとマークしてるんだろつな？」

数分後、再生した身体を触って確かめながら、私は幽香マリスに訪ねていた。

「！勿論ヨ、偵察用ノ『私』達ヲ配備シテオイタワ」

薄く開けた瞼の下から、普段覗かない善の青色の瞳が俺を見る。
うへえ……瞳は違うが何度見ても迫力は変わらねえな……

「……流石……私の後輩だな……」

「勝手ニ決メナイデヨ」

「で、ソイツ等は今何をしてる？」

「……………」

顔をしかめてる。何があったんだ？

「……………森ノ出口デハゲラシテル」

当然驚かなかった。その後、異世界のお偉いさんと謁見でもしたんだろう。

怯えたカップルは終わった後、そうすると踏んでいた。所謂「吊り橋効果」ってヤツの影響だな。

！もしかして、謁見の途中にもしてたか？

だが其より気になる事は…………

「……………リリーホワイトはどうしてる？」

「何モシテナイワ……………只……………羽ヲ伸バシテルワネ」

だと思ったよ……………俺はウンザリした。

あの脳無しめ……………春告精と言われながら、春というものを理解しきれてねえんだ……………

だからそついう場面にあつたらろくに対応すら出来ない。

せめて、演出ぐらいいしてやれよ……………同じ春告精として嘆かわしいったらありゃしない。

……………其の雰囲気をブチ壊すのが俺の趣向だけ。

「なら、ラブラブ全開のところにお邪魔するところか……………

そろそろ薬が切れる頃だし……………直行するぞー！」

数分後、紫色に染まった森から小さくなった私と

一匹の大きなハエマリスが飛び立った。

あの最後の手段を使うなら、マリス達の情報だけじゃ足りねえ。
奴等の特徴をもっと知る必要がある……其の為には、奴等に接近する事も必要だ。

知らない間に、私は口の端で笑っていた。

…本当に久々だが…勉強するついでに教えてやるとしようか……

「お前達の春は……絶対に栄えないとな……!!」

え？嵐の前って静かじゃないの？BYEいし

YOU MU

人間の里

……目が痛い。

泣きすぎて真っ赤になってるに違いない。

私達は、人間の里を歩いていて。

勿論、うどんさんと朝食をとり、リリーホワイトさんと出会った里とは別の里である。

リリーホワイトさんもすっかり痙攣が治ったらしく、私達の周りを元気そうにフヨフヨと飛び回っていた。其の笑顔を見ると、思わずほっこりとした気分になる。

すると同時に私は、隣で一緒に歩いているうどんさんが視線に入っ
た。

そしてさっきの出来事が頭に浮かんだ。

森の出口で抱きしめたあの感触……

私を胸に預けてくれたうどんさん……私は………

思わず顔が真っ赤になる。

其を隠す様にうどんさんから視線を離し、うつむいた。

其の時だった。

「よっ……頭が春満開のパッパパー野郎共」

私達の上から声が聞こえた。

思わず私達は見上げた。

私達の前方上空から、一匹の妖精が降りてきていた。

前に花の異変の時に無縁塚で戦った妖精だ。

リリーホワイトさんの衣装を黒くしたような風貌だった。

だが、顔つきは前より変わっていて

黒い瞳に白眼は赤く、目の下には薄くクマがある。

「真っ盛りのカップルに寄生して……気分は良いか、リリーホワイト」
「？」

其の妖精が、皮肉そうに口をゆがめて言った。

すると、笑っていたリリーホワイトさんの表情がガラリと変わり、
一気に無表情になった。

其の口から出てきたのは……

「……やはり貴方が原因でしたか……薄々は感じていましたが、
まだ生きてたんですか、リリー『バラック』？」

「！俺をいつも死んだ者扱いするのは止める！あと、『ブラック』だ!!
粗い仮小屋と一緒にするんじゃない!!」

「口が粗いからそう呼ぶんです。其に妖精と違うなら死ぬじゃないですか…」

私は貴方を私から蔑ろにしたいから、好きにそう言ってるんです」

今迄に聞いたこともない様な、侮蔑のこもった口調だった。

其を聞いていた黒い妖精は怒りに震えていたが、
直ぐに勝ち誇ったような表情になって言った。

「だが、私が木を倒した他に、マリスって奴の影響でお前、
相当衰弱してたようだな？別の里で暴れてるのを見て、良い気分
だったぜ」

リリ ホワイトさんは、其の話題を完全に無視した。

「此処に来て、また命がけの窃盗でもするんですか？……『買い物』と
称して」

「！俺はてめえ等の様な野良妖精とは違うんだよ！

三月精みてえにそんな悪戯に、其処まで命もかけてねえし!!」

「…リ、リリーホワイトさん……あの妖精は……?」

私の隣にいたつとんさんがリリーホワイトさんに質問をした。

彼女は無表情のまま早口で答え始めた。

「リリー『バラック』です。似てほしくはなかったのですが、私の服を黒っぽくした姿です。いがみっぽくて、乱暴で、いつも私を消すことしか考えていない脳筋さんですよ。」

趣味は永遠亭から盗みに盗んだ、大量の薬での危ない実験です。まさに幻想郷不適合者そのものといっても過言じゃありません。

私は『アレ』と一緒に役割を持つてると思うと、嘆かわしいっただけありません。春告晴の役割をろくにこなした事も見た限り……見た限りでは無いのですのに」

さっき訂正を求められたのにもう直ってる。

相手を相当嫌ってるようだ。言い過ぎにも程がある。

でも其が本当なら、ろくでもないなと思った。

「成程…師匠が最近薬の減りが速いと仰ってたと思ったたら……」

貴方の仕業だったんですね!？」

うどんさんが叫んだ。

「!おいおい……一番弟子の兎さんよお。失敬してるのは普通医療に使わねえ」

薬ばっかりだろう。其にお前!そこまでばらす必要はねえだろ!？」

「同じでいたくないですが、同じ春告精として互いを知っておくべきだと」

思いましてね。さらけ出すのは意外と大事なんですよ?」

私はその言葉が胸に引っ掛かった。

互いを……知るためにさらけ出すんですか……?」

「ですが、もっと情報は提供するべきでは？」

リリーホワイトさんは不意に懐からピンク色の最新の携帯機器を取り出して

少し操作して画面をリリーブラックに見せた。

其を見たたん、リリーブラックの目の色が変わった。

「ウアアアッッッ !!!???
其、お……俺様の……!!!!」

そして、リリーホワイトさんは其の画面をそのまま私達に見せてくれた。

其処にうつっていたのは目の前にいるリリーブラックがまるで、今の姿から大人に急成長したかのような姿だった。

此方に向かってポーズをとっている。

「いたるところにあるアジトの中で盗んで合成した薬を使って、自分の身体を大きくして生活してるんですよ。妖精とは違つと自分を信じ込ます為にですね」

「……………てめえは変態か？何処まで私の事を……………!!!」

当の本人は、沸点を既に通り越していた。

顔に青筋が立ち、赤い白眼が更に血走っていた。

しかし、次の一言は……

「此の写真は、貴方がメールに添付して送ってくれたものじゃないですか。」

大きくなる薬を見つけたって自慢する為に」

「!?は……!??」

……悪い事企んでいるけど、其の分相当なマヌケと見た。送信した写真の存在を忘れていたとは……

「~~~~私を馬鹿にするのもいい加減にしろよ、スペルも持たない雑魚妖精があ……!!!」

「其は貴方も同じですよね？」

「!!!」

……にしても、リリーホワイトさんがどれだけ嫌ってるのかが分かる。

相手が言う事をことごとく論破して行っているのだから。おまけに暴露か皮肉を必ず付けくわえて。

……無視した部分もあったが。

「~~~~~おっと、こんな事を話をして来たんじゃないか

……話があるのは、カップルの……君達だ」

……どうやら、リリーホワイトさんの相手をするのは無理だと判断したらしく、

今度は私達に話を振ってきた。

「私がリリーホワイトを嫌ってるのは判ったろ？」

だからソイツを使って実験をしてやるうと思っんだ。

お前達も、本当は邪魔で邪魔で仕方がないだろ？」

だから……その……何だ……ソイツを此方に渡してくれると……
幸いなんだけどな……ダメか？」

『憑坐の縛』!!!」

ゴオオオツツツ
!!!!!!!

何故か恥ずかしがりながら要求を言ったリリーブラックの顔面に
私が指示して飛ばした半霊が直撃した。

『イリユージヨナリイブラスト』!!」

更にうどんさんの目から放たれた赤い光線が
追い打ちをかける様に彼女を飲み込んだ。

「????
!オゴッフェエエエエエエエ……!!!」

そのまま彼女は吹っ飛び、地を転がってうつ伏せに倒れた。

「……遠慮しておきます」

私は地面に伸びた妖精にこう言い捨てた。

リリーホワイトさんの身体を使って悪い実験をすると明言したか
らには

奴に彼女を渡すつもりは更々ない。

其に私達は、リリーホワイトさんを邪魔だとは微塵も思っていない。

リリーホワイトさんが静かに拍手をしてくれた。

いつの間にか私達の周りには、騒ぎを見にきた里の住民達が集まっていた。

「〜〜ゲフ……!!〜〜き、貴様等が…其の…気なら……俺にも考えがあるぞ!!」

リリーブラックが、いそいそと立ちあがると、

パチンツツ!!!

「来いー! 出番だぞ!!」

指を鳴らしながら怒鳴った。

すると、

シュタアツツ!!!!

上から誰かが落ちてきて、

私達と黒リリーの間に着地をした。

まさか……！

「マリス……!!」

うごんさんが私が想像していた、彼女の正体の名前を口にした。

「そつだ!! 私はコイツ等と同盟を組んだのさ!!」

てめえ等を…… 確実にブチのめす為になあ!!!」

マリスが吠えるのを止め、楯と剣を構えた。

私も耳から手を離し、背中の剣を一本とも引き抜いた。

「其を聞いたからには黙ってられません……」

そのマリスとともに、殲滅されて貰います!!」

「だから俺は死なねえんだつて!! 今更謝ろうたってもう遅いぞ!!!」

さてさて…… さっきは失敗したが…… 今度こそ成功させてやる

……!

成仏する覚悟は出来てるか!! ええええ!!!??」

L o v e B e r s e r k e r

Y O U M U

〜人間の里

マリスの突然の出現に里の住民達が騒いでいた。

「……とはいっても、てめえ等に武器なしじゃあ不平等だからなあ……」

黒妖精は其の喧騒を気にもせず考え込んでいる。

すると思いい直したように、

「おい……一式寄越せ!!」

ズボオアアアアアア
!!!!!!!

なんと、擬態したマリスの背中に両手を突っ込んだ。

「!？」

見ていた観客からざわめきが起こる。

私達も構える。何をするつもりだ………？

すると黒妖精は天狗マリスの背中に入れた手を思いつき引き抜いた。

「!!!」

其の手には、黒い剣と盾を握っていた。

どちらも禍々しい黒色で統制されて、刀身や盾の表面に蒼い目玉を模した装飾が施されていた。

擬態した身体の中で収まっていたとは思えない大きさだ。

「よっ……重い……!?」

其等を重そうに持ち上げるリリーブラック。武器と身体の大きさが

かなり不釣り合いだ。

「さてさて……最後にかわしたい言葉はあるか？一言だけ許してやる」

最後というつもりにはするつもりは…無論ない。

私は前に進み出ながら、後ろのうどんさん達に声をかけた。

「うどんさん…近距離は私に任せて下さい……」

後ろから援護射撃をお願いしますか？」

「判りました……気をつけて下さい、みよんさん……!」

「私も頑張ります!!」

リリーホワイトさんがうどんさんの隣で返事をするのが聞こえた。

見えない二人の言葉を聞いて安心出来た半面、相手を見る目付が余

計

険しくなるのが自分でも判った。

「!ああああ……………最後に告白かと思えば…作戦確認かよ……………つれない野郎共だな。戦いしか頭にねえのか?てめえ等が脳筋だろっが。俺はがっかりだぜ?」

「貴方達が負ける前提で作戦立てたんですよ。其位も察せられないのですか?」

まあ、無理でしょうね……………脳筋ですから」

「!??お前は、二人をスプラッタにしてからたっぷりといたぶってやる!!!」

リリーホワイトさんの言葉に対して返した、其の言葉を聞いた……………

其の時だった……………

ブチンッ……………!!

何処からかそんな音がした……………

まじっ……考えるのは止めよう。

REISEN

VS 春を告げる妖精 リリーブラック
攻めゆく閉塞心 マリス・ソードロイド
守りゆく閉塞心 マリス・シールドロイド
影のテレグノシス 犬走権
〜人間の里

「……………」

……みよんさんがすっかり黙ってしまった……

戦いに備えて、精神を統一してるのでしよう。

「俺様が!!その綺麗な顔を切り刻んでやろう!!!」

不意にリリーブラックが天狗マリスの後ろから飛んできて、みよんさんに向かって、マリスで出来た剣を突き出してきた。

みよんさんは即座にしゃがんでその一撃を避けると、

「…………『成仏』」

其処から背中の楼観剣を引き抜きながら切り上げ、前と後ろに伸び切った

リリーブラックの両腕を、

ズバアアアア
!!!!!!

マリスの剣と盾ごと切り落とした。

「!?ぐわああああ!!!両腕があああ……………!!!」

そして其のまま、みよんさんに足の裏で蹴り飛ばされ、再び地を転がった。

どうやら、剣を使い慣れていない様ですね…………馬鹿な事を…………

「!何シテルノヨ!?!」

見ていた住民達の歓声の中、天狗マリスが後ろに転がって行った黒妖精に向かって叫んだ。

当の本人はうずくまっていた。

「両腕を切り落とされたあ……時間稼ぎをしてくれえ……!!!」

「…再生スル気ネ……無茶スルカラヨ」

そして私達の方を向き、

「感覚ヲ狂ワセタラドウナルノカシラネ？」

突然、盾と剣を持つ手を入れ替えた。

「!？」

「本人モ出来ナイ事…持チ手ヲ変エル事モ出来ルノヨ？」

マズい……あのまま感覚を狂わされたまま剣を振られたら

みよんさんが対応出来ずに斬撃が…!

「妖夢さん！私達が狙撃しますよー！下がって下さい!!」

リリーホワイトさんも、其に気付く事が出来ていたらしく

みよんさんに向かって声をかけた。

でも、其を聞き入れる様子がなかった。

「！みよんさん……？」

マリスがみよんさんに向かって走りだした。

みよんさんが持っていた楼観剣を鞘に収めた。

其でも動かない。

「みよんさんー早く……!!」

マリスが距離を詰めてくる。

其でもみよんさんは動かない。

マリスが剣を振り上げ、そして振り下ろしてきた。

其でもみよんさんは動かない。

「みよんさん!!!」

私は我慢できずに、右手の指をピストル状にして

みよんさんの後ろからマリスに狙いを定めた。

まさに斬られる……其の時だった。

「……………『靈斬』」

みよんさんは踏み込みながら、一度しまった楼観剣を素早く抜いて

ザァンツツツツ
!!!!!!!

「!?」

「!!…E…妖夢…!!?」

私達の目の前に低い姿勢でみよんさんがいた。

素早い身のこなしで、私達とマリスの間に割り込んできたのだ。

さっき左腕を切りつけた楼観剣をマリスに向け、

『霊突』

踏み込みながら勢いよく突き出し、おぞましく開けられたマリスの口の中に

其の刃を思いっきり入れ込んだ。

ドズウウ
!!!!!!

そしてダメ押しにみよんさんは刀の頭を掌で強く叩き、更に相手の喉の奥深くに

一気に刀身を押し込んだ。

ズバアアアア
!!!!!!

マリスの後頭部分から切先が出た。

急所を貫かれた天狗マリスが目を見開いているのが、みよんさんの肩越しに見えた。

驚愕した顔の擬態が解け始め、黒ずみ、沢山の目玉が見開かれ始め

た。

そして、溶けて黒い霧のようになり消滅していった。

みよんさんは足下に黒い霧が充満する中で黙ったまま、楼観剣についた

黒い染みを、刀を振って払い落した。

「妖夢さん……何があつたんですかー……!!?」

リリーホワイトさんの声に気づき、此方を振り向くみよんさん。

瞳は黒かった。何も見てなかった。

私は悲しかった。

「みよんさん……!!」

私はみよんさんの肩を掴んだ。私を見てほしかった。
正気に戻って欲しかった。

其でも、みよんさんは何も見てなかった。

リリーホワイトさんや、住民達が心配そうに見ていた。

「みよんちゃん……!!!」

顔をうつぶせる。私は悲しかった。

もっ…見てくれないんですか？

「正気に戻って下さい……みよんちゃん……!!!」

「！／＼／＼／＼みよんちゃん……!!!」

声を聞いて、顔を上げる。

みよんさんが私を見ていた。目も死んでいなかった。

顔を赤らめながらも、しっかり見てくれていた。

「みよんちゃん……!!!」

安心したからか、私の目から涙があふれた。

此は…嬉し涙…ね……？

「良かったです、いったい何があったんですか……？」

リリーホワイトさんがみよんさんに訪ねた。

みよんさんは表情を暗くした。

「…私、私達を殺すと脅されてから……其処からの……あの……」

「……記憶ですか？」

「!!は、はい…… / / ……そう……です……」

「私は…頭に血が上ってたんだと思います……私だけでなく、
うごんさんも殺すといわれて……」

私はみよんさんの肩をもち直して、じっと見た。みよんさんは其に
呆然として

私を見つめ返す。

自分は言った。

「御願いです……怒りでなく…貴方自身で守って下さい……!
怒りにまみれた貴方は……私は見たくないんです……!!」

「!……すみません……」

みよんさんが申し訳なさそうに言った。

私は頬が緩んだ。

「でも、貴方に何度も助けられた……もう、数え切れないほどに……
ありがとう……みよんさん……」

声からして判った。

私達は今度は並んで構えた。取り巻く薄い黒霧ではっきりとは見えない相手を

見据える。

しかし其の霧が晴れ、はっきり見えた敵の姿……其はもはや、

「感動ノ抱擁は……濟んだか、リア充共？」

リリーブラックという身体を突き破った、化け物だった。

浸食の脅威

REISEN

VS 影を告げる妖精 ケイオスブラック・アルフ

〜人間の里

私達は、黒い霧から立ち上がった妖精を見据えていた。

その姿は、妖精の時とは比べ物になれないほどに大人びていて、身長も私達を

遙かに上回っていた。

リリーホワイトさんが見せてくれた、あの写真と同じくらいの頭身だった。

だが、その長く伸びた両脚は不自然に紫色に染まっていた。

切り落とされた筈の両手は、更に人の様な手ではない異端の化け物のものになっ
なっていた。

透明の妖精特有の羽も大きくなり、うす紫色に変わっていった。

「グギヒヒヒヒヒヒ……」

小首を方にむかって少し左に曲げ、ニヤリと邪悪に笑ってきた。顔の左半分が髪ごと、両腕と同じ紫色に染まっている。

其の時、私達は其の浸食された目の部分を見てしまった。

ありえない……左目の眼窩に、目玉が三個も入っているなんて……!?

まるで無理やり押し込んだ様に入れられた其の左目達は、充血したリリーブラックのものではなく、瞳が青かった。其等がそれぞれ違う方向を見ていた。

思わず口を押さえて吐き気を堪える。

あれが、マリスに身体を委ねた結果……？

「！大丈夫ですか、うごんさん……!?」

前にいるみよんさんが心配そうに声をかけてくれた。

私を面白そうに見ながらマリス妖精が言った。

「癒着って言葉ヲ知っててる力？アレって便利だよナあ??…治りを早メテくれル…妖精ノとろい

自然治癒よりもナ……妖精である事を忘れさせてくれるゼ」

「…自分で…マリスを摂取したのですか…!??」

よく見ると両腕には、さっきまで持っていた剣と盾の特徴があった。

さつき持っていたマリスの剣と盾を、自分の腕代わりに…!?

大人の体形になったのは、おそらく其の浸食での変異が原因……

なんて…馬鹿な事を……!

「……才おお才……俺が醜い力？馬鹿ナ事をしタと思っテるか？

だがナ、変貌八其なりニ覚悟してイたし、私にとつテ得にナルなら、
其は馬鹿ナ事にハ

ナらねえヨ」

そう言つと黒妖精は姿勢を低くし、

ビイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
!!!!!!!

羽音を立てながら飛んで来た。

「グヒヒヒヒ……モウ雑魚だなんて呼ばせて堪ルか!!

俺ハ……妖精とイウ粹を……越えテ見せタんだよおお!!!!」

そう喚きながら右手の、剣を四方向に分けた様な四本爪を突き出し
てきた。

するとみよんさんが私達の前に進み出て、

『炯眼剣』!!」

カキイイイイイイイイイイ
!!!!!!!

即座に抜いた白楼剣で、爪を受け止め、

「カウンターです!!」

もう一方の楼観剣で其の肘を叩き切った。

キイイイイーーーーン……………!!!!!!

だが其の刃は、魔精の肘に喰い込まず、弾き返された。

「!? 堅い……………」

「へっ…………ソウ何度も腕ヲ斬リ落さしるゝとでも?」

今度はリリーブラックの盾の様な左腕の先が割れ、四本の指の様に折れ曲がり、

其をみよんさん顔に突き刺そうとした。

今のみよんさんは剣を弾かれて隙が…………危ない…………!!

私は思わず指をピストル状にして、敵に弾を撃った。

ガガガガガッッッッッッ
!!!!!!!

売った五発は全弾、黒妖精の頭を正確に撃ちぬいた。帽子に穴がその数だけ開く。

「!!! カッ……………」

マリス妖精がよろめいた。

「みよんさん、今のうちに此方に…!!」

「！助かります…！」

みよんさんが隣に戻ってくる。

其の間も、私はみよんさんを後ろから襲わせないように敵をマークしていた。

魔精はしばらく痙攣してたが、すぐに体勢を立て直した。

「…フウ… 刺激的な五発ダッタな… エ？ オイ」

「頭を撃ち抜かれて平気でいられるとは… 驚きですね…」

「ア？ 妖精という種族でハ、日常茶飯事だろウが??」

そして、左目の二つの蒼眼が一斉にこっちを向き、

「一匹ずつ八面倒ダが… コイツはどウダロウなあ!??」

バキバキバキイイイイイイ…!!!!

黒妖精の紫色の右腕が肘まで四方向に裂けた。其の腕を此方に向けて、

「末永ク…爆散しやがれえエエエエー…!!!!!!!」

ドオオオオオオ
!!!!!!!

「!?

だが、

「！ソリヤア、俺様二とつて八朗報だ！！アハアハハハハッハッハ
!!!!!!!!!!!!」

里に、哄笑が響いた。

バンツツツツツ

!!!!!!!!!!!!!!

気がつけば、私は左手をピストルにして三個のうち、一番目尻側の
左目を

撃ち抜いていた。

「アゲアアアアアオオオオオオオオオ」

!!!!!!!!!!!!!!
「

哄笑がたちまち悲鳴になり、左目を左手で抑えながら敵は跪いた。

「しびんねん？……？」

みよんさんが私を心配そうに見ているのが判った。

でもその時私は、多分苦虫を噛み潰した様な顔をしてるに違いな
い。

みよんさんが怒りで我を忘れていたのも判る気がする。

マリスは……本当に姑息で、狡猾だ。

自分の怨みを晴らすために手段は選ばない。

魔精が立ち上がった。手を離れた顔左部分には元の様に三つ目玉が動いていた。

あの間にもう再生したらしい。

「~~~~痛ってエな、クソガキがア!.....一度痛い薬ヲくれテやらネえといけネえ様だナ!」

そう言つと、右手の砲台を真下の地面に向けた。

「さて、コイツを最大パワーで撃つト、どうなるの力な...?」

「!?何を.....」

私は言葉をよどませた。地面を撃とうというの...!?
でも...其の体勢では、撃つ自分ごと.....

リリーブラックの腕の砲口から、黒色の光が漏れてきた。

「!!」

嫌な予感がした。

「まさか.....道連れ!」

「ソウ.....忌々しい妖精トマリスの驚異ノ再生力デ、俺様は完全ニ死なナクナッタ.....」

死ぬノハ.....才前達だケだアあ!!!」

其を聞いた周りの住民達がパニックを起こしていた。

「そんな事…させませんよ!!」

「みよんさん!!」

みよんさんが走りだした。手には白楼剣が握られている。

向かってくるみよんさんに向かって、半分化け物の妖精が吠えた。

「モウ遅い!!直接マリスヲ取り込んだ、此のリリーブラック様が…

!!

貴様等をお…里ゴトあノ世マで送ッテやるよオオ……!!!!」

「其処までだよ」

声が聞こえた。

そして次に聞こえたのは、

ズア
ズア
ズウ
ズウ
ズウ
ズウ
ズウ
ズウ
!!!!!!

魔精の身体が、頭から真っ二つにされた音だった。

みよんさんがあと少しのところまで迫った瞬間の出来事だった。

服装は半袖にロングスカートの着物のようなものを着用して、銭の付いた腰巻をしている。

そして手には大きな鎌。

「！小野塚小町さん！」

「！おやあ、アンタ達かい……噂には通り、やはりラブラブの様だね」
いつの間にかうごんさんとリリーホワイトさんが隣に来ていた。
私は顔が赤くなるのを感じて、隣に目を向けるとうごんさんも顔を赤らめていた。

慌てて話をそらした。

「~~~~ど どうして此処に……また、サボリですか？」

「いや、ばっちり仕事さ……通報が来たんだ。此処でコイツによる襲撃があったってね」

小町さんが動かない魔精の左半身を、鎌でつつきながら言った。

「通報してくれたのが誰か……知ってるかい？」

「私です」

声を出し、手が拳がる。其は……

「！リリーホワイトさん!？」

「別のマリスが最初に吠えた時に私が通報したんです。咆哮もばったり聞かせてあげましたしね」

「！もう一匹いたのかい!?ソイツは今……?」

「妖夢さんと鈴仙さんが倒してくれました」

「そうかい……とにかく、三人とも礼を言わせて貰うよ」

小町さんが礼を言った。

すると黒妖精の切り口から黒い手が、互いの半身に向かって大量に伸び、

中央でがっちりと握りあった。

「!!!」

手はそのまま二つの半身を互いに引き寄せ、中央で身体をくっつけ完全に癒着した。

「マダダア……終ラセルカア……!!!」

其のまま立ち上がりながら剣と盾の腕を構えて私達の方に伸ばしてきた。

「おっと、そっはさせないよ?」

だが、小町さんが其の背中に鎌の刃を突き立てて、其のまま引き寄せて組み伏せた。

「!?エグエ……………!?!」

「もうあんたを逮捕するのは飽き飽きしてたのに……………今度は化け物になってるじゃないか……………面倒くさいね」

「じゃ、早速コイツの出番かね……………?」

小町さんが魔精を組み伏せたまま、懐から取り出したのが……………

注射器の様だ。中味に乳白色の液体が入っているのが判った。

「喰らいな、化け物!!」

其のまま敵の首筋に荒く突きさした。

ドスウ
!!!!

「!?!?!!ギオアアアアア……………!!!????」

其の瞬間変化が起こり始めた。

身体の紫色がみるみる引いていき、腕の剣や盾も消滅して普通の手になった。

三つの目で肥大していた眼窩も小さくなり、元の目に戻っていった。

元の大きさに戻った黒妖精は、再びそのままばったりと倒れた。

「ほう……なかなかの効き目だねえ……こいつぁ」

首から注射器を引き抜きながら、小町さんが呟いていた。

うづんさんが目を丸くした。

「……そ、其は……!？」

「驚いただろう。最近完成されたといわれるマリス用ワクチンのプロトタイプだ」

小町さんは空になった注射器を振って、得意そうだった。

うづんさんが歓喜の声を上げた。

「師匠……ワクチンを完成させたんですね!？」

だが私は疑問の声を上げた。

「ですが……どうして貴方が其を……？」

「！嗚呼、其はだね……」

小町さんが其の問いに対して説明を始めた。

「前に、地獄の三途の川のほとりで変な黒い三頭犬二匹と遭遇してね……退治したが、其の時地上では、アリスの心の闇……えっと……」

何だっけな……」

「……マリスですか？」

「！そっ、それぞれ……其のマリスという化け物がうろついて、永遠亭ってところが其の本体

の情報を探めているっていう事も聞いた。

本体は判らないが、一応報告っという事で其で映姫様の許可を貰って行ったところ、数本分けてくれたのさ」

地獄にまでマリスが侵攻してたとは……止まる様子は無いのか

……

私は苦虫を噛み潰していた。

「ぐっ……!!」

リリースブラックが気が付いた様だった。痙攣しながら身体を動かしている。

するとリリースホワイトさんがフヨフヨと其処に近付いていった。

「リリーホワイトさん……！」

私が呼び止めようとした時には、既に拘束されていたライバルの前にたどり着いていた。

「私を滅するという方法を変えない限り、何度やっても同じ事ですよ？」

「……また……今年も……負けてしまったのかあ……！」

リリーホワイトさんの顔は見えなかったが、私達には判った。

最初にライバルと出会った時と同じ、あの何所までも続く様な無表情に違いない。

「此処までですね、リリー『ブラック』……牢獄で大人しくしてて下さい」

「……………」

黒妖精は黙ってしまった。だが歪ませた表情には目の前にいる白妖精さんに対する憎しみしかなかった。

「さあて、連行の準備をしな！」

「かしこまりました!!」

小町さんが立ち上がって退いた直後には、数十匹の裁判妖精達がリーブラックを素早く縛っていた。

黒い妖精達が、黒い妖精を拘束した。

「さて、里の皆には迷惑をかけたな……道を開けてくれないかい？」

人だかりが別れて道が開いた。

「！そつそつ……言い忘れていた事があった……！」

小町さんが何か思い出したかのように私達の方に歩いてきた。

そして私とつとんさんに近付くと、私達の耳元でこう囁いた。

「お前さん達も、上手くやっていきなよ？」

顔を離れた小町さんはウィンクをしていた。再び顔が赤くなるのを感じる私達。

いそいそと戻って行った小町さんは号令をかけた。

「よし、じゃあ出発するよ？最初の目標は無縁塚だ!!」

そして、黒い魔精だった妖精を連れ、退場して行った。

「終わったんですね……」

「私達も行きましょう」

騒動が終わり、まばらになりつつあった人だかりから、私達も離れた。

其の時私の左手は、うどんさんの右手は自然につながっていた事に私達は気が付かなかった。

紹介されてやる！感動して泣きやがれえ！！

春を告げる妖精 リリーブラック（Lily Black）

対峙した際、両腕を妖夢に切り落とされたリリーブラックが、最後の手段として事前まで持っていたマリス・ソードロイド、マリス・シールドロイドを腕代わりに癒着させ、其のまま浸食された姿。

其の浸食の変異の影響か、小さい服のまま身体が大人の姿となり、服の所々が破れている。

薬によって大きくなったりリリーブラックと体格は変わらないが、身体の所々が浸食により紫色に変色、右目の眼窩にはマリスのものと思われる

三つの目玉があるというグロテスクな姿となった。

素材が素材のため、腕はとてつもなく堅くなっている。

両腕となった両方のマリスを展開し、新たな四本の指を獲得した。未展開時は、普通の剣と盾として使用が出来る。

基本は其の両腕による接近戦を得意とするが、剣となった腕を刀身全てを展開し、其処から弾幕を放つという芸当もこなす。

そして妖精としてもともと持っていた再生能力とマリスの再生能

力が合わさり、

真つ二つになっても再生しすぐに活動出来る程の、とんでもない生命力を有する様になった。

通常マリリスに浸食される時は苦しみを伴う事が多いが、

リリーブラックはあまり苦しんでいない。

恐らくマリリスと結託していただけでなく、其を前々から覚悟し、逆に所望していた

為だと思われ、むしろ楽しんでいる様子も垣間見える。

名前の由来は「純粹な」を意味するリリー「lily」に対して、「混沌の」を意味するケイオス「chaos」、そしてアルフは最初のギリシア文字である

アルファ「α」の最初の三文字である。

つまり……此はマリリスによる彼女の初期段階の変異と言える。

サンセット・スウィングーズ

YOU MU

く無名の丘

「……………んどうさん……………」

「はい……………」

「……………綺麗ですね」

「そうですね……………」

て
私達は今、木から二本の紐に吊るされた、不思議な一枚の板に乗っ

其処から夕陽を見ていた。

此処は、幻想郷の僻地といわれる『無名の丘』。

沢山の鈴蘭が咲き誇り、丘の一番高い処には一本の大きな木が植わっている。

私達は、其の木の太い枝に板を吊るして座っていたのだ。

近くにある妖怪の山よりは低いが、幻想郷を見渡せる絶景だった。

うどんさんは過去に起きた花の異変の時に一回、此処を訪れた事があるらしい。

其の際此処で毒を撒く、生きた人形と戦ったとか。

だが私達が訪れた時には、其の姿は見当たらなかった。

座っている私の膝元で、リリーホワイトが座っていた。眠っている。

春減少による暴走の最中での邂逅、長時間の移動、リリーブラック達の襲撃……

私達と出会ってから今日一日大変だったからな……

私はリリーホワイトさんを見下ろし、座っていた板にも目を落としました。

実は私達が座っている此の板は、最初から木に吊るされてはいなかった。

此の木の傍に来た時、根元に紐と板の一式が置かれていたのを組み立てたのだ。

其の傍には置手紙もあった。

【素敵な御一方へ】

此、外の世界では『ブランコ』というらしいわよ？

本当はもうちょっと豪華なの用意したかったけど、流石に時間が無かったわ。ゴメンね。

吊るす作業は大変だけど、其処からの風景は格別だからね。

頑張つてね 私も、幻想郷の為にやるべき事をやらないと……

ロマンチックなひと時を

素敵なスキマさ

んより】

紫様……………紐を握る力が強くなった。

私達の為に、わざわざ……………

だが、最近紫様からの連絡が無い。どうなされているのだろうか

……………
今も何処かで、マリス達と戦っているのか……………或いは……………

！いや……………そんな事は考えないようにしよう……………

あの御方は、此の幻想を築かれた賢者だもの……………そんな事が起きる筈は……………

「みよんさん……………」

「……………おじいちゃん……………」

唐突に名を呼ばれ、隣に目を向けるとおじいさんが此方を見ている。

「仮にです……仮にですよ？私が……」

そう言うのと、うどんさんは右手で自分の右目を隠し、左の人差し指で左目尻を

思い切り横に引き延ばした。

あ……此の顔は……

自分の顔が青ざめていくのが判った。

そしてうどんさんは口を横に伸ばし、

「スタアアアアズ……!!!」

「ひいひい……!!」

意外に低い声が出てきてびっくりした。

おもわずブランコから転げ落ちそうになって、紐に捕まった。

「！あああ……！大丈夫ですか……!？」

うどんさんが顔から両手を離して、片手でリリーホワイトさんを、もう片方で

私を落とすまいと支えてくれた。

腕に力を入れ、何とかブランコの上に戻る事が出来た。

激しく揺れたにも関わらず、リリーホワイトさんはスウィットと、大きな寝息を立てた。

「すみません……フッフ……にしても私の此のネタ、判りましたか？」

「ええ……紫様が外の世界から買ってきて来ましてね……
私と幽々子様、双方が暇だった時に悲鳴を上げながら遊びました。
よく……彼で死んだものです」

暫くの沈黙。

「……………フ……フフ……………」

「フフフフ……………」

堪え切れずに二人で笑った。私達以外誰もいない丘に私達二人の
笑い声だけが
響いていった。

するとうどんさんが笑うのを止めた。私も止めてしまおう。

そして暫く二人で夕陽を見ていた。

「もし……………もしもですよ？」

徐々に赤くなる陽の光に目を細める私の耳に、うどんさんの言葉が
入って来る。

「私が……再び『孤毒』によって墮ち、今度は貴方を襲うなら……………どう
しますか？」

其の言葉に驚いてうどんさんの方を見ると、彼女もまた私を見てい
た。

私が映る赤い瞳には、冗談とは別に不安の色も見えていた。

其の目を真っ直ぐに見て言った。

「……何と言おうと……何をしよう……うごんさんはうごんさんです。」

ですが……もう、うごんさんをマリスに喰わせはしない……」

私は……うごんさんに擬態したマリスを叩き斬った、あの迷いの竹林で誓ったんだ。

もう……幻覚には騙されない……狂ってでも良い……

……守り通すんだ、と……

「私が……御守り致します……どんな苦難が襲おうとも……」

……共にいるんだ、と……

「例え……此の幻想が滅しようとも、貴方だけは滅ぼさせはしません！魂をかけて……絶対に！」

「うごんさん……」

うごんさんが私の胸に寄り添ってきた。

私は其を優しく受け止め、優しく抱きしめた。

其の時、寝ていたりリーホワイトさんから、微かに春の匂いが漂った気がした。

遙か遠く、静かに沈みゆく夕陽だけが私達を見ていた。

だが……

!?!?
……

「……ぶっしました、みよんさん？」

うどんさんは私の変化に気付き、声をかけた。

私は口をうどんさんの耳に近づけ、小声で言った。

「……気を付けて下さい……心配がします」

私がそう言うと、うどんさんも目だけで周りを見渡し始めた。
するとすぐに其の顔つきが変わっていった。どうやら気付いた様
だ。

こんな僻地までも……追手か……？

何処に居る……!?

「!みよんさん!上!!」

弾かれる様に上を見上げた。

私達の居る木を囲んで紫色と黄色の渦巻き状に彩られた、五つの球体があった。

其の球体の中心にそれぞれ大きな目玉があり、全て此方を見ている。

「!うごんさん、リリーホワイトさんを……!!」

即座に私の膝からリリーホワイトさんが抱えあげられた。

「くっ……!?!」

囲まれている……其も、今まで見た事もない敵だ。

私達は急いでブランコから飛び降りた。

木の根元に近寄り、置いていた剣を取ろうとした。

其の時、声が聞こえた。

「見つけた……頼める相手……信用できる相手……」

「!?」

その言葉に剣を取ろうとした手を止めた。

すると私達を包囲していた五つの球体の後ろから、それぞれ黄色の糸が伸びて

私達の目の前で交差し、混ざり合って一つの形が造られた。

「!.....少女!」

数秒の後には、目の前に黄色い輪郭でしかないが女の子がしっかりと立っていた。

私は其の姿をはたと睨んだまま言った。

「貴方.....マリスですね?」

其の輪郭の口の部分が動き、声が発せられた。

「違う.....マリス.....違う.....私.....ユウゲンマガン.....」

「!ユウゲン.....?」

「マガン.....?」

私達は思わず復唱した。.....彼女の名前か.....?

声は続けて聞こえてくる。

「.....魔界の.....者.....」

「!魔界?.....!神綺さんの!」

神綺さんが創ったとされる魔界の住人が……どうして私達のもとへ……？

「……神綺様……御存知……感心……」

輪郭しかない少女が嬉しそうに両手を合わす様に動いた。だが、油断は出来ない。

「私達を此処まで追ってきたという事は……」

私は止めていた手を動かし、傍に置いていた白楼剣を持った。そして鞘から抜き、黄色い線の少女に突きつける。

「私達を始末するつもりですか!？」

相手は驚いた様に慌てて両手を振るように動いた。其の動きに合わせて浮遊する目玉も、微かに揺れ動く。

「違う……謀殺……違う……」

「でしたら、どうして私達の処へ……!？」

うごんさんの言葉に、振っていた手を下ろして無表情の様になった。

……様な気がした。

「……頼みあって……来た……」

「!頼み……!？」

「尾行……過激……謝る……御免……」

後ろをちらつと後ろを見て二人の確認をした。
手をピストル状にして相手に向ける、うごんさんの片手に抱かれて
リリーホワイトさんが寝ているのが判った。

前に視線を戻して魔界の住民を見ながら、剣を戻して木の根元に戻した。

「……………何です、頼みとは……………」

一応信用してみる。だがもし、少しでも変な動きをすれば……………

「言う……………其の前に……………」

ユウゲンマガンと言った彼女の右手の輪郭が、私達の傍にあるブラ
ンコを
指差すみたいに動き、

「……………一緒に乗って……………良い？」

幸福の黄色い糸

REISEN

く無名の丘

「……………ごんさん……………」

「はい……………」

「……………どうなっていますか、私？」

「判りません……………」

私達は今、木から二本の紐に吊るされた、不思議な一枚の板に乗っ
て

其処から夕陽を見ていた。

此処は、幻想郷の僻地といわれる『無名の丘』。

沢山の鈴蘭が咲き誇り、丘の一番高い処には一本の大きな木が植わっている。

私達は、其の木の太い枝に板を吊るして座っていたのだ。

近くにある妖怪の山よりは低く長時間居座ると危険そうだが、幻想郷を見渡せる絶景だった。

私は過去に花の異変の際に二回、内一回は師匠と共に此処を訪れた事がある。

そしてどちらも此処で毒を自在に操る人形と遭遇した。

でも今回私達が訪れた時には、其の姿は見当たらなかった。

座っている私の膝元で、リリーホワイトが座っていた。眠っている。

春減少による暴走の最中での邂逅、長時間の移動、リリーブラック達の襲撃……

私達と出会ってから今日一日大変だったからね……

私はリリーホワイトさんを見下ろし、隣に座っているみよんさんに視線を移した。

みよんさんの全身に黄色い糸が体にくっつかない距離を保ちながら、纏わりついていた。

まるで黄色い包帯で全身をグルグル巻きにされている様だった。

其の後ろ……みよんさんの背中に当たる部分から背中の部分から五つの糸が伸びていた。

私は其を目で辿る。

やがて其の先端は巨大な五つの目玉に繋がっていて、私達を背後か

ら見ている事が判った。

怖くなって視線を前に戻す。

するとみよんさんの口に当たる部分の糸が口の様に動いた。

「二人乗り……だけど……私……気にしてない……」

みよんさんではなく、糸が喋ったものに間違い無い。

中からみよんさんが泣きそつな声を出す。

声が聞き取りにくかった。

「やっぱり、変ですよ……此……」

「……大丈夫……口……塞いでない……息……出来る」

「いえ……みよんさんが言ってるのはそういう事では……えっと……」

「ユウゲン……マガン……」

「!!そ、そうでした……ユウゲンマガンさん……どうして……
身体に纏わりつくので……しょうか……?」

「二人しか乗れない……私……乗れない……此で……乗った感じ……
体験……」

……確かに、此の身体は便利かもしれない、けど……

「……其に……ズレてる……主旨」

「！そ、そうでした……！」

すっかり忘れていた。みよんさんが尋ねた。

「…頼みとは何ですか？」

するとユウゲンマガンさんは黙った。

そして前を向いたまま言った。

「最近……目玉……暴れている……」

「!!」

彼女が誰を言おうとしているかはすぐに判った。

「マリス……」

「！マリス……そう……怨恨……アリスの……地上で……話題の……」

首を此方に曲げずに喋った。

多分、中のみよんさんへの懸念が原因だろう。

「アリスさんは、魔界人だという事を知ってるんですね？」

「知っている……旅立った……人間界に……復讐に……」

アリスさんが魔界を出て行った事は、魔界の間でも相当浸透してい

るらしい。

もしくは神綺さんが言いふらしたのかも知れない。あの性格だったら……やりかねないかも。

「魔界……風評被害……絶えなくなる……復讐……意味ない……ますます悪化……」

するとみよんさんの身体から黄色い束が離れ、私達の目の前で再び少女の形となった。

私達の後ろにいた五つの目玉も、いつの間にか形をとった彼女の後ろに来ていた。

「……魔界……友好的……魔界……人間界……襲わない……興味があるから……楽しいから……」

何だか……魔界人が無理をしても、此方に来た理由が判った気がした。

「彼女……阻止して……誤解……解いてほしい……
神綺様に……援護……引率……要請する……魔界……協力する……」

「判りました。御任せ下さいー」

みよんさんが言った。

何処までも真っ直ぐな目で、ユウゲンマガンさんを見ながら。

私も頷いた。

魔界のみなさんの為にも、アリスさんは何としても止めなくては
けません！

ユウゲンマガンさんは笑ったかのように見えた。

その瞬間、少女の形が崩れ、五本の糸となって其々の目玉の後ろの
部分に収納されていった。

「!!……」

そして、完全に糸が見えなくなった瞬間、

「しゅーくほー」

ブアッコーーーーーン
!!!!!!!!!!!!

突然目玉が全て上を向いたかと思うと、黄色と紫色の極太のレー
ザーを発射した。

「!?!?!」

完全に不意を突かれて肝を潰された私達の前で、夕焼け空に五本の
柱が立った。

そして此方を向き、再び目玉達が私達を見た。

「カップル……御二方……頑張つて……魔界……貴方達も……援護する……」

「ついでに……皆に……知らせる……」

ユウゲンマガンさんの声が聞こえる。

「赤飯……準備……準備……」

そして五つの目玉は振り返り、夕方の空を一丸となって飛んで行った。

……
!!!???

「お願い!! 其だけは知らせないで下さいああ……いい!!!!!!」

私達以外誰もいない丘に私達二人の叫び声だけが響いていった。
でも、後の祭になっていた事は言うまでもなかった。

夕陽のはるか上、暗くなっていた空に明るい五つ星が浮かんでいた。

ですが……………!!

此処は…春告げ晴として……………最後まで見届けなくては……………!!

そして勇気を振り絞って起き上がり、ふり返りながら叫びました。

「は……………／＼は、は……………び……………す」

「！リリーホワイトさん!!危ない!!!」

……………え？

ですが其の瞬間、私は頭に一撃を浴びて意識を失ってしまったのでした……………

其の数分後、意識が戻った私は鈴仙さんに頭に絆創膏を貼って貰っていました。

私が寝ていた間、何をしていたのかを妖夢さんに聞いたところ……………

どうやら、私が寝ていた時に新しい魔界の人が来て一緒にブランコに乗ったら、

其の後に紐が外れてしまった様なのです。

其処で、最初に設置した様に鈴仙さんが妖夢さんを肩車をして結び直そうとしていたのですが、

バランスがとれずに難航し、其の内に鈴仙さんが重みに耐えきれずに

私の上に倒れたというのが真相でした。

思わずホッと息をつきました。

……私の妄想でした。御覧になっていた皆様には深く、御詫び申し上げます。

すると其の瞬間、

妖夢さんが消えました。

「!？」

妖夢さんのいた所にはぽっかりと穴が開いていました。

ひと一人が入れそうな穴です。

「みよんさん!!」

「妖夢さん!!」

私達は穴の縁から中に声をかけましたが、返事が返ってきませんでした。

すると其の瞬間、

「ぱんぱかぱ〜ん」

中から勢いよく一人の女性が飛び出してきました。

「!??」

私達はびっくりしてしまい、思わず仰け反って尻もちをついてしまいました。

飛び出してきた女性は浮遊しながら、私達の反応を見て面白そうに言いました。

「フッフ……びっくりした？」

水色のワンピースの上から羽織っている襟のある白いベスト。

ですが何よりも目を引いたのは、ウェーブのかかったボブの青髪を、頭頂部で

不可解な形で結っていた事とベストの更に上から羽織っていた半透明の羽衣でした。

其の女性がふわりと地面に着地しました。

「〜ゲホッ……ゲホッ……!!」

其の後ろから妖夢さんが這いずり出てきました。顔が泥にまみれています。

「！みよんさん……！」

鈴仙さんが慌てて駆け寄り、妖夢さんの身体を持って引っ張り上げました。

「だ…大丈夫ですか!？」

「はい……ですが……」

引っ張り上げられ、地面に足を付けた妖夢さんは先程の女性を訊ねたのでした。

「……こんな処で何をしているんです……邪仙、霍青娥さん？」

「！あら、久しぶりね……半人半霊の剣士さん。私と同じく、生死を超越した剣士さん」

私は妖夢さんが名前を知っている事に驚いて思わず訊きました。

「！知り合いなんですか……？」

「ええ……過去の異変の時に、少し……」

鈴仙さんにハンカチで顔を拭われながら、答える妖夢さん。
どっつやら彼女とは面識があるようでした。

其を受けて青娥と呼ばれた仙人が、私と鈴仙さんに自己紹介を始めた。

「そう！私は霍青娥！通称、青娥娘々ですよ 仙人もやっているんですもの……」

「……其のプレッツェル、むしり取って良いですか？」

「!?……其、ジョークですよね？」

イライラした顔で刀を抜こうとする妖夢さんを慌てて押し止める青娥さん。

「完全に斬ろうとされていますよね……!?」

「……其はともかく……」

多分斬るに足りない者と判断した妖夢さんは刀から手を離し、

「……配下のキョンシー……えっと……宮古…芳香さん…ですか……？」

彼女はどうしたんです？いつも一緒にいるんじゃないあ……？」

「え……？ああ……芳香ちゃんは今、別のところで活動中よ。とある理由でね」

「……』とある理由でね』……？」

鈴仙さんが最後の言葉を繰り返しました。私も気になった部分です。

「……………何ですか？」

「とある理由と言えばとある理由よ。其のまんまでしょ？」

「…あらやだ……………」

其処で鈴仙さんと妖夢さんが並んでいる姿を見て、ようやく気付いたようです。

「もしかして貴方達だったの？有名なカップルは……………懐かしいわ…私にもそういう時代があったわね……………」

最後の言葉は小声でしたが、離れていた私にもはっきりと聞こえました。

……………どういう事でしょうか……………？

ですが其以上は何も言わず、青娥さんは妖夢さんと鈴仙さんから離れて

其のまま私の方にも近寄って来ました。

眉を細め、明らかに嬉しそうですではありませんでした。

「そして、貴女は……………」

「…り、りりーホワイト……………ですが……………」

「…りりーホワイト……………？」

そう言つと小首をかしげ、

「別者なのね？私はてっきりイメチェンでもしたのかと……」

少し安心したように見えました。

其の言葉を聞いた私は思わず顔を歪ませました。
もしかして……

すると妖夢さんが、代わりに訊いてくれました。

「！リリーブラックを……知っているのですか!？」

「其はもう……」

青娥さんは溜息をつき、

「私が邪仙だ、悪事を重ねているだのと情報を嗅ぎつけるなり、
『青娥様！俺様を弟子にしてくれ!!』なんて場所を突き止めて訊ねて
きてね……」

其処で溜息をつき、

「断つても断つても来たものだから……じゃあ一つ、何か者を盗んで
来なさいって……」

ほら、私って壁抜け出来るでしょ？此を使って……」

そう言つと髪に差していたかんざしを触りながら言いました。

「だから、貴方にも出来るのかしら？ってとある人間の里に連れて

行って実践させたけど、

其のやり方がもう、私以上に酷くて……」

「酷い？其はいつたい……？」

妖夢さんが尋ねると、青娥さんはまた溜息をつきました。

そして不快そうに目を細め、

「……自前の配合薬で異形にした妖精を何匹も放って襲撃させ、里がパニックに

陥った隙に盗みだすという荒業に出たのよ……流石に慌てて止めたわね」

「!!」

「此のままだと私にも風評被害が及びそうだったから、すぐに縁を切ったって訳。

其でもまだ迫って来た事もあったから、ある意味死神よりも恐ろしかったわね……」

「其じゃあまるでストーカーじゃないですか!」

「でも、今日くらいに逮捕されたって噂を聞いたから、其はもつ……」

胸を撫で下ろしている青娥さん。

仙人をも震えあがらせるとは……やってくれますね……

「……」……其の話は此処までして……」

彼女は再び私達に近寄って来て、

「暫くだけど、貴方達と一緒に同行しても宜しいかしら？」

「!!え……？」

でも私としては……飛び方と良い、喋り方と良い……

此の人、危ない雰囲気漂っているんですけど……

「だってえメタ過ぎますが、まだ一話しか出ていないもん」

！た……確かに……メタ過ぎます……其の発言……

「フフ……良い寝所を知ってますわ。其処に案内してあげましょう」

そう言つとさっきと同じ様に、髪に差していた鑿を抜き、

「そおれ、魔法の始まりよお……」

其を使って近くの地面に円を描きました。

すると、其の形にくり抜かれる様に其処に穴が開いた。

「!!」

私と鈴仙さんは驚いて飛び退いた。

ですが一度は見た事があるらしく、妖夢さんは其を訝しげに見ていました。

どつちやって地面が開くのかを、見極めようとしたのでしょうか……

「ちやっ、参りましょ、御一方？」

穴の傍で御辞儀をし、最初に妖夢さん達を誘いました。妖夢さんと鈴仙さんは怪訝そうに顔を見合わせましたが、

「こんな開けた場所で寝るのは流石に危ないですね……」

「……そうですね」

納得して穴の中に入って行きました。

どう考えてもあの人、絶対二人をいぢる様な気が……
良い展開が想像できない様な気がするんですけど……

次に私を誘ってきました。

其の時に見せた流し目は、同性の私でさえも思わず息をのむほどでした。

ですが………何かあれば、二人を守るのは私なんです。

春は………必ず守って見せますよ！

そう思って私も穴に入りましたが……

其の穴の中から青娥さんの顔を見上げた時、私は驚きました。

「？………どうしたの？」

彼女は笑顔で私を見返してきました。

私も笑い返そうと思いましたが、口角が上がらず上手く笑えませんでした。

そして穴の中に入りました。

汗が止まりませんでした。

地面の中が湿気で覆われているのもありましたが……

私は……見てしまったんです……

あの時、穴の縁で青娥さんが一瞬だけ見せた……

恐ろしく残酷な、そして……邪悪な笑みを……

春ですけど夏ですから……

REISEN

とある一室

私達は、私達にしては豪華すぎる部屋の中にいた。

ベッドが四つあり、テレビもあった。清潔な一部屋だった。

「フフフ……スイートルーム、御気に召しました？」

感心する私達の後ろから、青娥さんが声をかけてきた。

「ささっ、私は芳香ちゃんを捜しに行かないとね……じゃ、ごゆっくり」

そう言つと、這い上がってきたあたりの床にまた穴を開けて中に入ってしまった。たちまち穴は塞がってしまった。

部屋に取り残された私達。

「……お一人とも……」

するとリリーホワイトさんが近付き、小声で私達に囁いてきた。

「私、嫌な予感がするんですけど……」

……実は其の事については私も、穴に入る時には薄々感づいてはい

た。しびんさんも気付いていたに違いない。

しかしあそこで下手に拒むと、相手が相手だったため何をされるかは判らなかつた。

其にあんな開けた場所で戦闘を行えば、巡回しているマリス達に気付かれてしまう可能性も高くなる。

其処で仲間を沢山呼ばれてしまえば、助かる可能性は零に等しい。

ふとうどんさんは、テレビの黒い画面を見ながら言った。

「そついえば現在のMHKニュース、どうなったんでしょう……」

最近一人に烏天狗、射命丸文さんを含む二人の天狗で司会を行っていた途中に

マリス達の襲撃に遭い、其のまま放送終了というハプニングを起こしていた。

其から所持していたガラパゴス式の連絡器のワンセグ機能で毎回確認はしていたが、放送休止のままだった。

……今の状況で何故そう思ったのかは判らなかつたが。

「確かに……此の間に、何か情報を掴まないと……」

そう言つて私はテレビの近くに置いていた、黒いすずりぐらいの大きさのものを掴んだ。

此がりモコンに間違いはない。

本来私はリモコンというものは判らなかつたのだが、白玉楼にいた頃にテレビを観る際、

幽々子様がいつも所持、占領していたので其の形や操作方法もはっきりと覚えていた。

幽々子様がやっていた様にリモコンの一番上の端にある、赤いボタンを押しながら其を画面に向けた。

すると暫くして電源が点き、黒い画面が一気に彩られた。

【…天狗が最も怖いと思ったランキング第1位… 潜む影】

「!?エ”…………!??”

ホラー番組だった。思わず顔を歪めてしまった。

私は半人半霊という家系の者ながら、幽霊系統が大の苦手なのであった。

いそいでリモコンの別のボタンでチャンネルを変えようとした。

が…………

「……………あれ…………?’

「……………どうしました?’

「……………チャンネルが変わらない…………’

「!え……………!?’

「変ですね……………幽々子様は、いつも此で変えていたのですが……………’

何度押しても、変わらなかった。

すると、リリーホワイトさんが、

「！妖夢さん、テレビを消せばいいじゃないですか？」

「！そ……そうでした……」

もう一度赤いボタンを押しながら、リモコンをテレビに向けた。

だが……

「！電源が……切れない……!？」

「!?え……!？」

リモコンでも、更にテレビに直接ついている電源を押ししても無駄だった。

「!、怖いですよ……」

「……暫く、我慢するしかない様ですね……」

其処で私達はベッドの上の一番奥に体育座りをし、出来るだけ三人で身体をくっつけて見た。

身体がまた震えていた。しかし私だけでなく、うごんさんもリリーホワイトさんもそうだった。

【とある昼下がりに遊んでいる、五人の妖怪少女……一人が遊ぶ四人の姿を撮影している】

ナレーションと同時に、其の通りの光景が画面に映し出された。

其の時私は、その遊ぶ少女達の一人に見覚えがあった。

「……影狼……？」

「！え……!？」

顔にモザイクがあるものの、其の姿は明らかに狼女、今泉影狼だった。

以前に迷いの竹林で一戦を交え、更にその後にもう一度出会ったので忘れる筈が無かった。

となると撮影者含む、残りの四人は……

【彼女達の奥にあるのは、どうやら廃神社の様だ】

！うう……紫色の『廃』と赤色の『神社』の文字……
何て毒々しい色のテロップを使ってるんだ……

そう考えていると、

【『ねえ、私も混ぜてくれない？』

『じゃあ其処にカメラ置いて来たら？一緒に写れるじゃ』

『……そっね』

そして撮影していた少女もカメラを傍に置き、彼女達に加わった】

……集団に駆けていくあの姿……指名手配にもあつたらくる首……
赤蛮奇……だっけ……

彼女に違いなかった。

今は全員無罪になったと、影狼は言っていたけど……

【しかしカメラは、彼女達の他にいた、不可解なモノも映してしまっ
た】

そう言つと、五人が遊ぶ姿が映し出されたまましばらく時間がたつ
た。

しかし、私には何も変化は見えなかった。

ふと、隣を見るとうどんさんの顔が青くなっていった。

リリーホワイトさんも口があわあわしていた。

「……どうしました……一人とも？」

そう訊ねると、

「……いた……さっきましたよ……!!」

「私も……見付けてしまいました」

「!?うそ……何処に……!?」

【お判り頂けたらどうか……】

そういつといつの間にか、画面ではリプレイに入っていた。

返事が無い。うごんさんが顔をうつ伏せたまま黙っていた。

「うごんさん……どうしたんですか？」

肩を揺ると、彼女は其のまま座っていた布団に倒れた。

「!？」

全く動かない……気分が悪くなったのか……!？」

「リリーホワイトさん……うごんさんが……!？」

すぐにリリーホワイトさんの方に向いたが、
其処にはいつの間にか地面に落下し、動かなくなっていた彼女がいた。

「……リリーホワイトさん……!？」

……いつたい……何が……!？」

すると、私は部屋にある違和感を感じた。

此は……異臭？……

「!？」
「!？」

しかし、気付いた時には既に遅かった。

私の意識は、静かに下に、下に、落ちて行った。

邪仙の計画〜前編

YOU MU

〜
???

頬に感じるひんやりとした地の感触に、私は目を開けた。

「……………」

どろちやらうつ伏せに寝ていたらしい。

ゆっくりと地面に手を突き、身体を起こす。

「お目覚めかしら……………幻想郷のオスカルさん？」

だが声が聞こえ、一変して弾かれる様に立ち上がり、其の出所を探す私。

其は上空から聞こえていた。

「…青娥さん!!」

気持ちが悪いくらいにニヤニヤしている。そして其の隣には…………

「!!つごんさん!!リリーホワイトさん!!」

まるで鳥籠のような浮遊物の中につごんさん達が閉じ込められていた。

「此は……………何のつもりですか!!」

「そう怒らない。其より此処は何処だが、判るかしら？」

そう言われて初めて周りを見渡した。暗い洞窟の中の様だが……
だが私は此処が何処なのかに気付いた。

『神霊廟』……!!」

命蓮寺の地下に存在する『夢殿大祀廟』の内部に在り、かつて私達が解決に挑んだ

神霊異変の黒幕、豊聡耳神子さんが祀られ、彼女との決戦の場ともなった場所だった。

……後に、あの異変は青娥さんが本当の黒幕だった事が判ったが、
今は廃墟と化し、一般人でも立ち入れる様になっていたが、
最終的には野良妖怪の溜まり場になったと聞いている。

おそらく、壁抜けを利用して侵入し、私達を連れてきたに違いない。
すぐに剣を抜こうと背中中に手を伸ばしたが、

「！剣が……!？」

其処には剣が一本とも無く、鞘も無くなっていた。

「お探しの物は此で……?」

青娥さんが私の方に出した其の手には二本の剣が握られていた。

気絶している間に盗られたのか……!」

「……貴方達は生温いのよ……」

私の剣……あの長さから楼観剣の方を抜き、眺めながら青娥さんは話し始めた。

「さっき私言いましたよね……」私にも貴方達みたいな時代があった』って……

私にも恋愛経験があるのよ」

!?!?……何と……??

「あの時代はかなり壮絶だったのよ……? 其に比べて今は……」

そうか……青娥さんが見たいのは……

「私達の親愛度を……?」

「そう。だから、貴方が此の娘の間にはどれ程のモノをあるのか、訓練してあげるって訳」

そして剣を鞘に収めた。

「ありがたく思いなさいよ?」

何がだ……内心では、暇潰し程度にしか考えていないのは見え見えなんだぞ……

「ちあ、私の可愛い部下が相手よー」

「!!……」

ふと、前に視線を戻すと、

「くんれんじゃ~~~~!!くんれん~~~~!!!」

青娥さんの配下のキョンシー、宮古芳香さんが立っていた。
今判った。芳香さんが活動していた理由は、此の為の準備だったんだな……？

「……良いでしょう……ごんさんは必ず助け出します……」

其処で致命的なミスに気付き、慌てて修正する。

「!リ、リリーホワイトさんも……助け出します!!」

YOU MU

VS 忠実な死体 宮古芳香

壁抜けの邪仙 霍青娥

〜 夢殿大祀廟内 神霊廟

「カアアアア!!!!」

芳香さんがいきなり口を開けて飛びかかって来た。

私はジャンプし、其の頭を踏みつけた。

「!?おぉ……………」

其のまま踏み台にして大きくジャンプする。

離れた場所に着地し、素早く振り向く。

芳香さんは頭を踏まれた衝撃で、つんのめっていた。

其処を素早く近付き、其の背中にタックルをかました。

が、ビクともせず逆に私の肩に痛みを感じた。

此ではただ敵に居場所を漏らしただけになってしまっている……

!

すぐにバックステップで距離をとる。

間一髪、私のタックルに気付いた芳香さんが、振り向きざまに爪で薙ぎ払っていた。

白楼剣と楼観剣が無い今、私には半霊による弾幕しか攻撃手段が無い。

しかし、あれはあくまでも斬撃に繋げる為の牽制用であり、其の威力は低い……

ましてや、痛みや怯みを知らないキョンシー相手ではほとんど効果をなさないだろう。

だからといって操っている青娥さんを狙おうにも、うごんさん達がいる。

盾にされる可能性も高く、つかつには手を出せなかった。

「芳香ちゃんー毒爪『ゾンビクロー』よ!!」

痛い……そして堅い……やはりキョンシー相手に、肉弾戦は効かないか……

殴る際底になった小指をさすりながら後退する。

芳香さんはまるでつつかれたダルマの様に立ち上がり、此方に身体を向けた。

「ムムムウ……!!」

私の動きに翻弄され、自分の攻撃が当たらない事にイライラしている様だった。

すると、青娥さんが、

「……やはり芳香ちゃんだけでは物足りない様ね……じゃあ……」

そう言いつと、右手を上げ、

「出番よー！出て来て頂戴!!」

其の瞬間、地面から大量の人が穴を掘り、這い出てきた。

「!?「ヒイイ……!?」

私は悲鳴を上げてしまった。

どれも死体だったからだ。其も少なくとも百体……否、其以上はいらるだろう。

「…みよんさん!!」

檻の中からうごんさんの声が聞こえた。

だが、此じゃあ……まるで勝ち目が無い……丸腰の私が物理の効かない、

おまけに苦手な屍達にどう対処しろと……!?

でも、此処でうごんさん達を諦める訳にはいかない……!!

其の瞬間、上から大量の剣が降り注ぎ、私とキョンシー達の間を刺さった。

「!?皆……止まるのよ!!」

突然の剣の柵の出現に、青娥さんが慌ててキョンシー達に制止を命じた。

其の命に従い、止まるキョンシーの軍団。

すると私の前に、一つの影が降り立った。其は……

「…藤子やん!!」

魔界の創造神、神綺さんの腹心ともいえるメイドさんだった。

「どうして…此処に…?!」

「ユウゲンマガンから話は聞きました。

神綺様より貴方達を援護するようにと命じられ、参りました」

上空にいる青娥さんを真っ直ぐ見据えながら答える夢子さん。

「……直に神綺様が大勢の魔界の者を連れ、此処に来られるでしょう」

心強い……魔界の住人達が、私達の援護に……

夢子さんは懐から二本剣を取り出し、周りにも数十本もの剣が漂い始めた。

ナイフを扱う咲夜さんと違い、夢子さんは剣を扱うのか……

其を見た私はすぐに彼女にある事を頼んだ。

「夢子さん……剣をどれか一本、貸してくれませんか？自前の剣が取られてしまって……」

「構いませんよ。どうぞ御取り下さいませ」

前方に走り、柵を形成していたうちの二本を引き抜いた。

そして夢子さんの元に戻り、其の剣の感触を確かめた。

此の重量感……剣にしてはなかなか上質なもので、初めて握る私からしても扱えない事はなかった。

其の様子を見ていた青娥さんが顔を歪めていた。

「まさか……貴方達、魔界を味方につけていたのね……」

邪魔が入った様だけど……まだ試練は終わっていませんわ……」

そして片手を上げ、叫びながら私達の方に振り下ろした。

「やあ、行きなさい!!」

其を合図に制止していたキョンシー達が、一斉に雄たけびを上げた。

私達も剣を構える。

「行きましょう、妖夢さん!」

「ええ!」

待ってて下さい……うづんさん……!!

私達は剣の柵を倒し、押し寄せる屍の群れに走って行った。

邪仙の計画〜後編

SEIGA

VS 半幻想の庭師 魂魄妖夢

魔界メイド 夢子

〜 夢殿大祀廟内 神霊廟

「……………面倒な事になったわね……………」

私、霍青娥は、げんなりしていました。

其の理由は目下の剣士、魂魄妖夢さんに対する、思わぬ助太刀でした。

「気を付けて下さい、夢子さん……………相手は死体。痛みも怯みも知らない恐ろしい存在です！」

其の見た目は紅魔館のメイド、十六夜咲夜さんの色違いのようでした。

そして私が妖夢さんから奪った剣の代わりとなる剣を彼女に渡していました。

「うう……………」

妖夢さんは、怖いものは苦手という事は変わりはない様です。

「！大丈夫ですか？」

「私……………怖いものが苦手……………」

「そうでしたか……なら、代わりに……」

「!!い、いえ、御気にならさず……」

「……………どじいつ事っ、怖いのに、なんで……………?」

「私が手下を相手にします。夢子さんはあの仙人をお願い出来ますか？」

「了解致しました」

「奇襲に気を付けてください……………あの仙人は壁の中には入れません!」

実は此の娘達を見張るのに、私はあまり動けないのですから……………
恥ずかしい話ですから直接口には出しませんが。

でも、おかしいわね……………彼女は怖いものは苦手なのは把握済みなのに……………

あえて私ではなく怖いであろう屍達の方に向かうなんて……………

「彼岸剣『地獄極楽滅多斬り』!!!」

そうこう考えるうちに妖夢さんが芳香ちゃん率いる屍達の群れに突っ込んでいきました。

「!!!」

目を疑いました。

自分のものでない剣を扱い、スペル名から予想していたものとは明らかに異なる、

鮮やかな立ち回りでキョンシー達を次々と……!!

一撃を喰らい、吹き飛んでいく可愛い手下達。

「!!!」

今、はっきり判ってしまいました。隣の檻の中の少女達を見ます。

彼女は、此の娘達を助け出す為ならば、

例え怖いものが相手でも、例え不慣れな武器でも……!

剣を振る、妖夢さんの顔は半ば泣きながらも、頑なな意思の様なものを感じました。

~~~~す、素晴らしいですわ……此処までのものだった、とはね……

思わず見とれていると、

「!!」

自分の前方から多量の剣が飛んでくるのが目に入ってきました。

「~~~~せ、仙術『壁抜けワームホール』!!」

スペルで慌てて傍の壁の中に入り、剣をかわしました。

「脇見している場合ですか?」

壁から戻った私の前に、さっきのメイドさんがいました。

「……とはいえ、壁の中に入れるの流石に厄介ですね」

「夢子さんー！」

隣の檻の中から聞こえます、剣士の愛人の声。

「貴方、紅魔館のメイドさんではないのかしら？姿がそっくりですが……」

「？何を言っているのか、私にはさっぱりです。ですが……」

其の目付が変わり、其の両手には剣が握られていました。

「神綺様の命故、邪魔はさせません……其の方々を解放して頂きますように……」

すると、剣を構えていた彼女の表情が変わりました。

「!??」

「……??」

どづしたの、かしら……?」

なんだか急に竦み上がったようになりましたが……」

「……神綺様……!？」

「!？」

もしま、新手…!？」

そう思い、後ろに振り向きました私の横顔に、殺気と共に強い衝撃が走りました。

「!???  
~~~~~」

其のまま私は下に弾き飛ばされ、意識をも吹き飛ばされました。

SEIGA

～ 夢殿大祀廟内 神霊廟

頬に感じるひんやりとした地の感触に、私は目を開けました。

「~~~~~」

どろちろと伏せに寝ていたらしいですが……
ゆっくりと地面に手を突き、身体を起こしました。

すると、頬に激しい痛みを感じました。

「お目覚めですか……幻想郷の……えっと……」

「……メフィストフェレスあたりが妥当じゃないかしら？」

「！成程、いい良いですね……流石です、神綺さん……」

声が聞こえ、ゆっくりと立ち上がり、声の出所を探します私。

其は頭の上から聞こえてきました。

見上げると、銀髪の六つの翼をもつ少女が此方を見下ろしていました。

其の顔に浮かんでいた、目の笑っていない笑みで思い知りました。

「貴方が……わ、私の頬に……」

そして、其の隣には妖夢さん達も私を見ていました。

ですが私にパンチをした彼女の事を気にしているようでした。

その後ろには細切れにされ、無惨に散らばる檻の残骸がありました。

そして私達の周りには今まで見た事のない人達が御喋りをしていました。

魔界のさらなる援軍に違いありませんでした。

「オオオ……動け……ない……!!!」

「！芳香ちゃん……!?!」

檻の近くでは全身を縄で縛られた芳香ちゃんが横倒しにされ、
数人の魔界の方々が其の周りを取り囲んでいました。

他のキョーンシー達の姿がありません。私の気絶している間に全て
征伐されたのでしょうか。

「……神綺様……捕獲……成功……」

五つの目玉から伸びた黄色い糸が、まるで少女が敬礼したように動
いていました。

「ありがとうございます、ユウゲンマガン」

銀髪の少女が答えました。

其の更に隣には、先程まで対峙していたメイドさんがいました。

其を聞いた私はハッと自身を見下ろしましたが、縛られてはいませ
んでした。

でも周りを見渡すと少なくとも、魔界の方々は十人以上は確認出来
ました……

「ちょっと……遊びが過ぎたようですわね……」

そう言って頭に手をやった私は、鑿が無くなっている事に気付きま
した。

「お探しの物は此ですか？」

そう言って差し出した妖夢さんの手に、其はありました。

不覚にも、私がやった事を其のまま返されましたわね。

そして其の背中には私が盗っていた刀が鞘に収まっています。

(……詰んだわね、此は……)

そう思い、両手を上げて降参のポーズを取りました。

「為にもならなかったわね……こんな訓練……」

すると彼女は、

「私達の為に、わざわざ此の試練を用意してくださったのなら、感謝致します。」

私に鑿を返してくれました。其もわざわざ手渡して。

其を受け取りました。……大したものね……

「どっしてこんな事をしたのかしらっ。」

神綺と呼ばれた、銀髪の少女が詰め寄ってきましたが、

「良いんです……どっちら、悪気は然程無かった様ですから」

妖夢さんがなだめ、

「……貴方が言うなら、構わないけど……」

其以上は追及しようとはしませんでした。

「！一つ情報がありますわ……彷徨していた先で聞いた事なだけ
ど」

「!!」

「此の頃、幻想郷を侵略する影……マリス……でしたっけ……ソイツ等
の力が
ますます強まってきたと聞いたわ」

「!？」

フフフ……驚いてくれるようね。
でも一同がどよめくを見て、笑みを浮かべる事はしませんでし
た。

「どうやら、発生源で何か良くない事が起きているみたいですね
……」

「アリスさんに何か起こったと……!？」

「アリスちゃんですって!？」

今度は妖夢さんと神綺さんが同時に詰め寄ってきました。

「みよんさん！神綺さん！……此は聞いた話だって！」

ですがすぐに鈴仙さんになだめられていました。

すると神綺さんが他の魔界人らしき少女達に何かを伝え、其を受け

た者は

芳香ちゃんの縄を解き、起き上がらせ、此方に連れて来てくれました。

「外に案内しますわ」

其処で鑿を円形状に動かし、壁に穴を開けて、と……

「本当に良い宿泊室があるの。紹介出来ますけど……」

しかし後ろを向くと、彼女達はまだついて来ていませんでした。

「?………来ないのかしら?」

すると、妖夢さんが、

「!あ、申し訳ないんですが……私達は神綺さんに外に出ますので………」

………思わず、固まってしまいました。

「!!あ、只………その………神綺さんの方が速いって、仰ってましたから………!!」

見ると神綺さんが弁解する彼女の隣で、

「エヘンプイッー!」

と言わんばかりになっていました。

「……そ、そう……」

そう言って、私は芳香ちゃんとトボトボと穴の中に入って行きまし
た。

彼女達の此からが楽しみね……

始終を見たいけど……此方も、暇ばかりじゃないですね……

穴を掘り進みながら、そう思っていました。

「青娥様……！私がいるから心配な……いぞ……！！」

隣で芳香ちゃんがなぐさめてくれました。

「……ありがとね、芳香ちゃん……」

「でも本当……いろいろ空回りで、残念ですわね……」

思わず、溜息が出てしまつたのです。

Requests・リリースブラックがアップを始め
たようです

LILY BLACK

↓地獄 勾留所

「……………」

俺様、リリースブラックは鉄格子の中から外の相手を睨んでいる。

「……………」

睨まれている相手もこっちを見ている。若干半目だ。

「てめえは此処が担当じゃねえだろ。船漕がねえのかよ」

「今は漕がない。だからと言って、お前にオールを渡すわけじゃあな

い

『お前が消えて喜ぶ者』だからな、俺様は「

ケラケラと嗤ってやる。

「お前さんがあまりにも過ぎた事するから、専属の看守も任されたん
ね」

「サボタージュの泰斗にとっちゃあ良い苦薬だ。様あ見る。此の、紅
髪シンサポッテール」

「何だい其。あたいにシンデレを求めてるのかい？」

「求めねえよ。気持ち悪い」

はぁ、と溜息をつかれる。

「私は小野塚小町だ。本当に名前覚ええないね。ず……っと世話になってるって言うのに」

「名前を覚えるだけの脳があるなら、其の分も俺様の為に使っただけだ」

今俺様は、地獄の中にある、勾留所の中にいる。

精密検査を受け、地獄で閻魔様の裁判を受けるまでの間、ブチ込まれているって訳だ。

「其に仕事が増えたんだから、寧ろ甘い薬さね」

「へっ、甘いものに頼っていると、ほっぺどころか首まで落ちるぞ」

「！忠告をするなんてらしくないじゃないか」

「見てえんだよ。あの閻魔から直接リストラされる瞬間をよ。」

んで、ついでに制裁されて、首チヨンパのバーラバラにでもされる」

そう言った途端、相手の目付が一気に変わった。

「……………前倒して処刑にされたいかい？」

椅子から手を伸ばし、壁にかけていた鎌を掴んだ。

「やれるもんならやってみるよ。死神の鎌って、単なる飾りだって聞いたけどなああ？」

「さっき実際に斬ってやったじゃないかい」

そう言いながら女は鎌を壁に掛け戻す。

やっぱり斬る気無えじゃねえか、此の腰抜け。

「そんな昔の事は忘れた」

「……やっぱり妖精だよ、お前さんは」

「！んだとゴラァア!!!」

妖精……最も嫌いな奴等と一緒にされた俺はブチ切れて、格子を両手で掴み

ガンガンと揺らした。

他の囚人はとつくに寝静まっている時間だが、俺様だけは別の牢獄に隔離されていたから

気にする事も無かった。

「はははは！怒ってる〜。頭に血が昇ってるね〜」

そんな俺様をみて腹を抱えて笑っている、生意気なサボリ魔。

「今度も絶対に脱走して、てめえの首をぶっ飛ばしてやるからな!!!」

「あはは……今回は警備もだいが強化したからねえ。前みたいに生物兵器を遠隔操作で送ってきても撃退出来るさ」

私は鉄格子を突き離し、荒々しく奥の方に戻った。

ベッドの上に這い上がり、壁に向かって体育座りをした。

其の背中に声をかけられる。

「あの爬虫類みたいな奴等、もともと妖精だったんだってね？」

「……………死亡解剖した結果か？」

後ろを見ずに応える。馬鹿にされたが仕返しすらままならない。おまけに白黒の縞模様

という、白の混じったセンスの欠片も見当たらない囚人服まで着せられる始末だ。

チツ、不愉快で仕方無え。

「薬で細胞の成長を無理矢理操作して……………どれだけ妖精を犠牲にしたんだい？」

「死神でも判る筈もねえ桁程」

「なら、どちらにしる極刑も範疇って事になるねえ」

「犯罪は重度且つ多数な程、裁判は長引くって聞いたぜ。すぐには決まらねえ。

何せ罪は慎重に決めねえとなあ……………だろ、コマチナ？」

「野菜みたいに言っな。嗚呼、後さあ」

唐突に話の腰を折りやがった。

「お前さん自身も薬で身長を伸ばしていたみたいじゃないか。そんなに小さいのが嫌いか？」

其処まで自分自身の種族を嫌う必要があるのかい？」

「……てめえ、尋問係でもねえのに其処まで首を突っ込む必要があるか？」

「いやあねえ」

其処で少し間を置いたが、再び声をかけた。

「お前さんがライバルに負ける理由が其処にあるかもしれない、と思ってね」

其の言葉を聞いた私の頭に、見覚えのある奴等の顔が浮かんだ。

幸せそうに歩いている二人の外道、そして憎たらしげな笑顔をしたリリーホワイトだ。

其のシーンがぐるぐると頭の中を回り出した。

最悪だ。構わず舌打ちをする。

アイツ等は俺様の目の前で堂々と同性愛という、タブーを見せびらかした。

そして春告精である筈のリリーホワイトは其にあやかり、活気を取り戻すという

醜態までさらした。

其どころかアイツ等のせいで戻りたくも無い処に再び放り込まれ、辛酸を舐めさせられた…!!

怒りでワナワナと震え始めた。

「あんの、ド腐れ共おお……！」

そう押し殺した声で言った俺は、怒りに任せて拳で壁を殴った。

指が数本折れたがすぐに再生した。

妖精の力が働いた。其の事が更に私をイライラさせてくれた。

だが、同時に自分の顔がニヤけていくのにも気が付かなかった。

何も怒る事は無いか……もうすぐ、此処から出られるんだからな。

後ろの死神にとってはがっかりしているようにしか見えない。

だが、俺様が画策をしている事までは知らない様だった。

俺様だって何年も、何十回も捕まっていれば巧妙な対策は練る様にはなる。で、相手も

脱走を防止しようと策を練る。

だが、今回ソイツが奴等の今までに施した対策が全て無駄になる、驚きの作戦となるだろう。

死神の名折れめ……てめえの首が飛ぶのが楽しみだ……そして、次は

あの三馬鹿の首を飛ばす事になる。

「待ってるよ、ガキ共……今度こそ、お前達の春を終わらせに行ってる……！」

するど、

「！^……？」

急に身体が落ちていった……というより、落とされた。

誰がやったのかは判った。が、どうして今なのかは判らなかつた。

L I L Y B L A C K
～亜空間

「……………」

落ちていく。何処まで落ちるんだよ、此？

因みに翅は使わなかつた。使った時は負けだと思っている。

自分を妖精だと認めちまう。

そう思っていた途端、思いっきりケツを打った。

「!!!ア''ア''ア''~~~~~!!!!」

激痛に呻いてる私の傍らで足音が聞こえた。目だけを向けると足が見える。

痛みに堪えながら其の方向を見上げる。

「~~~~と…唐突だな…もう、そんな時間か？」

立っていたのは俺が標的にしていた、一匹の月兔だった。

が、其の目は蒼く、身体の一部は擬態が解けて黒いへドロみたいになっっていた。

「……当然、俺様の擬態は、置いてきたんだろうな？」

「デナケレバ、トックニバレテ騒ギニナツテルワ」

其の黒い部分に新たに開かれた蒼い目が、瞳を動かして此方を見た。

「今、其の擬態で来られると殺意が増すんだけどな……」

「ジャア仕方無イ……別ノ姿ニナルワヨ」

そう言うと、其の姿は溶けて本格的に黒いへドロみたいになった。そして暫く蠢くと、別の人の形をとり始めた。

「!?」

其の姿に見覚えがあった。

黒と白、そして赤い前髪、そして矢印をあしらった衣装。そしてその顔は不機嫌そうに歪めた、見慣れたものだった。

「せ、正邪様…じゃねえか…!!」

幻想郷で謀反を起こし、追われた天邪鬼。青娥様に次ぐ、俺様の憧れる人物だった。

だが、すぐに気付いた。

「お前…まさか正邪様まで…!!?」

「龍宮ノ使イノ人形ハ、晴レテ『私』ノ人形ニナッタノヨ」

普通なら尊敬する人物に手を出して怒る場面だろうが、

「そつか…流石は俺様の後輩だ……」

俺様を弟子にしなかった、其の罰があたったと思えば良かった。

弟子に相応しいかを試す際にする、度が過ぎた凶行にひかれ、いつも断られていた。

青娥様の時もそうだった。

「!ソウソウ、脱出ヲ早メル理由ダケド……御客様ガ御見エニナッテルヲヨ」

「? 御客様だあ?」

「ソウ、アンタニ助太刀シテクレルソウヨ?」

其の言葉を合図に、後輩の奥から誰かが出てきた。

「!?お、お前……」

俺様が全く予想もしていなかった奴だった。

知ってるやつとは明らかに様子が違い、無言だった。

だが、其の状態を見た私はピンときた。

「……そう言う事か。なら、話は速え」

其でもソイツは黙っていた。

フードの奥の眼光が鋭い。流石の俺も思わず震え上がった。ちまった。

「へへ、何か……暗躍者みたいで、感じ出てるじゃねえかよあ」

どうやら、名乗る必要も無さそうだった。後輩達が私の事を、充分に伝えてくれているに

決まっている。そうに違いない。

「まさか、君が私の味方をしてくれるとはねえ……ふうん……」

少し、調子に乗り始めた俺様。其の人物の周りを歩き、品定めをするかの様に観察し始めた。

そして指を鳴らし、

「ようし！…本名は隠して…今からお前を……」

「名前八決マツテイルワ。『クルム』ヨ」

思わず水を差してきた後輩の方に、顔を向けた。

「もう、決まってるのかよ……じゃ、じゃあ、そう呼ぶか」

喰えねえな……もう少しムードに付き合えっての。台無しじゃんかよ。

そう思っただ顔をしかめたが、

「妖夢達ノ場所八、捕捉シテイル」

其の情報を聞いた俺は、すぐに接近する方法を考え出した。

「なら、近い場所にワープして徒歩で近付いて叩くぞ。

いきなり懐に出てきた処で、警戒されていたら流石に勝ち目が無えからな」

薬の調合や機械に慣れている俺様からすれば、どれが一番都合で効率的なのはお見通しだった。

「元霊嬢ノ警護役、ソシテ元エリート揃イノ月ノ兎……確力ニ、其ガ一番良サソウネ」

後輩からも太鼓判を貰えたところで……さて……そろそろ始めるかな？

「じゃ、頼むぜ。」

そう言つと俺は服の袖をめくり、自分の腕を後輩に向けて出した。

マリスは再び其の形を崩し、広がりながら腕に殺到した。

そして表面を小さく切り、其の傷から私の身体の中に侵入した。

其の様子を、クルムが無言で見ていた。

「……………」

腕から体じゅうに皮下に冷たいものが伝い、根を張って行くのを感じた。

「クヒ…!!」

善良な、平和ボケしている連中には絶対に判らない『浸食』の感覚だ。

何せ後輩達と敵対する奴等は、意識も奪われて行くんだからな。こんなもの、感じる余裕も無えだろつに。

と、同時に顔の右半分が一段と冷たくなり、そして右目だけ視界が広がっていくのが判った。

コイツァ……………其の目を指で触っていく。

其の手も指の先から手首までが冷たく、濃い紫色に変色していた。

「……………また二つかよ」

前もそうだったから別に気にする事は無かったが、見つかった騒動になるのが

面倒だし、一応包帯を巻いておかないとな……

そして身長が伸びていることにも気付いた。

此は薬要らずだな……だが、ビリビリに破れちゃったし、新しい服が必要か……

そう思っていると、

「！」

不意に目の前の空間が裂けた。其の先には、夜の森が口を開けていた。

「相変わらず、良い仕事してくれるじゃねえか……スキマさんよお？」

近くにいる筈のソイツに声をかける。今の俺同様、後輩に漬けられる大妖怪だ。

傍では新参者がまだ黙っていた。

「其じゃあ、行くか……クルムさんよ」

無言で頷いてくれた。凄え、こんな奴が俺の味方かよ……!?
思わずヒヤア、と心の中で歓んだ。

「ギヒ…さあア、覚悟しやがしよお……？」

そして俺様、リリーブラックは新参者と共にシャバへ歩いて行っ
た。

Requests・キャプチャー オリエンテー
ション

OUGA

魔法の森

「皆、今回は集まってくれてありがとうね」

夜の薄暗い森の中、俺を此処に連れてきた金髪の少女が声をかけた。

いや、正確には彼女ともう一人、俺の隣には俺と同じくらいの男の子が立っている。

見た目は現実世界で言う、普通の中学生だ。

異なる事があるなら……左腕が無い。

肩からすっぽりと抜け、服だけがはためいている状態だった。

「アイツも遂に脱走か……元気な奴だな……」

そう呟いている。

「竜神王牙君、九賀神矢君」

少女は俺達と少年の名前であろう名前を言った。

「私は、八雲紫。幻想郷の賢者として此処を守っている者よ」

「えっと、其はもう、知ってますけど？」

「一応よ。一応」

神矢と呼ばれた少年の言葉に応じると、紫と名乗った少女は周りを見渡し、

「後一人……確か、神崎駆真君が来るけど……」

「！駆真が来るんですか、紫さん？」

神矢が声を上げた。

「ええ……でも、諸事情で少し遅れるらしいから、とりあえずは此の二人で

行動して貰うわ」

諸事情……？ どういう事だ？

だけど俺が抱いたそんな疑問に関わらず、紫は言った。

「今から、今回の相手……リリーブラックについて説明するわ」

そつ言つと紫は少しの間黙り、説明を始めた。

「相手はスペルカードも持たない妖精一匹……でも、彼女には恐ろしい後ろ盾がいるらしいのよ」

「？ 後ろ盾……？ 何者でしょうか？ 支援する人物がいるんですか？」

神矢が聞くと紫は静かに首を振った。

「いえ、違つわ。其の後ろ盾は人間ではないのよ」

「じゃあ誰なんだ？強力な妖怪か？」

今度は俺が聞くと紫はまた首を振り、そして言った。

「非常に珍しい病気の副産物……負の感情の塊よ」

「！病気の……？」

「そうよ」

彼女は其処で一旦溜息をつき、

「其の感情達は影みたいな姿をしていて、個体によっては強さにバラつきがあるらしいけど、

共通して恐ろしい能力を持っているのよ」

「？能力？」

ホルスターから出ているドラゴガン一丁の持ち手を触りながら訊く。

「他の生き物の中に入り込み、洗脳する」

「!!」

「其の宿主の意識を奪い、其の身体を言い様に利用出来るのよ。そしてあげくの果てには、

宿主の姿を変異させ、身体各部位、あるいは全身をまったく別の生き物の様にも変貌させる」

「何だソイツ等は……寄生虫の類か？」

「性質はそうだけど完全に別種らしいのよ」

「壮絶だな……そんな病気が蔓延していたのか、此の幻想郷は……」

今度は完全に持ち手を握りながら言った。

「神矢君、貴方は見た筈よ。其の負の感情達を操る本体を」

「？本体？」

紫にそう言われた神矢は腕組みをして考え込む。

「本体なんて……いましたっけ？……」

するといきなり腕組みを解き、

「あの一つ目が……!？」

「そう、負の影達は珍しい病気を患う人形遣い、アリス・マーガトロイドから

排出される。そして其の精神は一つ……すべて彼女が影達を統制している」

「本体なんているのか……じゃあ、ソイツの病気を治せば……」

「影達は消滅する……んだっただけ……」

紫は上を見上げた。つられて俺達も見上げる。

木々の間から見える夜空には赤い月が昇っている。

紅い夜……紅霧異変を思い出すな。アスラとの激闘も思い出す。

『此の世界の』私も其をしようとしたけど、失敗したの……

結果、其の感情達に侵され、現在本体のアリスの腹心にされている」

「！ああ……手合わせた事がありました……ナイトみたいになってた様な……」

彼の言葉を聞く限り、どうやら、神矢は此の世界に来た事がある様だ。

「だから別の世界の私が、代役で貴方達を連れて来たって訳よ」

「紫いないと不便ですね、此処の幻想郷は……って、妖精の話はどうなったんです？」

「！話が逸れたわね……続きよ」

一つ咳払いをして話が戻される。

「リリーブラックには恐らく、既に影達を体内に入れている」

紫が俺達の顔を見た。

「遭遇すれば、必ず其を利用して貴方達を襲撃してくる。

だからもし相手がそうしてきた場合、容赦なく反撃してもいいわ」

「！ちょっと待て……捕縛しなくても良いのか？」

俺が思わず口を挟む。

「万が一の場合、殺してもいいと地獄から許可が下ったの」

「許可……其程、危険な奴なのか？」

そう俺が言つと、紫は一枚の写真を取り出して俺達に見せた。

「同種族の妖精達を生物兵器にしてけしかける程、非道で残酷よ」

「成程……」

其の写真には、伸長の描かれた板の前にいる白黒の囚人服を着た妖精がいた。

小さい身体の割に不機嫌そうに顔を歪めていた其の顔は不釣り合いに見えた。

なんか、不良みたいな雰囲気を漂わせている。

「相手は妖精本来の回復力と、体内に入れた影達の驚異の再生力で、容易にダメージを与える事は出来なくなっている」

「其の上で妖精とは思えない、規格外の攻撃をしてくるのか……厄介だな」

俺は思わず眉を潜める。

「弾幕勝負なんて事は此の際忘れた方がいいわ。スペルカードを持たないとはいえ、影の異形になれば脅威なのは変わらないもの」

「……本気でやっても良いんだな？」

「ええ、思う存分やって良いらしいわ。只、捕縛は狙える限り行って、

との事よ」

「!.....」

すると紫は何かを察したかの様に目を開いた。

「.....どうした?」

「もう、行くわ.....私の元の世界で動きがあったみたいだから.....」

そう言つと紫は後ろを向き、手を縦に静かに振った。

其の瞬間、彼女の目の前の空間が音も無く裂けた。俺達が通つて来た裂け目だ。

すると、何か思い出したかの様に再び俺達の方に向き直り、歩いてきた。

「貴方達.....此を持ってて貰えないかしら?」

其の差し出された両手には二個の紫と白の小さな球と二本の小さな注射器が乗っていた。

「此は、陰陽玉と.....注射器?」

神矢が其等を一つずつ受け取りながら言った。俺も其に倣う。

「其の陰陽玉は私と通話が出来るわ。何かあったり、仕事が完了したりしたら」

其に話しかけて」

「此の注射器は？」

俺は注射器を月にかざした。中の白く濁った液体が月の光で輝いている。

「影達に対するワクチンよ。一応、『مام』『Ma Mu』っていう正式名称もあるらしいけど……」

『此処の』永遠亭に事情を話して譲って貰ったの。万が一、貴方達の体内に影が

入った時、此を投与すれば死滅させられる」

「俺達に対する保険か」

「種族によっては、浸食が効かない者も居るらしいけど……一応持たせておくわ」

「助かるよ」

紫は二度踵を返し、今度こそ自分が開いた裂け目へと歩き始めた。

だが裂け目に入る一歩手前で止まり、少しだけ此方に首を曲げた。

「混沌に陥りつつある……此の幻想郷に、救いを……」

謳う様に言葉を発する其の顔は、髪に隠れてよく見えない。

「二人とも……御武運を祈っているわ」

そう言い残すと前に向き直り、八雲紫は目玉が浮いている空間の中に姿を消した。

「さて、まずは自己紹介からですね……歩きながら話しましょうか。時間ももつたいたないですし」

閉じられていく其の空間を見ながら、神矢が言った。

「其が良さそうだな。俺も聞きたい事があるし……でも出来れば、リリースブラックについても知ってる限りで良いから、教えて貰えると嬉しいんだけど」

「嗚呼、アイツね……にしてもかっこいいですね、其の銃」

俺達も話しながら歩き出し、夜の森の中へと入っていった。

Requests・Evils in Lab

LILY BLACK

玄武の沢

トトトトオオ……………!!!!!!!

「！滝か……………」

叢を掻き分けて森から出た私達の耳に、激しく落ちる水の音が突き刺さる。

玄武の沢だ。本当、丁度良いタイミングだな、おい。

近い内に聞いた情報で、其の滝壺の裏には洞窟があって、人間の旅人が妖怪から隠れて過ごせる絶好のスポットになっているとか。

「！あった…コイツだ……………」

そんな事は気にせず、俺は其の近くにある、大きな岩に駆け寄って岩肌を手を当てる。

「此ノ岩ガ、何ナノ？」

「まあ、見てろ……………で、えーっと…確か……………」

俺は岩の表面を撫でて、探す。

「！、此処だ此処だ……………」

周りの岩肌に似た様な構造の小さな蓋を見つけると、爪を使って取り外した。

其処から出てきたのは機械の一部だ。其の大半をカメラのレンズみたいな部分が占めている。

「コンナ機械ヲ、岩ニ埋メ込ンデイタノネ……」

「「うやあって隠しておかないと、馬鹿妖怪共がいじくって壊す可能性があるからな」

そして後ろにいるクルムの方を向いて、

「ちょっと待ってる」

と声をかけた。アイツは其の言葉に、無言で頷いた。

「悪いが、お前達マリスの目は当てには出来ん、俺様の目で行く」

岩に向き直った俺は岩肌に顔を近付けて、マリスの影響が出ていない左目だけで

機械のレンズを覗き込んだ。

すると其の覗き込んだレンズの奥から光が放たれた。

其の光が、目の表面を通り、光彩を読み取る。

光が消えると、岩から顔を離し、岩からも離れる。

岩が音も無く横に滑っていき、其の下から地下に続く鉄の階段が現れた。

「……完璧なセキュリティだろ？俺様の目が無ければ、此のアジトには入れねえ。」

尤も、俺様に擬態出来るから、お前達も侵入出来るが」

そう言いながら、鉄の段差に足をかけた。

「降りるぞ、ついて来い。着替えも兼ねて、少し準備するぜ」

今度は後ろを見ず、声だけをかけて薄暗い降りていった。

LILY BLACK

く玄武の沢 地下

階段を下り終えた俺は、暗い鉄の廊下を進んでいった。

後ろから別の足音が聞こえる。ちゃんとして来ている様だな。

やがて緑色の光が、見えてきた。一応後ろに警告をする。

「ショッキングな光景が見えるぞ。嫌なら目を瞑っておけ」

細い廊下の両側に透明なガラスの装置……いわば培養槽が並んでいる。

其に満たされた光源ともなっている液体の中に妖精の裸体が一基に

一匹ずつ入れられ、浮かんでいる。

腹のへその辺りに金属の管が何本も伸び、液体の中で機械と繋がっている。

さながら母体と胎児みたいだ。だがいつもの見慣れた光景だ。そんなモノには目もくれず、廊下をずんずんと歩いて行く。

そして廊下が終わり、小さな部屋に突き当たる。

此処にも機械が並んでいるが、俺は其の一角に置かれた、パソコンに乗った机に

一直線に近付いて行く。

机の上やパソコンが白くなっていた。

「チツ、埃被ってやがらあ……」

すぐに手で画面の埃を払いながら画面を綺麗にする。

電源のボタンを押し、しばらく待ち、暗証番号を入力した。

「埃が入り込んで、不具合起こさなきゃ良いんだが……」

パソコンがちゃんと動くか、椅子には座らずキーボードを指で叩いて確認を取り始める。

「……オールグリーン、久々に触ってみたが異常も無さそうだな」

ほっと息をつき、机から距離を離す。

「さて、着替えるか……此処で待っていてくれ」

そう言つと、奥に作ってあった扉の方に向かった。

其処で一旦振り返り、

「おっと、もしかして目の前で着替えて欲しいか？残念ながら絶壁だ
けどよ」

後退し、ドアノブに触れながらそう言った。

するとフードの奥で少しだけ目が泳いだのが見えた。

へへへ……やっぱ男だな、コイツ。

「じょーだんだよ、バーカ」

そう言って意地悪く笑いながら、ドアを開け、身体を中に滑り込ま
せた。

此の部屋にはトイレも洗面台も浴槽ある、言ってみればホテルにあ
る一室みたいな感じだが、更には衣装の入ったクローゼットもある。

完璧過ぎる程に詰め込んでいるが、何で実験室の隣って設定したん
だろうな、俺……

「わっ、とねにしよっか……」

ドアを閉め、クローゼットの扉を開けた。

まずは衣装選ぶ。着替えは其が決まってるからだ。

「……………あぁ……………コイツを着てみるかな……………？」

私は、ハンガーで吊るされた衣装の内の一着を取り出した。
全体的には黒く、背中には二本の裾が伸びていた。

まるで……………

「！燕尾服？タキシード…………？アンタニ男装ノ趣味ガアルナンテネ」

「はあ!? 違えし！ドレスは重えし、フリルが鬱陶しいし、
女物の服は正直面倒臭えんだよ！

リリーホワイトの同じ服装も、嫌で嫌で仕方無かったんだからな
」！

「ナラ、普通ニカジュアルナノデモ良カッタノニ」

「細けえこたあいいんだよ！じゃあ、コイツで決まりだな」

そう言いながらビリビリに破れた、囚人服を纏った身体を見下ろす。

「…………もういいや、金輪際着ねえし、こんなダサいの」

そして、ボロボロの襟首を両手で掴み、思いっきり引き裂いて
ダイナミック脱衣を始めた。

数分後。俺様、リリーブラックは新たな衣装を纏い、ドアを勢い良

く
蹴り開けた。

「じゃっじゃぁーん!!見てみるよう!!!」

だがクルムは、さっき私が使っていたパソコンの奥にある、一つの培養槽を見上げていた。

廊下に並んでいたのと同型で、中にも同じ様に一匹の妖精が緑の液体の中で

膝を抱えている。

「見てねーし……しよぼん……」

「……ソナ顔文字ミタイナ顔、流行ラナイシ、流行ラセナイワ」

だが、すぐに気を取り直してクルムの方に歩いて行った。

「……気になるか？」

横に来た俺に顔を向けたが、やはり何も言ってくれなかった。

「後輩よ。コイツが何か判るか？」

何も言わないクルムに代わり、身体を見下ろしながら質問をかけた。

「……全裸ノ妖精ガ、機械ノ中デ薬漬ケニナッテイル？」

「そーだ。しかもだ……」

私は後ろを向き、机に腰を添えた。其処から手を伸ばし、白手袋をした手でガラスの表面をノックする様に叩く。

「妖精の中でも取り分け強い種類を選んで来た。向日葵の花を持っている大きめの

妖精がいるだろ？アイツ等のうちの一匹だ」

クルムの方を見ると、相変わらず無言のままだった。

「……妖精を実験体にするのが気に喰わないか？」

何も答えなかったが俺には判る。明らかに、俺に嫌悪感を抱いている。

「悪いが、コイツ等嫌いだし、其に……」

「妖精って人外だろ？人外を人外にして何が悪い？」

「……………」

「其にコイツ等、自然の権化だろ？要は自然を破壊しなければいくらでも

湧くんだから、利用しない手は無えし」

無言だった。今のクルムからしたら今俺様の顔は、最高のゲス顔に見えるかもしれない。だが、構う必要も無え。

今度は其の反応を無視して、俺様は説明を再開した。

「いつもなら、此の段階はへそに繋いだ管を通して薬を投与して、生物兵器に仕立てるんだが……其処でだ」

人差し指でエンターキーを押す。するとパソコンの近くに設置していた

じょうご型の機械の蓋が開いた。

俺様の中で声が聞こえた。

「……………入レット？」

「物分かりが良いじゃねえか」

そう言いながらじょうごの中心に空いた穴を指差した。

「一部の薬の代わりに、お前等を投与する。するとだ、いつもの奴より強い俺様の傑作をコントロール出来るって事になる」

白手袋は付けたまま、左腕の袖をまくる。其処には後輩が俺の身体に侵入する際に付けた、切り傷が残っていた。

「戦いでピンチになったら体内から逃げだせば良いし。此の妖精には心音爆弾も

埋めているからな」

其の切り傷を下にして腕をじょうごの上に出した。

「さあ……………行って来い」

すると腕の傷口から、黒い液体状の後輩が出てきた。

そして其のまま数滴が滴り落ち、じょうごを伝って管の中に入っていった。

ガラスに目を移すと、へそに通じる一本の管に黒い後輩達が流れて

いくのが判った。

そして其が間もなく妖精に到達しようとした……

が、突然其処から、黒い液体が漏れ出した。

「!?」

そして瞬く間にガラスの中が真っ黒になり、妖精の姿が見えなくなった。

「何だ……まさか、接合部分の隙間から漏れたのか!？」

私は急いで、パソコンを操作して中の液体を抜こうとした。

「問題無イワ」

突然聞こえた後輩の声で、手が止まった。

「本当か!? 失敗しないだろうな!？」

「ちゃんと変異を起こしてるだろうな!?!？」

「只、少シ時間ガカカリソウ……」

すると、黒くなった液体の中を、何かが蠢いているのが判った。

「!?」

其の動きによって起こる液体の流動から判る。

中にいるのは少なくともさっきの妖精よりも遥かに大きい。そし

て

今までに作った生物兵器よりも大きい。

恐らく、培養槽のガラス部分の半分の大きさには占めている。今までのも

三分の一も無かったのに……

コイツは、期待出来るぞ……!!

すると、突然後輩の声の調子が変わった。

「妖夢達ガ、近付イテイルワ……!」

「!?何だと……!」

俺はすぐに視線を目の前のガラス容器から、天井に移した。

どつやら監視を続けていた後輩達が、アジトに近付いた事に気付いた様だ。

「直ぐ近くまで来ていたとはな……アイツ等……」

直ぐに出発の準備をしようとしたが、不意に今日の前で変異を遂げている

容器の中身をどつしようと考えた。

急いで行かなきゃいけないのに、時間がかかるとは、なんて間が悪いんだよ畜生……!

だが、其を見透かすように、後輩が体内から声をかけて来た。

「後カラ行クワ……」

思わず変色した顔の右半分^に手を伸ばすが、触りはしなかった。

「ダカラ此ノ培養槽ノ液体ト、ガラスヲ取り除ク操作方法ヲ教エテ」

「……また、そこらへんの物を弄るんじゃねえよな？」

「本体モパソコンハ持ツテルカラ、ソナハマハシナイワヨ」

本当かよ？そう思いながらも、俺はパソコンでの操作方法を教えた。

「判ってるだろうが、順番をしくじるなよ？薬の大洪水で機械がショートするからな。」

爆発して新作もアジトも、新作の中のお前等も駄目になっちまっ

「薬ト八違ツテ機械ニ八慣レテルカラ、大丈夫ツテ言ツテルデショ」

「本当かよ？」

同じ様な感じの弁解に、今度は口に出した。

「地下にある裏口は開けてある。机の下だ。さっき抜けた森の倒木の洞に繋がってるから其処から出る」

「何デ裏口ナノ？」

「表は閉めるからに決まってるんだろ」

其処で、

「クルム……早速仕事だぜ？行くぞ！」

と、クルム向かって言うと、部屋をもと来た廊下を走りだした。

だが……走りながら、考える。

後から増援とは……今考えると良い作戦だな……

戦っている途中に、巨大な新作が現れたらどうなるだろうな。

奴等、きつと喜んで泣いてくれるぜ。

其にクルムも居る。奴等相手にどれだけの実力を発揮してくれるか、楽しみだ。

そしていざとなれば……

今度の戦力は充分だ。負ける気はしねえ……！

そうこう考えてる間に廊下を走り終えていた。

見上げると、階段の一番上にあるアジトの入口からは赤い雲と月が浮かぶ夜空が見える。

「お前等は今夜、ベッドじゃなく、墓場に土に潜り込ませてやるよ……俺様にくれた屈辱……今からたっぷり返してやるからな！」

階段の一番下から其の空を睨み、階段の一段を踏みながら俺様は眩

いた。

Requests・斥候での証明

SHINYA

魔法の森

「そうか……九賀神矢というのか」

俺は隣に歩く、俺と同じような年齢の青年とお互いの自己紹介をしていた。

彼の名は龍神王牙で、人間と龍帝王のハーフだ。

龍帝王は絶対的な力と地位を持ち、其の地位は他の神々や龍神よりも高い。つまり、神奈子様や

諏訪子様よりも偉いという事だ。

そんな人が俺の隣に……思わず恐縮してしまう。

其の腰にはドラゴガンという二丁の銃はホルスターに収められている。更にホルスターは腰に

巻いている九つの宝玉が輝くベルトに収納されていた。

其の宝玉には一個ずつに龍王が封印されていて計九柱の龍王が封印されている事になる。

封印が解けると龍王達の力を借りる事が出来、今は三柱の龍神から力を借りられるとの事。

ドラゴガンで其の力を打ち出す事も出来るらしい。

龍の力か……羨ましいなと感じる。俺は鬼なんだが……

すると、王牙さんの足が止まった。俺も足を止める。

「……神矢」

「王牙さんが俺を呼ぶ。」

「?何ですか?」

俺が訊き返すと、突然王牙さんは後ろを振り向き、素早く抜いた一丁のドラゴガンを
遠く離れた一本の木の上に向け、一発銃弾を撃ち込んだ。

「!?!?……」

呆気にとられて見ていると、数秒後には撃ち込まれた葉がガサガサと鳴り、間髪入れずに何か
落ちる音がした。

「……付けられてたか……」

「あんなに遠くにいたのをどうやって見抜いたんです!?!」

「尾行が下手だからすぐに判ったさ!とにかく、行こうぜ!リリース
ラックかもしれない!!」

俺達は、何か落ちた方向に向かって走って行った。

だが、其処にたどり着いて驚いた。其の木の下で横たわっていたの
は……

「!?!れ……鈴仙さん……!?!」

永遠亭にいた、月の兎の一匹だ。

元の世界で怪我をし、永遠亭に運ばれる際に永琳さんと一緒に治療、看病と御世話になっていた。

「どうしてお前が此処に……!？」

王牙さんもどうやら彼方の世界で、鈴仙さんに出会った事がある様だ。

木の上から落ちて頭を打ったのか、頭を抑えながら悶えている。

さっき打ち抜かれたと思われる、右の二の腕の部分がブレザーの袖ごと溶け、黒い液体に変わって流れ出している。

「！傷の色が……」

そう言っていると鈴仙さんは素早く身体を起こし、痛みを払うかの様に頭を振った。

其に合わせて頭のウサ耳も揺れる。

開かれた其の両眼は赤色ではなく、冷たい水の様な蒼色だった。

「目が蒼い。お前、鈴仙ではないな……!？」

王牙さんがそう言つと、

「正確二狙イ落シテ来ルトハ、驚イタワネ……貴方……」

王牙さんに向けられた其の声は複数の少女の声が混ざった、奇怪過ぎる声だった。

聞き覚えがある……確か、雪の道や黄金の空間や、スキマの中……
そして俺のいた世界の竹林で聞いた咲夜さんの声と似ていた。

「名前八？」

「龍神 王牙」

そうか。前に戦ったあの化け物達、そして此の鈴仙さんも紫の言っていた、アリスさんの病気の副産物か。

「憶エテオクワ……ソシテ……」

其の蒼い眼が俺に向いた。

「久シ振りネ……九賀神矢君」

確定だった。相手も俺の事を憶えていたらしい。

足元には右腕から滴り、足元に溜まっていた黒い液体が溜まっている。

すると突然、其等が真上に伸びて再び腕部分に集合し固まり始めた。

「！まさか、「イツは……!!」

王牙さんも其の正体に気が付いたみたいだった。

其等はある武器を宿した腕を生成し、明らかに元とは異なる形に変化した。

「あの腕は……ガトリング!?」

「再生って言っても、すっかり元通りではなさそうだな……寧ろ攻撃的

に変化してる…！」

左腕よりも大きい右腕が俺達に向けられ、先端の発射口が回転し始めた。

「…！近くの木陰に隠れる!!」

其の王牙さんの声を合図に、踵を返して走り出した。

S H I N Y A

V S 悪意の蒼眼 鈴仙・優曇華院・イナバ

く魔法の森

森林にしては草むらが多い道を守る俺達の後ろから、紫色の銃弾型の弾幕が通り過ぎていく。

王牙さんはあの瞬間に攻撃する隙が無いと判断したみたいだ。俺も其が賢明だと思った。

そしてお互いに見つけた、別々の木の後ろに飛び込んだ。其の木に容赦なく弾幕が当たる音が響く。

貫通した弾が当たらない様に、出来るだけ身体を小さくして身を守った。

(……おい)

声が聞こえた。

「……どうした？こんな時に……」

俺は、もう一人の俺……鬼の九賀神矢に小声で返事をした。

(リリーブラックをとっ捕まえる前のトレーニングに、アイツを倒してやれ。王牙と言っ奴も

きつと驚くぜ?)

其を聞いて並んで立つ隣の木を辛うじて見る。

木陰で王牙さんがドラゴガン一丁を手に、敵の様子を見ようとして銃弾に阻まれているのが

見えた。

(先を越されたんだ。止めは貰うのは当然だろうが)

「先に越されたって……木の上にしたのを狙撃した事？」

(鈍いよな……あれ、俺だって気が付いたぞ?)

じゃあ何で教えてくれなかったんだよ……そう思っていると、銃声が止んだ。

夜の森が再び静かになる。

「でも、どうだろうな……俺は逆に王牙さんの実力も見たいと思うんだけど……」

木の陰からこっそり様子を見る。

「隠レテナイデ、出テ来ナサイ。其処ニイルハ判ツテルノヨ？」

発射を止めた銃口から出る紫色の煙を銃身で振り払いながら、俺達の隠れている木に向かって歩いて来ている。

撃ち落とす、欠損して弱体化したどころか、まったく別の形に再生して逆に強化される。

気を付けて見ると恐ろしい副産物だな、と今更思う。

紫さんの言っていた通り、此は本当に弾幕勝負どころではないな

……

だけど……

「俺にもあんな再生能力があればな……」

左腕が入る筈の袖がヒラヒラはためくの下を見下ろしながら呟いた。

(…ふーん……)

もう一人の声を聴きながら、俺はあるスペルを唱えた。

其の時だった。

「フュージョン、『氷龍王』!!」

王牙さんの声が聞こえ、其の方向を見た。

其処には瞳も、髪も透き通るような水色となった王牙さんがいた。周りには白い霧のようなものが立ち込めている。

思わず身震いをしたことで判った。そうか、此は冷氣だ。冷氣が目に見える程になって王牙さんを取り巻いているのか。

！氷龍!?……じゃあ、あれが……!?

王牙さんが木陰から飛び出しながら、もう一丁のドラゴガンも抜き、偽鈴仙さんに構えた。

「龍砲『ドラゴニックグレイシャー』!!」

双方の銃口から龍の形をしたオーラが打ち出され、敵に向かって飛んで行った。

だが相手もすかさず発射した黒と紫の弾幕が擦れて軌道をずらし、身体には当たらずに其の足元で炸裂した。

「!?……」

炸裂したオーラにより相手の腰から下が地面ごと凍り付き、身動きが取れなくなっていた。

「デジャヴだな。だが鈴仙を装う以上、今度は容赦はしない!」

「〜ヴヴ……ギアアア……!!!」

本物の鈴仙さんではあり得ない様な唸り声を上げながら変形して
いない片手だけで氷から

下半身を引き抜こうと気張っている。

「どつだ。氷漬けにされてしまったら最後、俺の力なしでは拘束からは解けないぞ」

「……其ハ……ドウカシラ……?」

「!？」

すると再び氷に手をつけ、薄紫色の長髪を揺らしながら更に力を込め始めた。

「何だ……力づくで脱出する気が……!？」

だが、其の予想は大違いだった。

ブチィィィ……………!!!!!!

なんと自らの上半身を、氷漬けの下半身から完全に引き千切った。

「!？な……………!??」

上半身は其のまま氷の上から落ちたが、直ぐに新たな下半身を再生させ、立ち上がった。

其は黒い毛が密生していて本来の兎に近い様な形だけど、足の長さはずっと変わらない。

そして氷の中に残った古い下半身は黒く変色して形を崩し、自力で穴から外に抜け出した。

「まさか、そんな無茶な方法で氷から抜け出すなんて……………!」

王牙さんも啞然としている。

脱出した元下半身の液体が両脚に纏わり付いて一体化すると、細い脚は一気に太くなり、黒い毛が逆立って棘が発生した。

「簡単二拘束サレル程、『私』ハ甘クハ無イワヨ……」

出来たての脚を確かめているのか、鋭い爪の生えた脚先で地面を突きながら相手は言った。

「今度は脚が……」

「蹴られたら、骨が折れる程度では済みそうにないな、あれは……」

でも、俺は王牙さんの方を見て言った。

「ですが……蹴られる心配は多分無いです」

其の言葉を聞いた王牙さん、そして鈴仙さん似の相手が怪訝な顔をした。

俺は敵の方に顔を向け、少し笑って見せた。

「!!」

其の俺の表情で全てを理解したらしく、慌てて俺達に右腕の生体ガトリングを向けた。

銃口が再び回転を始めるが、

「遅いぞー！衛星『ストレンジサテライト』!!!」

間もなく空に放っていたレーザーが地上に降り注ぎ、偽鈴仙さんに

向かって殺到した。

発生する衝撃と砂塵から俺達は両腕で身を守った。

そして砂埃で、何も見えなくなった。

衝撃が収まり、顔の前から両腕を離れた。

周りの叢は吹き飛び、木々には穴が開き、目の前の窪みからは土煙が立っている。

「……………」

すると其の煙の中から立ち上がった姿があった。

(……………やったじゃねえか。 見ろよ、穴ぼこまみれだぜ)

身体中が黒く変色し、身体中に開いた穴から黒い液体を吹き出している。

其の黒くなった部分から無数の眼球が見開き、其の青い瞳があちこちを見渡している。

だが半分吹き飛んだ顔の瞳は、俺達を睨んでいる。

其処から力なく膝を付き、バツタリとうつ伏せに倒れた。

「……………」

俺達が見下ろしている前で、其の異形が泡となり、黒い霧となって消えていった。

「…………やるじゃないか」

其を見届けた後、王牙さんがドラゴガンホルスターに戻しながら俺に言った。

髪も瞳の色も元に戻っている。

「だが…何時撃ってた？」

「さっき木に隠れていた時です」

質問に対する俺の答えを聞くと、眉をひそめながら目を泳がせ、

「…あの時か……………」

さっきの流れを思い出して納得したらしく、表情を緩めて前方を見た。

今度は俺が訊く。

「王牙さん、さっきのが……………」

「…！龍王の力を借りたのさ」

ホルスターに収めたばかりのドラゴガンとベルトを見下ろして応

えた。

黒いボディーに赤いラインの入った其の銃身、黒革のベルトに収まる九色の宝玉が、月の光を反射して光っている。

「氷の力……『氷龍王』だ。他にも、『炎龍王』、『水龍王』の力も借りられる」

「凄いですね……あれ程の力を他にも……」

でも、其の表情はすぐに厳しくなり、

「……だからと言って油断はダメだな。まさか変身まで出来るとは……其にあんな奴等が護衛に

就いてるなら、此からが大変そうだ」

「リリースブラックより厄介ですね……気を付けましょう……」

「嗚呼、チームワークを大切にしねえと……だが、やりがいのある戦いも出来そうだな」

俺達は再び黒い奴を捜しに、黒い森を歩き始めた。

Requests・Night Encounter
r

SHINYA (ANOTHER)
魔法の森

俺は神矢の中から二人の会話を暢気に聞いていた。

(……そうか、お前の中にもう一つ人格がいるのか)

(人格……と言いますか……まあ、色々複雑なんですよ……対応が変わると思いますので、其の時は……)

(判ってるさ。間違いない様にする)

……しれっと俺の事も言ってるし……まあ、混乱しねえ為にも言うてくれると嬉しいけどよ。

其の時、突然王牙が何者かにぶつかった。

(!?)

王牙は何か持ちこたえたが、相手は其のまま月の光の当たらない地面に倒れた。

(!?大丈夫か……)

王牙がソイツに近寄って手を差し出した。倒れた人物の顔あたりが此方を見るかの様に動いた。

(ホアアアアアアアア………!!!!)

突然訳の判らない声を上げると、慌てて木の陰に隠れた。

其の声は少女………でも、俺達の前で月の光に当たる木に隠れているのは俺達より確実に身長が高いから女性………か？まあ、そんな風貌だ。

第一印象は、男装した女不良だ。タキシードを見事に着崩している。

タキシードなのは燕尾が見えていた事で一発で判った。

金髪もぼさぼさで艶が無い。目は真っ赤に充血し、目の下のクマも酷く、

げっそりと頬肉も落ちている。相当過酷な牢獄生活を送っていたに違いない。

(イケメンと衝突したあ………マジ運命だろ此………!?)

口も驚くほどに悪い。

顔の残り半分だけは木に隠してて見えなかったが………何か秘密があるのか………?

「……」

其の出ている半分の顔は写真で見覚えがあった。

顔を半分木で隠しているが、コイツは………!!

(………お前………リリーブラックか?)

もう一人の俺が訊いた。流石に考えてる事は同じか。

(！何……！?)

今度は王牙が気付かなかった様だ。

やったじゃねえか神矢。此で王牙と並んだぜ？

其の質問をされた瞬間、相手は明らかに態度が変わった。

(!?何だ……てめえ等、俺様の名前を気安く呼ぶたあ……)

……ビンゴ。今回の戦闘相手と見事にぶち当たった。

しかも自分からバラした。コイツは想像以上の馬鹿と見た。

間抜けな極悪脱獄囚は木の蔭から全身を姿を現した。

右半分の肌の色は暗い紫色に汚らしく変色していた。何より其の眼窩に、此でもかと言わんばかりに押し込まれた三つの眼球。

其のお陰で顔の右半分をほとんど目が占領しているという、実におぞまじさが醸し出されている。おまけに全部が違う方向をギョロギョロ見ているからより一層グロさが増している。

他人から隠したがるのも判る気がした。

(其方から出てくるなんて、有り難い限りだな)

王牙がドラゴガンを両方取り出して、其の内の一丁をリリースラックに向けた。

(！はあ!?此方あ全然有り難くねえし！ラブコメでも無えぞ、

こんなキュンとする様な出会い方で、キュンともしねえクソガキ共と鉢合わせするなんて……）」

両手もあげずに言い放った其の言葉に、少しカチンと来た。

「神矢……代われ」

俺は今出ているもう一人の神矢に言った。

（！……え？）

「良いから代われ」

（判ったけど、何する気だ？）

「良いから、黙って見てろ……」

「……………」

神矢と入れ替わった俺はリリースブラックに近付いてきた。

「！ふふーん、何だ坊や、早速やり合っか？」

相手は完全に馬鹿にしている表情で言った。

俺は目の前に立った……其の途端に、

「貫符『トマジカルスピア 手中』!!!」

紫が言った通りだな。やっぱり、気色悪いのを体内に入れてしまってたか……

「……弱いな……」

王牙が呟く。

「さしずめ妖精と病気の治癒力、奇跡のコラボレーションだけが取り柄か……」

俺も便乗する。すると、

「!?妖精だと……服汚したうえに俺様を妖精呼ばわりしやがって……!!」

俺の妖精と言つ言葉に敏感に反応し、また喚き始めた。

俺以上に喧嘩っ早いな……写真のしかめた顔を思い出す。成長していてもしかめた顔は変わらないだろうな。

不良だな。本当に、ドキュンだな。

「貴様等は、俺様を怒らせた……」

ゆらりと立ち上がり、俺達二人を睨んだ。三つの蒼い瞳も全て此方に向いた。

本気出してきたやつだな……と思いきや、

「おい、クルム!!!」

すると、其の声に反応して木の蔭から突然黒い影が飛び出して来た。

「！新手か……!？」

俺達が其の新手に気を取られた隙に、

「悪ガキ共如きに、わざわざ手を汚すまでもねえ!!」

リリーブラックの足下の土から、大量の黒い液体が湧き出した。

「!？」

其はある形をとり、やがてリリーブラックの傍で完全な形で土を蹂躪した。

「あれは……バイク!？」

かなり大型のバイクだ。だが其のボディは黒と紫色に統一されて禍々しく、所々蠢いていた。

前後の車輪には其々蒼い瞳の巨大な眼球があって此方を見ている。

「！しまったー!」

リリーブラックは素早く其の座席にまたがり、爪がある節くれ立った人の指の様な紫色のハンドルを掴み、捻った。

途端にマフラーの震動と共に、生々しい排気口から紫色の煙が勢い良く吹きだした。

「待て!!」

リリースブラックを乗せた生体バイクは急速に旋回すると森の木々の間を走り抜けていった。

「あゝばよっつ、精々頑張んなあ!!!」

バイクのエンジンに揺られながら、正常な右目であかんべえしながら共にそう言いやがった。

王牙がドラゴガンで足止めしようとしてタイヤの目玉を狙い撃つたが、届かなかった。

舌打ちをして発砲を止めた王牙は俺が見ている目の前の人物に視線を向けた。

「取り敢えずは、先に倒さないといけない様だな……」

其を聞いた俺は改めて新たな敵を観察した。

身長は俺達とほぼ同じで、全身を黒色のコート、そして黒いフードが別々になっている。

其の顔はコートと夜の暗闇のせいで全然見えなかった。

堂々としていた。其の場で根を伸ばして立っているかの様にも見えなかった。

其処から俺は判った。強いな、コイツは……

其の時、コートの奥から眼光が見えた。僅かに瞳も見えた。

鋭い……が、其の時俺は妙な感覚を覚えた。

「……神矢……」

俺は俺の中で待機している、もう一人の俺に小声で聞いた。

(?何……?)

もう一人の俺が返事をする。

「俺……コイツを知ってる気がする」

(!どじいつ事……?)

「フードの奥の視線に覚えがある……誰だ？」

其の時、敵が其のフードをさっと外した。

「!!」

(!!お……お前は……!!)

其の顔を見たもう一人の俺も気付いた様だ。

「まさか……お前だったとはな……」

「?誰だ、神矢……いや、もう一人の神矢、知っているのか……?」

俺と神矢の区別をすっかりつけ、王牙が訊いてきた。

答える代わりに、俺はソイツの名前を囁いた。

「神崎……駆真……！」

「！何……！？」

過去にこっちで共に戦った、異世界の奴だった。

Requests・影光なる内輪もめ〜Twin
Side Battle〜

OUGA

VS 駆け抜ける神人類 神崎駆真（クルム）

〜魔法の森

「アイツが……神崎駆真……!？」

黒いコートに黒いフードのクルムと呼ばれ、突如現れたリリースラックの腹心の様に思われた人物。まさかソイツが奴の捕獲する方だった、もう一人の異世界の奴だったとは……

フードを退けて見えた素顔だが、其の顔立ちから俺達とほぼ同年代と思われる。

だが其の皮膚は人間のものとは思えない程酷く紫色に変色していて、更に額には同じ大きさの一つの蒼い眼が縦に見開かれていた。

あれが例の病気に浸食された状態か……擬態した副産物とはまた違った

おぞましさを感じた。

「覚醒『朱雀』!!!」

いきなり駆真の背中に薄い紫色の翼が出現し、其の左手にはレイピア
アらしき黒い剣を持った。

あれが駆真の能力か……とっていると、いつの間にか目の前にまで
来ていた。

「!!??」

突き出したレイピアが顔に刺さる瞬間、辛うじてドラゴガン二丁の銃身を重ねて防いだ。其の拍子に激しい金属音が響く。

(……強い……!!)

そう感じながら、クロスさせた両手を前に出し、相手を突き放しながした。

駆真は何とか踏みとどまり、自分から翼を利用して更に大きく後退した。

俺は相手に銃口を向ける。其の時駆真が喋った。

「……初メテダガ……龍神王牙ダナ？」

俺は面喰い、思わず銃を下ろしそつになった。

「どうして俺を？……お前、俺と初対面だろ……!!？」

だけどすぐに紫が言っていた言葉を思い出す。

『…病気を患う人形遣い、アリス・マーガトロイドから排出される其の精神は一つ……すべて彼女が影達を統制している』

……そうか、もしかしてさっき鈴仙に化けた副産物に教えた名前を、駆真の中の別の副産物が其を通じて教えたのか。

とにかく今は駆真の武装解除、其が最優先だ。リミッタを外して押し切るといふ手もあるが……別の目標がある。

「貫符『トラジカルスピア 手中』!!」

神矢が飛びかかり、駆真に槍の先端ではなく、根元部分が当たる様に振り下ろした。駆真が

レイピアで其を受け止めた。

すると、神矢がある事に気が付いた。

「!!お前……其の右手は……!」

其の言葉につられて俺も相手の右手を見た。

黒いコートの右袖から出ている其の手も紫色だったが普通の手よりも一回り大きく、人間には

無い、先の尖った鱗の様なものに覆われていた。まるで手甲をはめているような感じだ。

「俺ハ才前ト同ジクヲ失ツタ。ダガナ……」

駆真の言葉に嫌な予感がした俺は、其の左手に向かって一発弾を撃った。

だが弾が到達する瞬間、素早く手を振って裏拳で弾を弾いた。

「!？」

弾かれた弾は近くの木のど真ん中を撃ち抜き、衝撃で軋みながら倒れた。

「嘘だろ……!銃弾を手で弾くか……!？」

「其ノ程度ノ銃弾……」

そう言いながら神矢との武器の押し合いに勝ち、突き放した。

「！お！？」

よるめいた所を、駆真は其の腹に垂直に蹴りを入れた。

神矢は其のまま吹き飛びながら一本の木を吹き飛ばし、其の根の向こうに消えていった。

「！神矢！！」

だがすぐに悪態をつきながら素早く立ち上がった。

「~~~~畜生……！やりやがったな……！？」

神矢は、再び槍を手に駆真に飛びかかった。

其の時、駆真が右の袖をめくった。

何のつもりだ……？

そして、其処からとんでもない事が起こった。

肩から右手の先までが、突然巨大化した。

「な……！??」

其の掌が駆真の上半身を囲い込む様に覆った。指と指の間にはまるで糸を引いた様な水かきが張ってある。

舌打ちしながら、今度は何度も弾を発射した。

だがいくら撃ち込んでも、喰い込みもせずに全て鱗や水かきに弾いてしまう。神矢が飛びかかりながら放った一突きもまったく効かず、逆に弾かれた衝撃で地面に転がった。

人の手があり得ない形状に……此も紫の言ったとおりになってしまった。

さっきの鈴仙のガトリングと言い、変形に予想が付かない。何だよ、此の病気は……

「其ノ程度力……？アノ妖精ハ倒セナイゼ？」

駆真が手の向こうから言った。俺は銃口を向けながら眉をひそめた。

さっきから駆真が喋っているが……喋っているのは間違いなく駆真じゃないか……？鈴仙の時とは

言葉使いが明らかに違う。やられたら最後、洗脳されてしまうと紫からは聞いていた。

だとすれば、喋り方も女性形になる筈……

其処まで考えた俺はハツとした。もしかして、まだ意識が……!?

すると神矢が後ろに下がり、俺の隣で着地した。

「クソ……只でさえ駆真だからって迂闊に攻撃出来ねえのに……」

俺は二丁ともホルスターに戻し、腕の超次元転送装置を使い其処から今度はワクチンの入った注射器を取り出した。

此を使えば……！俺は神矢に指示した。

「神矢！あの盾みたいな手を押さえててくれ！」

何故そのような事を言われたのかを理解したかは判らなかったが、頷いた。

「割符『アースクラック』!!」

神矢は足を振り上げ、思いっきり地面を踏みつけた。

其の瞬間、神矢の足下から駆真の足下まで一気に大きな亀裂が走った。

咄嗟に避けようとした左足が其に嵌まり、駆真は身動きが取れなくなった。

神矢は素早く近寄り、盾の様な右腕の後ろに回り込んだ。

「貫符『トラジカルスピア 手中』!!」

其処でまた槍を左手に召喚し、其を目の前の腕に向かって突き立てた。

槍は手首の柔らかい内側の貫きながら地面に深く刺さる。

「まだまだ!!貫符『トラジカルスピア』!!」

今度は胸辺りからも槍の先端を召喚し、目の前にあった右肘を鱗の無い側面から射止めた。

二点から突き刺されていても駆真はまったく痛みを感じていない様だったが流石に引き抜くのは

至難の業らしく、必死でもう片方の腕を伸ばしながらもがいていた。

「ほら！右手は封じたから……何かやるんだろ!?早くやれ!!」

此で脅威は封じられた。正面からでもいける……!!俺は走りだした。

だが、

「覚醒『玄武』!!!」

駆真の身体の後ろから、黒い鱗を持った大蛇が出現した。

「!マズい……神矢!!」

だが蛇は神矢ではなく、俺に向かって大口を開けて紫の牙をちらつかせながら、此方に向かって

高速で迫って来た。

此方が危険と判断したか……だが、簡単に喰われてたまるかよ……!
俺は速度を緩めなかった。

蛇の頭と俺、其の距離がどんどん縮まっていく。蛇の瞳が鮮明な赤色を帯びて光るのが判る。

ぎりぎりまで引き付ける。少しでも遅れたら失敗だ……蛇が更に開けた口を大きくした……

そして蛇が俺に向かって牙を突き立てようとした瞬間、其をかわして上に跳んだ。

其のまま太い綱の様な身体に飛び乗って走り、其処から駆真に向かって更にジャンプした。

「!？」

駆真が俺を見上げた。

ジャンプから着地までそう時間も無い。蛇が戻ってくる時間も僅かだ。

此処しかない。俺は空中で持っていた注射器を振りかざした。

「此で……どっだ!!」

俺は両足が地面に付くのと同時に手を動かし、駆真の首に注射器の鋭い針を深々と突き立てた。

「!!……………」

直ぐに中の乳白色の液体が、駆真の身体に注入された。すると刺された箇所から、たちまち皮膚の紫色がブチ模様の様になって消え、健全な肌色に戻っていった。

同時に右手も黒い塵となって消えていった。

駆真は其の場で片膝をついた。

「駆真さん!!」

入れ替わった神矢が駆真の左から肩を貸した。

「凄い効果だな……」

俺は空になった注射器を見て呟いた。周りを見て大蛇もいつの間にかいなくなっている事に気付く。

「……大丈夫ですか!？」

神矢が声をかける中、俺は駆真の目の前に立った。

「……神矢……」

神矢の声に応え、ようやく顔を上げた。額の眼は無くなっていた。

「駆真……お前が、神崎駆真だな？」

俺の質問に彼は頷いた。

「……はい」

「駆真さん、右腕を……」

偽の、そしておぞましい右腕を失ったコートの右袖は、ヒラヒラと揺れていた。

「……お前も……左腕を失ってるぞ……」

駆真も言葉を返す。

自分が捕える方に味方をしてた……何か事情があるのかもしれない。

その見返りに失った右手を補って貰ったのか？

俺はもう一度訊いた。

「いったい何があった……教えてくれないか？」

「……判りました……」

そして大丈夫だ、と神矢に言って自力で立ち上がった。

其の時だった。

「！何だ……？」

俺達の周りの木の葉、草も一斉にざわめき始めた。さっきまで風が吹いていなかったのに……おかしい。其の音は徐々に大きくなっていった。

そして月が雲に隠れたのか、俺達に影が差した。

「！来ます！気を付けて下さい！！」

そう駆真が言った途端、突然強風に煽られた。

俺達は耐え切れずにそれぞれ別の方向に大きく吹き飛ばされ、地面を転がった。

「!?」な、何だ……!？」

訳も判らずに急いで立ち上がり、視線を上にした。

森の木々の間から何者かがゆっくり降下してきた。月が隠れているせいで大まかな姿しか

確認出来ない。

短くもしっかりとした両脚。羽ばたく度に地面に強い風圧を発生させている、巨大な両翼。

そして棘の付いた太くたくましい尻尾。

其の影を見た俺は思った。

(まさか…龍か……!?)

そしてソイツは先程まで俺達がいた処にゆっくりと着地した。俺達の処に二人が戻って来た。

ちょうど其の時、雲の合間から紅い月が顔を出し、其の姿を照らした。

相手の全貌が見えた時、俺達は……

「……何だコイツは??」

ほぼ同時に呟いた。

其処にいたのは紫色の巨大なエリマキトカゲだった。

首には其に相応しい渦の様な幾何学模様が刻まれたエリマキが畳まれている。背中には襟巻と同じ独特な形をした、だが蝶の様なヒラヒラとした羽根がある。

顔にある左右の眼は、カメレオンみたいに違う方向を見ている。

前足をだらんと下げ、二本脚だけで直立した其の姿は何ともひょうきんだったが、其が俺達より

少し大きいとなると、不思議とそうも言えなくなる。

「……コイツも。病気の産物か……!？」

神矢の声に反応したのか、顔の二つの眼が此方を向いた。

其の時駆真が言った。

「コイツが……多分、妖精にマリスを投与して作り上げた、リリースラックの生物兵器です!」

聞き慣れない言葉を聞いた俺は、訊いた。

「！マリス……其が病気の産物の名前か!？」

「そうです！本体のアリスと悪意(Malice)でマリスだそうです
」！

「何だって妖精と病気でエリマキトカゲになるんだ……!？」

俺は神矢と駆真を交互に見た。

紫が言っていた事…更に紫でさえ言っていなかった事を口にしていくところから、何度も此の幻想郷に来ている様だ。

妖精……確かに言われて見ると、伸長の割にはほっそりとした体型や蝶のような羽根と、妖精の面影が残っているように見える。おまけによく見ると、頭の皮膚の

たるみが、まるで女の子が髪を結んでいるかのようにまとまっていた。

紫が言っていた通り、何処までもろくでもないな、あの妖精……実際に、会って見てかなりのものだなとは思ってたが……

「ギョ」HHHHH……!!!

するとソイツが姿勢を低くしながら割れ鐘みたいな声で威嚇を始めた。羽根を広げ、エリマキも

一斉に逆立てる。其処には縦横に計四つの蒼い瞳の目玉が開いていた。

「話は、コイツを片付けた後になりそうだな……!？」

俺の言葉を合図に、立ち直った駆真も含めた俺達は臨戦態勢に入っ

た。

??? (ALICE ORIGINAL)
地霊殿 アリスの部屋

「!!……………」

私ハ不意ニベッドノ上デ目ヲ醒マシタ。

「…………ドウヤラ、失敗シタ様ネ」

布団ヲ退ケ、上半身ヲ起コス。

「デモ、良イワ。此ノ幻想郷ガ終ワレバ……………」

「コキッ……………!!!!

「!?

再び腹痛ニ襲ワレ、痛ミニ耐エル為ニ身体ヲ丸メル。

「!?~~~~アア……………!!!

下腹部アタリヲ押サエ、外ニ漏レナイ様ニ声ヲ押シ殺シテ呻イタ。

ア……………余リニ……………成長ガ……………速イイ……………!!

「~~~~マダヨ……………イ、良イ子ダカラ……………大人シク!ヴウ……………!!

小声デソウ囁クト、ヤガテ収マツタ。上半身ヲ再びベッドニ倒シ、荒クナツタ息ヲ整工始メル。

ヤガテ呼吸ガ落ちて着イテ来タ。

「……………フウ……………イズレ、全テノ次元ノ幻想郷ニ『私』ヲ送ルシ……………問題無イカ」

モウ一度上半身ヲ起コシ、身体ヲベッドカラズラシテ床ニ足ヲ降口ス。

其ノ足先ガ、履キ慣レタブーツニ触レル。

「其二今、興味有ルノハ……………」

私ハブーツノ紐ヲ確認シナガラ、ドアノ方ニ目ヲ向ケタ。

「……………リリースブラック、貴方ノ方ダケドネ……………クク……………」

私ハドアヲ開ケ、其ノ身体ヲ彷徨ウ屍ノ様ニ歩『カセテ』行ツタ。

Requests・ラプトル・フェアリー

SHINYA (ANOTHER)

VS LB WFF 00/Ma

魔法の森

「~~~~~!!」

(?どじした?黙っているけど何があった?)

まさかの乱入に少しは驚いたけど、実は内心吹き出しそうになっていた。

リリースブラックの妖精から作っていたのがまさか、こんなヘンテコな襟付きのトカゲだったとは。

擦れた声で必死に威嚇していたエリマキトカゲみたいなのが、羽根や襟巻を畳んで威嚇を止めた。

そして見え見えの突かれたフリを止めるといきなり其のまま四つん這いになって走り出した。

此方に迫ってくる其の走り方が左右に若干フラフラしていて危なっかしい雰囲気がある。

妖精を変貌させた身体にまだ慣れてないのか、其とも元からの走り方なのか?.....

「フージョン『炎龍王』!!」

すると王牙の髪と瞳の色が燃える様な赤色に変化し、身体から炎がオーラの様に溢れだした。

あれが二番目の龍の力が...

「灼熱『サンシャインブラスト』!!」

「烈火『フレイミングフォース』!!」

俺と王牙は頭上に火球を出現させ、其を投げつけた。

だがトカゲは、流石に其等は左右に素早く動いて回避した。二つとも着弾した途端

大爆発を起こし、勢い良く火柱が上がった。

するとトカゲは走りながら襟巻を開き、四つの蒼眼から紫色の音波の様な怪光線を放ってきた。

「俺が迎え撃つ!!」

其処で、駆真が前に進み出た。

「覚醒『麒麟』!!!」

すると駆真の両足が光り出し、其の額に俺達が地下で出会った、豪放な鬼、星熊勇儀の様な

立派な一本角が出現した。

「行くぞ!!」

其のまま凄いスピードで怪光線をかわしながらトカゲの方に向かって行った。病み上がりだと

言う事を全く感じさせない程の俊敏さだ。

俺達も駆真によけられ、此方まで来た光線を回避した。

互いの距離が縮まっていく。さっきの王牙と駆真の蛇と同じ感じ

だな…ギリギリまで
詰めるか……？

だがトカゲは駆真との距離が大分縮まった処で、突然急ブレーキをかけた。

「!?」

其の場で身を翻し、棘の付いた尻尾の先端を勢い良く駆真に突き出してきた。

駆真は、速度を落とさずに其処から前に宙返りをして紙一重で攻撃をかわす。

「…速い………」

王牙が驚きの声を上げた。

其のまま敵の左側に着地した駆真は、尻尾の付け根を下から膝で蹴りあげた。

「…ギェヒ」………」

其の衝撃でトカゲの身体も地面から浮き上がる。

あの巨体を浮かせるか………凄い脚力だな………そう思い、今がチャンスと見た俺も、トカゲの方に走りだした。

「王牙、援護射撃を頼む!!」

「…よし………」

「よし、此で飛べなくなったぞ!!」

トカゲは地面に亀裂とへこみを残しながら反動でバウンドし、錐揉み状態のまま宙高く

回転しながら近くの木に腹から激突した。

ヤモリみたいに幹にへばりつきはせず、其のまま根元までズリ落ちた。

「……妖精を素体したのが間違いじゃねえか?……此じゃあ、氷の妖精でも勝てるぞ……」

そう呟いた俺は、其の時良い事を思い付いた。

「おい!王牙!!」

「!何だ!」

矢継ぎ早に伸びたトカゲの背中に追い撃ちを浴びせていた王牙が俺の呼びかけに応える。

「もう一回凍らせる!今度は俺も手伝っぜ!!」

「!そうか……!爬虫類は寒さに弱いからな!」

王牙が発射を止めると、トカゲが手を地面に付けながらゆっくりと立ち上がった。

全開になった襟巻は怒りで小刻みに震え、木にぶつかった際に潰れずに残った襟の二つの

目玉が鋭く睨んでいる。

「今度は逃げられない様に全身を凍らせるぞ!!」

「俺が凍らせやすい様に濡らします!! 覚醒『玄武』!!」

すると今度は駆真の目と髪の色が緑色になり、純白の蛇が其の身体に巻き付いた。

左手を下から上にあげると、トカゲの足下から地割れと共に勢い良く水が噴き出た。

「!?ギャゴポポ……!?!?」

不意を突かれた敵は、ずぶ濡れになりながら足下からの洪水を振り払い、後退した。

噴水はすぐに止まり、水は勢いを弱めながら亀裂の中へ再び入って行った。

「フュージョン『氷龍王』!!」

王牙も兎もどきと戦った時と同じ様に髪と瞳が水色に変化し、周囲の空気が白くなり始めた。

「氷河期『グレイシャルピラー』!!」

返信の間に俺は、俺達と敵の間に巨大な氷の柱を出現した。其が発する冷気に伴い、周囲が一気に冷え始める。其処でトカゲの体を濡らしていた水分が音を立てて凍り始めた。

危機を察したらしく、トカゲは木の幹に昇って距離を取ろうとしたが徐々に氷は大きくなり、身体を支え切れずに体温低下も相まって動きが一気に鈍くなっていった。

「逃がすか!!」

王牙がそう叫ぶと木にすがり付いているようになっていたトカゲの周りに霧が出現した。

其は周りを月の光に反射して紅くキラキラと輝いていた。

「氷霧『アブソリュートフリーズ』!!」

そう宣言し、指を鳴らした。

其の瞬間には霧に包まれていたトカゲは木ごと完全に凍結した。

氷の中でトカゲは

まるで助けを求めるかの様に、一緒に凍った木の梢に向かって手を伸ばしていた。

「……完全に終わったな」

王牙が氷を見ながら俺の方に近付いて言った。二人の髪の色や瞳はすっかり戻っていた。

「何だ、駆真より弱いじゃねえか。拍子抜けだぜ」

肩足の爪先で地面を突きながら言う。

其の時、駆真が何かを思い出したかの様に俺に向かって言った。

「駄目だ！まだ、最後の……！」

「！何？…最後？」

すると今度は王牙の方に顔を向けて叫んだ。

「急いで氷から離れて下さい！！」

「!?何だか判らんが、まだ何かあるんだな……!?」

訳が判らず、俺達は氷から離れようと走り始めた。

すると、後ろから紫色の光が迸った。

「!?」

俺は振り返って見ようとしたが、

「来るぞ!!跳べえええ!!!」

駆真を訊き、三人ではば同時に地面にダイブする様に跳んだ。

次の瞬間、背後から轟音と共に衝撃波が発生した。其を諸に背中に浴び、俺達は更に前に

吹き飛んでうつ伏せのまま再び地面に倒れて転がった。

だが、其はすぐに収まり、森は静かになった。

「……何だ……何が起こった……!？」

王牙が立ち上がって言った。俺は仰向けになり視線を後ろに向ける。

さっきと同じ様に巨大な氷の塊があるが其の中にトカゲの姿が無い。良く目を凝らしても

確認が出来ない。代わりに氷の中には紫っぽい色の液体が満たされていた。

「……何処に消えた？」

「リリーブラックは……素体となった妖精の体内に心音爆弾を仕掛けたんです」

そう言った駆真は俺の前まで吹き飛んでいて、今度は王牙に助けら

れながら立ち上がった。

「！心音爆弾……心臓止まったら爆発するアレか……!?」

「死んだ途端に道連れにする為か…普通の氷だと俺達も危なかったな」

俺を助けながら立たせ、中身が消滅して普通の色に戻る氷に顔をしかめながら王牙は言った。

一緒に凍らされていた木も氷の中で跡形もなく吹き飛んでいた。

「逃げ切る為なら、手段を選ばないってか…笑えねえ」

俺は鼻で笑いながら言った。

其処で、俺はもう一つの事に気が付いた。

(……………)

「……………どうした？」

俺は小声でもう一人の俺に訊く。

(……………いや、何でもない。外道だなんて、思ってたただだよ)

嘘だな、俺はすぐに見抜いた。そして今考えていた事も見抜いたが、

「……………ふーん」

だが興味も無さそうに、さっきと同じ反応で返事をする。で、其の

まま話題を逸らす。

「……じゃ、駆真。さっきの続きだ。聞かせてくれよ」

「ああ、話すよ……」

其処まで言った駆真が突然顔を上げた。

「だが、移動しながらで良いか？此のままだとリリーブラックが……」

「そうだな……なら事情は、其の間に聞こうか」

俺の横から王牙が言った。

「遠くに逃げられる前に少しでも追い付かないと」

「少なくとも、妖精の仇もとってやらねえとな」

俺は親指で氷の塊を指差した。

「……其もあるだろ？」

……さて、俺は正直リリーブラックと戦うのを楽しみにしてたが、
駆真がどうして俺達と

敵対したかも興味があった。禁忌に手を染める背徳感ってのがど
んなものなのか、

参考に見てみたかったのもあったが。

俺達は奴が逃げに行った方向にまっすぐに飛翔を開始した。

Requests・黒闇は、見つめ返す

KARUMA

（魔法の森（駆真の世界）

「ハア……ハア……」

俺は無くなった右腕を押さえながら夜の森を走っていた。

姿と存在の気配、魔力を初めとする力の気配を消して森の中を走っていた。

【君、右腕を失っちゃったね】

再び女性の声と共に、仮面が傍に現れた。

「逃げられるのならば……此位……」

【随分遅しいんだね……】

仮面が紫の尾を引きながら、走る俺の隣をぴったりとついて来ている。

「俺は何もしていない……何もしていないのにどうして……」

【！またお迎えらしい。其も今度はかなり……おぞましいね】

「……おぞましい……!？」

俺は思わず仮面の方を見た。

【そう……取り敢えず、気を付ける事ね】

その言葉と共に仮面は消えた。

突然、目の前の地面に弾幕が直撃し、俺は其の場で踏み止まった。

「……此奴等は……！」

見上げた其の先には武器を携えた小さな人形が数体、俺を待ち構えていた。其の目は全て

青く、冷たく俺を見下ろしていた。

「クッ……!!」

弾幕を撃つものの其の間を縫われ、次々と攻撃を繰り返された。右

腕のないハンデと敵の

数により明らかに押されている。

「はぁ……はぁ……俺は本当に何もやっていない！信じてくれ……」

「！」

「フッフ……フッフ……」

何処からか声が聞こえた。

「口よりも体を動かしたらどうかしら？」

更に言葉が続けられると、一斉に人形達が地面の中に溶けて消えていった。

「!!」

「無様ね……」

「人形……お前まで俺を殺しに来たのかよ……アリス！」

其の名前を言った。アリスも、俺を抹殺する指名を受けたのだろうか……？

「……残念、貴方の言うアリスと私は……」

ふと目の前の木陰から誰かが此方に歩いて来た。

そして月の光に照らされた其の姿は……

「……キツト違ウワ」

人形遣いのアリスだ。だが、俺の普段知っているアリスとは思えな

い程に変わり果てた姿だった。

「……おい……ウソだろ……!？」

其は俺が過去に戦った別次元の幻想郷で異変を起こしているアリスだった。

しかも前に会った時と比べ、更に醜く変わっている。全身に内出血した様な肌の色は更に

どす黒く、其のあちこちは陶器の様にひび割れて紫色の光が漏れている。

何より目を引くのは顔の真ん中にある、目。

赤く血走った白目に巨大な青い宝玉を埋め込んだ様な瞳。頬にも走るひびからの光で、不気味な

紫色のハイライトを携えていた。

「何でお前が……此处に来てるんだよ……!？」

するとアリスの目付きがキツと険しくなり、青い瞳が形を崩して白目に滲んだ。

「……才前ガ憎イ」

其の瞳に、赤い光がちらつき始めたのが見える。

身の危険を察した俺は咄嗟に朱雀の力を使って辺りに炎を巻き起こす。

但し、範囲はあくまでも自分の周りだけに。

だが、パチンという音と共に俺の足元がパツクリと割れた。

巨大な眼球が俺を見ている。

「……デモ、会イタカツタワヨ……神崎駆真君」

其の元に戻った瞳からは好意もあり、殺意もある視線を感じた。

「…何で俺を此処に連れてきた……お前の目的は何だ？」

「目的？ソナナノ決マツテルジャナイ……」

アリスが発する、人間の少女としてはあり得ない声に、思わず震える。

「自分のことを探って計画の邪魔をした俺に復讐、ってどこか？」

「……復讐……」

アリスが黙り込んだ。

「其モ、マタアルケド……」

其の時、アリスの身体が前方に倒れ込んだ。

「!?」

だが地面にはぶつからず、空中で止まった。

目は閉じている。其は見えない海の中に身体を浮かべている様子も見える。

其の身体から突如、大量の黒い霧が噴き出してきた。

「！クッ……!!」

アリスの姿が見る見るうちに霧に包まれ、すっかり見えなくなってしまった。

『生き延びる為二八……戦ウシカナイ……』

霧の中から、くぐもったアリスの声が響いた。俺は霧の中で、アリスが何十人にも分身したと思った。

『抗ウ為二八……足掻クシカナイ……』

其の時、霧の中から何十……いや、何百もの青い目玉が出現した。

仮面の言葉の言う通りだ。今のアリスはおぞましい、そして酷いとんでもない事になっている。

そしていろいろな場所を見ていた其の目が、一斉に此方を睨み付けた。

KARUMA

VS 黒色の人形遣い アリス・マーガトロイド

滾々たる閉塞心 ミアズ・マリス×

～亜空間

『……全力デカカッテ来ナサイ……』

俺は弾幕を放った。

朱雀のまま、炎を放った。アリスを包む霧を炎が包み込む。

『!!!イヤアア''アア''ア''ア''.....!!!!!!』

おぞましい悲鳴を上げながら周囲の霧から目玉が閉じ、消えていく。

だがわずかに残っていた霧がアリスを包んだまま炎の中から真上に一直線に伸び上がった。

「!」

霧は其のまま俺の方へ迫って来た。霧が次々と繰り出す攻撃を右へ、左へ何とか避けていく。

くそ……攻撃の方法がまるで予想がつかない。人形を一切使わず、代わりに周囲の目玉だらけの黒い霧を触手状に、或いは弾幕状に、変幻自在に襲い掛かって来る。

女王蜂が率いる蜂の群れとでも相手してるみたいだ。

『ヴアア.....駆真アアア.....!!!』

其に周囲の霧は吹き飛ばしても吹き飛ばしても、アリスの身体から際限無く噴き出して来る。

洒落に聞こえるが、本当にキリが無い。

なら……霧を出す前に叩くしかない……!!

俺は朱雀を解除した。

『?マサカ…モウ諦メタ訳ジヤナイワヨネエ……?』

「……お前は言ったよな?……俺は生き延びる為に、戦うしかないな
いと……」

炎の中の霧の塊を真っ直ぐに睨み付けた。

「だったら……精一杯戦ってやる……精一杯生き延びてやる!!」

「覚醒『麒麟』!!!」

麒麟の力を開放した。

『!!ナ……!?……ソノ髪ト、其ノ角……貴方……!?』

俺は自分で放った炎を掻き分け、敵の前まで瞬間的に移動した。

『!?ヴウ……!??』

其処から蹴りを放ち始めた。出来るだけ目玉を狙う様に連続で蹴り続ける。

すると霧の中からアリスの輪郭が見えて来た。其の姿は蛹の中の幼虫さながらだった。

「此処だあ!!!」

其の腹に、右足での膝蹴りを放った。アリスの身体は大きく吹き飛ばされ地面を転がり、地面にうつ伏せに倒れた。

「どうだ、効いたか!？」

そして嘔き出されていた霧もあっという間に消えて無くなった。

俺の周りの炎が徐々に小さくなる。

「~~~~ウウ……!!」

呻き声と共に立ち上がるアリス。苦悶に視線が泳いでいる。

「俺は絶対に……!!」

そう言いかけた俺は片膝を付いてしまった。
しまった……今ので、力を……

「~~~~アハハハ……」

するとアリスが嗤い始めた。

「アハハハハハハハ……!!」

「……何が、可らしいんだ……!!?」

数秒間後、アリスは嗤い終え、こつ言った。

「合格ヨ、神崎駆真君……」

「……合格？……どういう……意味だ……？」

突然の通告に戸惑ってしまった。

「辛カッタワヨネ。苦シカッタワヨネ。私モ貴方ノ苦シミガ分カル
ワ」

そう言ってアリスは俺を抱きしめてきた。

「なっ!? やめる!」

必死にもがくが右腕を失っていたのとアリスの力が予想以上に強
かったのがあって

振り払う事が出来なかった。

「……私……逆ラワナイ方ガ良イワヨ……？」

アリスが声を更に奇怪にして脅してきた。

「私モネ……幻想郷ニ狙ワレテイルノ……」

その言葉を聞いてもがくのをやめ、話に耳を傾ける。

「トアル病気デネ……ズット一人ダッタ……愛シイ人トモ会エズニ暮
ラシテキタ」

其の時俺はアリスの視線に違和感を覚えた。

アリスではない、別の何者かが俺を見つめている……？

「其ノ人モ、貴方ト同ジ……判ルワヨネ？」

俺は其の言葉にショックを受けた。同時に別次元で見た、不気味な壁画を思い出す。

「……其は……まさか……」

だが其の名を言う前に、身体がふら付いた。もう、限界だった。

「……ダカラ大丈夫、貴方ヲ受け入レルワ……良イワヨネ」

疲れた体と心にはあまりにも甘い言葉だった。

「オイデ………オイデ………」

俺は全身の力が抜けていき其のまま身を任せて眠りへとついてしまった。

だが意識を失う瞬間、俺は見た気がした。

アリスの隣に突如現れた何者かが、周囲に漂わせていた黒いナニカを俺にけしかけたのを。

Special・雪空に咲きしアヴァンチュール

YOU MU

〜人間の里

今宵、稀有な出来事が起きた。私達が通り掛かった人間の里に、深々と降り積む白い光達……雪が降ったのだ。

そして其が原因で、隣を飛んでいるリリーホワイトさんが大変な事になっていた。発作でも起こしたかの様に身体が痙攣している。

「……リリーホワイトさん、大丈夫ですか？」

「……ウブブルル……レディさんが無理強いしてるのでしょうか……堪ったものじゃありません

ん……!!」

まるで此の世の終わりとても言う様な真っ青な顔でのシバリング。靴から膝まで出ている出た脚も

互いに擦り合わせている。

うごんさんも、少し寒そう……両手をこすり合わせ、小さく震えている。やはりブレザーだけでは
厳しそうだ。

どつしよつかと前に向けた私の視界に、洋服屋の看板が飛び込んできた。

「良ければ、彼処で手袋やマフラー、ストッキング買いましょうか……」

「？」

「……あああ有難う御座いますぅ……!!」

もう、寒さと嬉しさのあまりで顔がくしゃくしゃになっている。私は自身の身体を半霊から少し距離を置いた。

「わたし…あの洋服屋まで、私の半霊に包まって……」

「も……申し訳……ないですぅ……で、ではは……し……失礼……じで……」

リリースホワイトさんが私と半霊の間に飛び込み、半霊を両手でしがみ付いた。半霊に震えが

伝わり、同時に彼女の身体の冷たさも伝わった。其のあまりの冷たさに、思わず反応してしまっが我慢する。

半霊自体も少し冷たいが、包まれば暖かくなる。此で少しは寒さをしのげられる筈だ。

私は、うごんさんの方にもスペースをあけた。半霊がいつもより長く伸びる。

「うごんさん、貴方も……」

「……え……？」

私を見つめ返すうごんさんの顔が紅くなるのを見た私は、つられて顔が紅くなってしまっ。

「……あ、さ、寒そう…だと…／＼…思い…まして…／＼」

慌てて用意した弁解も尻すぼみになり、たちまち役に立たなくなっていく。

しまった…気を悪くしたかな…そう思っているよ、

「…は、はい…では…御言葉に、甘えて…」

おずおずとしながらも間に入ってくれた。たちまち彼女の温もりも半霊から伝わってくる。

「暖かい……」

リリーホワイトさんの体温で充分暖かくなった半霊を持ったうどんさんが小さく呟いた。

私は、黙って右手で其の身体を寄せた。

「／＼／＼……入りますよう」

私は左手で木のドアを開けた。

「いらっしゃいませ!!」

店員の声が店中に響く。

店内は程良く暖かい。此処ならリリーホワイトさんも元気に動けそうだ。

突然の寒さに、防寒用の衣服を買いに求める人が大勢いたが目的の物が

売られているスペースはすぐに見付かった。

其の手前で二人が私から離れる。半霊も元の大きさに戻る。

「何か、好きなのが見付かったら私の所に持って来て下さい。其を買いますので」

「はぁーい!!」

買い物に来ていた客の目を引かせながら、リリーホワイトが売り場の奥に飛んでいった。うどんさんも一礼をしてから探しに其の後を付いていく。

さて……私はマフラーを売っているショップディスプレイの前に立つ。上には綺麗に置まれ、

並べられているマフラーがある。其の中から、うどんさんやリリーホワイトさんに似合いそうな

配色のものを慎重に選び始めた。

すると、

「みよんさん、此はどうですか？似合うと思いますよ？」

うどんさんが戻ってきた。まだ私は選び始めたばかりだというのに凄いですピードだ。

持って来たのはロゼ色のミトンと黒色のストッキングだ。でも、何故か其二組ずつ持って

いて、私に其の内の一組を見せた。

「私のと、御揃いですっ」

「！え？…私のは大丈夫ですよ？」

そうは言ったものの、

「……貴方も…寒そうにしていましたので……」

其の一言に呆気なく轟沈させられた。

見破られていた。実は私も此の気象に耐えられず、密かでありながらうどんさん達と同様寒さに震えて

いたのだ。其をあっさり看破されていたとは……私は両手で火照った顔を覆いたい気分になった。

「ノノノノあ、ありがとございます……」

「私、此が良いです！」

其処へリリーホワイトさんも戻ってきた。其の手には春らしい、子供用のピンク色のミトンと紺色のストッキングが握られている。

「妖夢さんは、何選んでいるんですか？」

「え？…わ、私は……御一人に似合うマフラーで、何か無いかと……」

そう、返事するじ、

「せっかくですので皆で長い一枚、てのはどうですか？」

「え……ノノ!?」

リリーホワイトさんの私達は同時に聞き返していた。

「くっ付いた方が暖かくないですか？」

そう言いながら私の前に並ぶマフラーから、私達のミトンと同じ口ゼ色のものを取って広げて見せたが、当然広げきれずに床に垂れ落ちた。

本当に長い。私達位の少女だったら、三人は余裕で首に巻けるだろう。私達は互いに顔を見合わせる。

うどんさんの顔がマフラーと同じ様に赤くなっている。絶対に私の顔も同じ色になっている。

「うどんさん／＼／＼……い／＼……良いですか？」

「え、え、ええ／＼／＼……大丈夫ですが……」

私達は、再びリリーホワイトさんの方に顔を戻す。

「……わ、判りました／＼／＼では、会計の方に……」

リリーホワイトさんはニッコリと笑った。どうやら私達は、春告精を見くびってたらしい。

レジにて店員から値段を告げられ、財布から其相応の紙幣を引っ張り出して手渡す。お釣りを貰う。

リリーホワイトさんが早速自分の防寒具を身に付けて、喜んでいく。

うどんさん、大丈夫でしょうか……？誤って首が締まったりしたらど

うしましよう……？

彼女を見ながらぼんやりと考えていた。

其の時、地響き、怒号と共に悲鳴が聞こえた。

「!!!」

私達はすぐに入口の方を向いた。

「！あの声は……！」

そう言った途端、入口のドアが吹き飛んだ。そして外の寒い空気と共に叫び声も飛んできた。

「此処にいたかああ!!」

REISEN

VS 春を告げる妖精 リリーブラック

〜人間の里

「てめえ等……!!……こんな雪降る夜をバカにしてんのか……!!?」

小豆餡の菓子パンヒーローに毎度滅菌される病原菌が操縦してそんな真つ黒なロボットが店の入口を強引に破壊し、姿勢を低くして此方を覗き見ていた。

「異性とくっ付かず…女子同士でイチャコラとおお……!!!」

其の顔に当たる部分のガラス製のハッチを開け、中の操縦席からリリーホワイトさんを黒くした様な妖精がいたが、リリーホワイトさんとは似ても似付かない憤怒の表情で私達を睨んでいる。

「此の俺様！リリーブラックがあ!!そんな事を認める筈がアゲツホオオオオ!!!」

だけど喚いている途中に、リリーホワイトに綺麗に顔面パンチを決められ、其の際に操縦桿を手放す。操縦者を失ったロボットは後ろに傾き、店の前で仰向けになって倒れた。

「……すみません!!せっかく買って頂いたミトンを……!!」

リリーホワイトさんがみよんさんに謝った。リリーブラックに対してだけは本当に容赦はない。

同族とも見ていないから尚更だ。

私達は機械の脚を潜って急いで外に出る。

「~~~~て、てめっ……いきなり…顔パンして……汚物扱いだあゲツホオオオ!!!」

操縦席から這い出てきたリリーブラックは大きく咳をし始めた。

「……風邪ですか？」

「!だ、黙れ……!不純同姓交遊が蔓延る聖夜みてえな夜を……俺様

は…ぶっ壊しに来たアクションオン!!!」

宣言の最中に大きなくしゃみをした。其の顔は僅かに…いえ、かなり青ざめている。どうやら

リリーホワイトさんと同じ様に、春に相応しくない気候だと著しく調子を崩してしまう様だ。

もはや自覚すらしていないらしいけど、同じ春告精だからこそその宿命なのかもしれない。

其に比べて、リリーホワイトさんはミトンとストックキングを身に付け、暖かそうにしている。

「……………科学発明『妖精』の間違いじゃないんですか？」

「…お、おま……………妖精呼びわりするな……………何度もオエエエエ……………!!!」

リリーホワイトさんに反論も出来ずに、咄嗟に後ろに顔を向けて嘔吐こうとしている。

相当重症らしい。敵ながら哀れな光景だ。

「……………カップルの方々の前で、薄汚いモノ出さないで下さいよ？」

「エッッホ……………ちぐぢょう……………!!」

リリーブラックが涙目で振り向きながら、

「やっぱり此以上は耐えられねえ……………!!クソッ…クソッ……………!!…撤退して立て直せ

ねえと……………!!!」

そう言いつつ、苦しそうにしながらも操縦席に戻り、ガラスのハッチ

を閉めて操作を始めると

ロボットの顔の部分だけが外れ、首から炎が噴射し、機体を起こして急上昇を始めた。

「!!？」

只風邪のせいで操作が覚束無い影響もあってか、上昇のスピードは速いものの機体は若干

ふらついている。

人里を荒らしてまで私達を探しておいて……何もせずに逃げているの波動かと思うが、やはり他人の迷惑を
考えていないとなると赦せない。

「じぶんさん……力を貸してトナリ!!」

「……みよんさん……!？」

するとみよんさんが、上昇していくマシンのちょうど真下辺りに来ると、背中から楼観剣と白楼剣
を抜き、

『『反射下界斬』!!』

目の前に蒼色のバリアが発生させた。

「じぶんさん!!貴方が使用していた、貴方の最強のスペルを私に……!!」

最強の切り札にしているスペル……赤眼「望見円月（ルナティックブラスト）」に違いない。

でも、あれは弾幕ではない。バリアでも弾く事が出来ない。

「どうしてですか!? そんな事したら……みよんさんにまで……!!」

「大丈夫です！ 思いつきり、撃つて下さい！ 受け止めて見せます!!」

みよんさんが叫ぶ。

「つづんさん、私を……私を信じて下さい!!」

叫びながら私を見る其の両眸に一切の狂いは無かった。心からの言葉だった。

私は決意を固めた。貴方がそう言うてくれるのなら……私は……！
身構え、目を閉じ、全神経を集中させ、霊力を貯める。

そして私は、真っ赤に染まっているであろう瞳を見開いた。

「赤眼『望見円月（ルナティックブラスト）』!!!」

眩い光が進ると共に、巨大な鮮紅色のレーザーがみよんさんに向かって一直線に放たれた。

そして、紅いレーザーが蒼いバリアにぶつかる。でもレーザーはバリアを貫通せず、紅い

エネルギーの塊となってバリアの表面に溜まり始めた。

「……………」

みよんさんが顔を苦悶で歪めて歯を食いしばり、其のエネルギーを留めようとしているのが

光の中から見えた。

「手伝いますよ〜!!!」

すると其処へリリーホワイトさんが飛んでいき、後ろからみよんさんの両肩を持った。みよんさんの

表情が幾分か和らいだ。エネルギー維持の為の霊力を分け与えるのだろうか？

「〜〜づどんさん!.....私は...構いません!.....」続けて下さい
.....!!」

みよんさんの声が聞こえた。私は照射を続行した。

紅い光がどんとどんと増していく。辺りが紅い反射光で満たされていく。

そしてある程度溜まったのを確認したみよんさんは、力を込めて其のバリアを斜め上に傾け、

溜めていたエネルギーを解放した。

するとまるで鏡に当てた光の様に、レーザーが真上に発射されて上空に逃げるマシンの底の部分を捉えた。

「!?!ウワワ.....!!!」

機体は大きく揺れ、リリーブラックの悲鳴が微かながら聞き取れた。レーザーはマシンを突き上げ

ながら、其のまま夜空の遙か上へ垂直に伸び始めた。

私は思わず視線を上にもずらし、スペルを中断した。其でも反射されたレーザーは、勢いを落とさずに

夜空に紅い光の筋を描きながら昇っていく。

リリーホワイトさんに支えられているみよんさんのもとに行き、其の空を見上げた。里の住民も、皆、夜空を見上げている。

「「えええ……」「こんな時まで魅せ付けて来やがってえええ……!!!
…ゲホッゲホッ!!……リア充なんて……リア充なんて、爆発しろお
おおおおお~~~~~」……!!!!!!」

上昇の勢いでマシンから脱出できないリリーブラックの断末魔と共に、やがて雲に紛れて見えなくなつた。

沈黙が流れる。

すると次の瞬間、爆音と共に夜空に大きな花火が開いた。

紅い大きな桜の華、そして紅い大きなハートマーク………どういう原理で形を為しているのかは判らなかつた
が、様々な形に開いていく。

里はやがて其を見上げていた住民達の歓声に包まれる。私達も其の光を見上げていた。

でも私は身体から力が抜けるのを感じ、其のまま地面に倒れた。

「……ひびく……」

私は気絶する直前まで、遠くでみよんさんの声が聞いていた。

YOU MU

～人間の里 入口

期せずにあげた花火も終わり、里は再び元の賑わいを取り戻していた。其の里の入口に

ある石段の一番上に腰掛け、私は空を見上げていた。

かつて私と幽々子様が期せずして起こした、雪春異変を思い出す。私がまだ幽々子様を『御嬢様』

と呼んでいた、あの時を……

うどんさんは隣で寄り添って眠っている。疲れ果ててしまったのだろう。あの場で崩れ落ちた時は本気で泣きそうになったが、其の直後に聞こえた寝息に、心から安堵した。

咄嗟とは言え、無謀としか思えない作戦に乗ってくれ、ありったけの力、そして思いを私にぶつけてくれた。私はとても嬉しかった。

リリーホワイトさんも私に霊力を分け与え続けて疲れたのか子供の様に無造作に脚を投げ出し、うどんさんとは反対方向から身体を私に預けて眠っている。傍には脱いだ帽子が置かれている。

今更になって気付いた。ストックキングのサイズを誤ったのか、爪先からブカブカの先端が石段の上に乗っている。でも其が、寝ている姿に更にあどけなさを与えている。

彼女も私の手助けをしてくれた。彼女無しではあの場面は苦しかったに違いない。私は、其の頭をそつと頭を撫でた。

私達は、一枚のミトンと同じ色のマフラーをそれぞれ首に巻いている。一枚のマフラーで三人は繋がっている。ならばもう一つ……私は半霊で自身ごと二人を包んだ。二人の温もりが伝わり、再び半霊が微熱を帯び始める。

「……此からも、ずっと一緒ですよね……？」

私はマフラーと同じミトンをはめたうどんさんの手を握った。すると寝ていながら、

僅かな力で其の手を握り返した。

最初は驚いたが、思わず微笑んだ。そしてもう一度空を見上げる。

空からの幽かな光達が、私達を照らしていた。

Requests：俺は妖精をやめるぞ!!!

SHINYA (ANOTHER)

魔法の森

「！見付けた……彼処だ！」

俺達は駆真から今回の依頼に起きた、駆真が敵に付いたいきさつを聞いていた時、前方

に煙をまき散らしながら病気の副産物で出来たバイクにまたがり、爆走するリリーブラックが

見えた。

直ぐに加速して其の後を追った。まだ此方に気付いてはいない様だ。

「俺に任せろ……！」

王牙がドラゴガンを一丁だけだし、銃口を前に向けた。

「今度は逃がさない……!!」

そして発砲する。其の狙いはリリーブラックではなく、目玉の付いたバイクの後輪だった。

其処を見事に捉え、後輪を破壊した。

「!??」

バイクは大きくぐら付き、リリーブラックも必死にバランスを整え

ようともがいている。やがて

地面から生える大きなキノコに引っ掛かって大きく前に傾き、バラバラになって爆発した。

リリースブラックも反動で勢いよく前に投げ出された。

「!!あああああああああああ~~~~~.....!!!!!!!」

まるで本気で殴られたかの様に空中で何回転し、木や岩をなぎ倒し破壊しながら凄いい勢いで

水平に飛んでいった。やがて高度が落ちて地面にも叩き付けられ、何度もバウンド

しながら砂煙をあげて転がり続ける。そして今度は地面から出ていた岩に激突してようやく

止まった。

ようやく追い詰めた。俺達は其の岩の前に降り立った。

「~~~~アア~~~~.....事故ツタア~~~~.....!!!」

岩の大きなひび割れの前で必死に起き上がろうとする其の身体は複雑に折れ、欠損し、

黒く変色している。服もビリビリに破れている。

いくらリリースブラックとは言っても、とてつもないダメージだと再生に時間はかかる

みたいだ。直ぐに体や肌の色は戻り始めたが其のスピードが余りにも遅い。

「~~~~痛エヨ~~~~痛エ~~~~エエヨオオ~~~~.....!!!」

「其処までだ」

俺達は横たわるリリーブラックの前まで来て其の姿を見下ろした。するとピタリと痛がるのを

止め、駆真に目を向けた。

「ク、クル……………いや、駆真……………!??」

駆真が元に戻っているのを確認するや否やショックを受けていた。其の顔にゆっくりと

皮膚が張り直されている。

「才前……………!?!ド……………如何シテ……………!??」

「残念だが、腹心はワクチンのおかげで元通りになった」

俺は駆真の肩に手を置いた。

「!ワ……………ワクチン……………!??」

「此だ」

其処で王牙がリリーブラックに、駆真に使って空になった注射器を投げた。注射器は回転

しながらリリーブラックの頭にぶつかり、其のまま地面に転がった。

「……………!?!」「此を……………何処デ……………!??」

完全に当惑している。仕方ない……………此が答えになるかな……………?俺はもう一つの支給品である

陰陽玉型の通信機を取り出し、其に話しかけた。

「おい、聞こえるか？」

すると数秒もせずに陰陽玉から聞き慣れた声がした。

『あら？其の声は、神矢君？』

間延びした声だ。何処かでくつろいでいたんだろう。

『どうしたの？何かあったのかしら？』

「リリースブラックを追い詰めた」

『！あら、御手柄じゃない。ならばあと少しね』

拍手までして喜んでいる様だが、紫が話すとあまり嬉しそうでない様に聞こえる。

『でも、油断はしない方が良いわ。最後の抵抗をしてくる……きっとね』

「駆真も一緒だ。色々あったが何とか合流出来た」

『良かったじゃない。三人で彼奴を追い詰められて』

「！マ、待テ……!!今……スキマ妖怪と……話してんのかヨ……!??」

ようやく理解できたのかリリースブラックが縋り付く様に慌てて声を絞り出して割り

込んできた。五月蠅えな。一度陰陽玉から視線を反らす。

「ソイツはモウ……後輩にやらせて、操り人形じゃア……?」

『此処の『紫じゃねえよ。別んとこの紫が協力してくれてんだよ。ワ
クチンをくれたのもソイツだ』

まさかりリリーブラックも、別の幻想郷の事についてまでは知らな
かった様だ。妖精を玩具に

してる暇が有ったら、そっちも研究した方が良いと思うけどな……

「そうだ、一応言っとくぞ。お前、妖精をトカゲに変えたる?」

自分が思った事で、思い出した。其を聞いた途端、またリリーブ
ラックの顔色が変わった。

「トカゲ!?…またカ……デ、どうしたンダ……?何処にイる……てカ、そ
もソも戦ツたのか?」

ようやく再生し終えるのか縋り付く様に言う声が元に戻って来て
いる。

俺は奴に言ってやった。

「戦った。なかなかインパクトあったし、良いと思ったよ……でも平
凡」

「!!ハイレベルじゃねえのかよ!!!」

「あ、平凡どころでもなかったな。やり直し」

無意識に言った俺の言葉が余程気に入らなかったのか、

「畜生があああ!!!」

キレた猿みたいに両手で地面を叩いて悔しがる妖精。見てて案外飽きない。

「エリマキで勝てると思ってたのか？舐め過ぎなんだよ」

「グ……!?!」

危険を感じたのかリリーブラックは急いで這いずりながら岩から、そして俺達から

離れようとした。が、再生したての部位を使っていないので其の移動速度は遅い。まだ

馴染んでないのか？

俺は陰陽玉にもう一度視線を向けた。

「…声ができるからいるだろ？とにかく、捕まえたら連絡するから。スキマ、

用意しとけよ」

『もう、何時でもいけるけど無茶はしないようにね。因果律が狂うと色々面倒だから』

……本音出てるんじゃないかよ。俺は紫と話し終えて陰陽玉をしまいながら歩いて先回りし、
リリーブラックの前に立ちはだかった。奴の足元には駆真と王牙が立っている。もう

逃げ道は残っていない。横に転がっても取り押さえられる事は十分に出来る。

「観念した方が良い……ぜ!!!」

そう言いながら俺は、

リリースブラックではなく、向かいにいる二人に弾幕を放った。

駆真と王牙は慌てて飛び退き、着地を同時に土煙を出しながら後ろに下がる。

「!? 神矢!? ……どういつつもりだ!?!」

「そりゃあ見りゃあね。コイツの側に付くつても案外面白そうだな……てな」

リリースブラックの後ろに回りながら、二人を見据える。

「……お、お前……」

目の端で黒い妖精が啞然としているのが見えた。感情がコロコロ変わるな。

情緒不安定か、コイツは。

(何してるんだ!?!いきなり裏切って……!!)

五月蠅えな、今度は言葉に出さずにもう一人の俺に返答する。俺に任せとけ、お前は

絶対損しねえから、そう言った。

(！お前……もしかして……)

其の質問には答えず、邪魔するなよ、と言つと黙ってしまった。

次はリリーブラックを見下ろす。

「じゃあ這いつくばってないで見せてくれよ。病気で変貌するんだろ？……お前もよ」

「！いきなりの裏切りにいきなりのオーダー……無茶苦茶じゃんかよ……」

ようやく再生した身体に慣れてきたのか、ゆっくりと俺の前で立ち上がる。

「両腕だけならあるが……仕方ねえ。折角の服も、もうボロボロだ……もう着る価値も

ねえ……」

そう言つと、突然唸り声を上げて、再びその場に倒れた。膝を付き、両手も手に付けて

四つん這いになったりリリーブラックは身体を震わせている。何処からか骨が軋む様な

身の毛がよだつ音も響き始めた。

「頼むぜ……後……輩……!!」

そう呟いた途端、其の顔が一気に黒く変色した。

「！来るぞ……！離れる!!」

駆真と王牙が後ろに離れ始めると、直ぐに服を引き裂きながら身体が肥大化し始めた。

両腕が肩から二本に分かれ、六本となった手足の指は巨大な鉤爪となった。

少しづつ後ろに下がりながら、俺も其の変貌を見守った。

数十秒後、俺が視線を上に向けていた。

「……やるなあ」

其処にいたのは巨大な甲虫だった。

帽子と同じ赤いギザギザの模様が走る黒い身体が月の光を反射して光を放っている。

其の大きさは、博麗神社の本殿とほとんど変わらない。

前髪の一本が大きく伸びてカブトムシの角みたいになってる一方でサイドの髪の毛の束二本はクワガタみたいな顎に変化している。

髪の毛の色は黄色で変わってなったが、サイドの髪を互いに打ち鳴らすと金属音が響くあたり、

もはや髪の毛と呼べない代物になってる様だ。

「カブトムシ……いや、クワガタか!？」

「本当に病気か？……昆虫になる病気なんて聞いたことが無い……!!」

駆真と王牙は其の姿を見て唾然としている。

するとリリースブランクが鉤爪みたいになった一番前の左手をさつき自分が激突した

岩の上に置き、力を加えてあつという間に砕いてしまった。

力の誇示か…？どちらにしても圧倒的なパワーアップをした事に間違いはなさそうだ。

俺は見上げていたが、さっきとは違う感情になっていた。地面を踏んでジャンプし、堅そうな其の背中に飛び乗る。

「!?ナ……俺様ノ背中ニ乗ルナ……!!」

「良いじゃねえか、助けてやったんだから」

最初は軽く身体を振って落とそうとしてきたが、俺がそう言つと渋々動きを止めた。

「飛んでくれ。俺が上から攻撃してやるから、其以外は何もしなくていいぞ」

そう言つと苦虫……甲虫が苦虫噛み潰したつてもおかしいけど、まあ、そんな感じの表情

で俺を見上げた後、黒い翅を開いた。すると其の中で畳まれていた半透明の薄羽が伸び、

其が震える様に振動を始めた。

やがて蠅の羽音を大きくした重低音と共にゆっくりと浮上を始め

た。

「ちあ……とつとと始めるとするかー」

俺はそう言つと、ゆっくりと足を上げ、

「割符『アースクラック』!!」

思いつ切り下ろし、黒光りする其の背中を粉々に踏み割った。其の衝撃に耐えきれず、

リリースブラックは空中から墜落して地面に叩き付けられる。

俺は地面に衝突する瞬間に背中から飛び退き、駆真の前に着地した。

「!!?」

突然の出来事の連続に呆然とする二人を他所に俺は立ち上がりながら後ろを見た。

土煙が薄れ、地面に倒れた巨体が見えてくる。墜落の衝撃で変な方向に曲がった上の翅

にも見事なひびが入り、下の薄い翅はボロボロに破れている。

其も直ぐに再生されて消えていった。チツ…そう上手くはいかねえか。

「お前…もしかして、さっきの一撃を叩き込む為に……?」

「ちあ……知らねえな」

俺は二人の顔を見ないで答えた。

「グガアア……!!? 如何シテ裏切ッタ……!!?」

俺の騙し討ちをまんまと喰らった元妖精の甲虫はゆっくりと起き上がり、複眼になった

目で俺を睨み付けた。

「だから言っただろ? 上から攻撃してやるって…其のままじゃねえか」

俺は平然とそう言い返す。別に誰にとは言っていない。だから悪びれもしない。

間違っってはねえし。

「てか、龍とかなら良かったが…最初にそんな虫になったのが間違いだっただな! 興醒めなんだよ!!」

そう言ってやったけど、後ろの二人に完全に誤解されると面倒臭かったので

一言付け加える事にする。

「……最初から手を貸す気はなかったけど!!」

(もしかして、俺の言っていた事を……?)

もう一人の俺はそう言ったが、

「……口実にしようとしたただけだ」

そう呟いて、頭を掻いた。

「フザケヤガツテガキ共ガ……纏メテ葬リ去ツテヤル!!!」

完全にキレたらしく、クワガタの様な牙を激しく打ち鳴らしながら
喚いた。翅も開き、

再び飛び始めようとする。

「んじゃ、さっさと捕獲して籠の中にブチ込んでやるっぜ! 牢獄とい
う巨大な籠にな!!」

俺達は其の妖精を見上げて構えた。

Requests・Evil Mutation

OUGA

VS 影を告げる妖精 ケイオスブラック・ベート
魔法の森

巨大な黒い甲虫の様になったリリーブラックは前の一对の鉤爪み
たいになった足で地面を

数回掻いた後、頭を下げて角を突き出したまま此方に向かって猛進
して来た。

俺達は弾幕を発射したが、黒い甲殻に全て弾かれてしまった。

「！避ける!!」

俺の声で攻撃を止めた神矢と駆真はそれぞれ横に、俺は少し助走を
つけて大きくジャンプした。

赤いものを見た牡牛さながらに突進していく其の真上で、身体を捻
りながら再びドラゴガンを

真下に構えて狙い撃つ。だが、霊力の弾丸はやはり背中や翅を空し
く叩いただけだった。

其のまま地面に着地して直ぐに真後ろの敵に視線を向ける。左右
に回避した二人も戻って来た。

敵を鉤爪で地面を抉りながら方向転換し、クワガタみたいな牙を打
ち鳴らしながら俺達の方に再度突進を仕掛けてくる。俺達は再び回
避する。今度は俺も、神矢と同じ方向に横転して避けた。

するとあまりに勢いが良すぎたのか、リリーブラックは俺達の背後

にあつた木に物凄い音と共に
激突し、黄色い角も深々と幹に突き刺さった。

「!? オウ…嘘…!? 又?…又グウウウ…!!!」

焦ったリリースブラックは角を引き抜こうと必死になってもがき始めた。相当力んでいるらしく、

四枚の翅を全て広げ、柔らかかそうな腹が丸見えになっている。

「!.....」

其に気が付いた俺は一丁だけを向け、今度は腹に発射した。銃弾は腹に食い込み、黒い体液が噴き出した。

「腹が柔らかい!! 外の殻は堅いけど、此ならダメージが与えられるぞ!!」

俺達は弾幕を発射し始めた。

「!!? ~ 此ノ…!! レディノ尻ヲ狙ウカ…変態力、才前等ハ…!!?」

そんなまったく見当違いな罵声にも構わず集中攻撃を浴びせていく。男勝りな言葉遣いの

凶悪犯がレディと名乗るとは…片腹痛いにも程が有る。

「~~~~ 落トサネエゾ…刺サツタ位デ…落シ物ダナンテ…絶対ニ…!!」

そして攻撃を受けながらも何か訳の判らない事を呟きながら、相変わらず角を引き抜こうと

必死にもがいている。其の腹は弾幕や霊力の銃弾を大量に浴び、自身の体液で紫色に染まっ
ていく。

何とか角を引き抜き、大きく後退した敵は後ろに不意打ちをかける様に角と牙を振りながら

此方に振り向いた。素早い動きだったが、幸いにも遠くから弾幕で攻撃していたので俺達は其の範囲に入っていなかった。

更に其の大振りな攻撃モーションが仇となり、今度はすぐ横に生えていた木の幹に黄色い牙が食い込んだ。

「もう一度チャンスだ！攻撃するぞ!!」

巨体の割には小さい顔面に弾幕を放つ。腹よりは効いていないみたいだったが、目を瞑って

耐えている所から確実にダメージを与えられている事が判った。

「覚醒『玄武』!!」

すると駆真が髪と瞳を緑色にした。リリーブラックは怯みや、牙を引き抜こうと必死になって

此の変化を見ていない。

「注意をひき付けていって下れ...」

そういつと駆真は、穴を掘って地中に潜っていった。

そうか……不意打ちを仕掛けるつもりか……!!俺は弾幕を打ち続け
て駆真の言う通りにした。

木屑を撒き散らしながらようやく牙を引き抜き、三対の複眼を開いて俺達を睨み付ける。

今度は翅を広げてゆっくりと上昇し始めた。

そして今度は低空飛行をしたまま勢いを付けて此方に突っ込み始めた。

「玄武『グランド・ドライブ』!!!」

だが其の直後、其の真下の地面から駆真が勢いよく飛び出し、リーブラックの巨体を打ち上げた。

「!?!?ア''ア''ア''グ.....!!!」

真下から衝撃を受けて少し浮き上がった敵の身体は、空中で180度回転して仰向けになり、俺達の前に轟音を立てて墜落した。

すると敵に向かって神矢が走り始めた。

「俺に任せろ!!」

「神矢.....!?!」

するとリーブラックが神矢を食い止めるために、仰向けのまま四本の足を伸ばし掴みかかって来た。

「割符『アースクラック』!!!」

だけど神矢も其をかわしながら、それぞれの腕の関節に飛び乗り、翅を踏み割ったのと同じ要領で次々を踏み折っていった。そして四本目を破壊した後、其処から顎に向かって大ジャンプし、両足で力一杯踏み割った。

「!!!オオ”オオオ……………」

頭部の黒い殻だけでなく黄色い髪の間角や顎も砕け、破片が辺りに散らばった。神矢の足の下で化け物の様な断末魔を上げた後、リリースブラスクは六本足を抵抗するかの様に弱々しく動かし始めた。

「!おい…………やり過ぎじゃないか…………?」

俺は神矢に言ったが、もう遅かった。

暫くもがいていた六本（不自然な角度に曲がった四本も含む）足を小刻みに震わせながら内側に畳むと、脱獄犯はやがて割れた頭を地面に付けて全く動かなくなつた。

「…………おい…」

俺はもう一度敵の頭に乗っている神矢を見上げて言った。

「?……………!!え、死んだのか?」

今更気が付いた神矢がまさかと言わんばかりに自分が踏んでいる
リリースブラックの顔を

見下ろした。散らばった顔の破片とじわじわと広がっていく体液
に沈む青い瞳の六つの複眼は、

もう何も見てなかった。

「参ったな……………死なねえ程度に弱らせようと思ったのに……………」

「どうするんだ?紫に、なんて言ったらいいか……………」

其処で駆真も合流した。俺はドラゴガンを二丁ともホルスターに
収納する。

「まあ、生け捕りは出来るだけって言われてたし……………そう言う事で良
いんじゃないかねえかな」

そう言いながらリリースブラックの顔の上から飛び、黒い血溜まりを越えながら俺達の前に着地した。

「こんな危険なカブトムシを籠に入れても、また破壊して出て来られたら面倒くさいし……」

「ううん…俺も、此処の幻想郷の為に危険分子は殺しておいた方が良いと思う。此処の幻想郷はとんでもない事が起きている。俺の所もそうなんだが……」

駆真の発言に俺は黙ったままだった。

「>>>……>>>>>……」

「!!?」

不意に声が聞こえ、後ろを向くと裏返しになった甲虫妖精が、活動を再開させていた。

「此ノ程度デエ」エ……終ワツタトオ」オ……思ッテルノカア」アアア」……???

だけど、其の傷の再生に時間がかかっているらしい。ひっくり返された亀みたいにもかく足の内の四本は、肘から先が情けなく揺れ、割られた頭からはまだ黒い血が噴き出ている。

「まさか、頭を割られても息を吹き返すなんてな…」

「やっぱ倒せねえか…此処まで来ると大した再生力だ。あの紫が気を付けると言った訳だぜ」

俺は戻したばかりのドラゴガンを持ち、ホルスターから抜いた。

「覚醒『朱雀』!!!」

「貫符『トラジカルスピア 手中』!!!」

駆真も髪の色と目を赤色に変え、片方しかない手で炎と共に出現したレイピアを握った。

神矢も同様に手に槍を持つ。

すると俺達の前で瀕死の甲虫の全身が完全に黒く染まり、姿を変え始めた。

「!また変異か…!!」

骨が軋む様な音を立てながら、其の影のようになった姿が長く伸び、やがて一つの姿が現れた。

「!!!」

啞然とする俺達の前で、妖精は大きく上に伸び上がった。

其は大蛇だった。

傍で並ぶ樹木並の太さの身体に覆われた、紅いギザギザの様が刻まれた黒い鱗。其が月の光に
赤く輝いている。だが甲虫の時ほどはつきりと反射はせず、其の輝きは鈍い。

薄い紫色の六枚の羽が首元でフードみたいに広がり、其の腹側から四対の青い瞳の目が此方を

睨み付けていた。威嚇の為の模様ではない。紛れもない本物の目玉だ。

まるで猛毒を持つコブラを彷彿とさせる風貌だ。

「……何処まで妖精を止めるつもりなんだよ、コイツは……」

神矢は小さく笑いながら呟くのが聞こえた。

「俺様八絶対二捕マラネエ……！一度ト戻ルカ……ンナ糞ミテエナ牢獄
二……!!」

擦れ声でそう言うと、大量の棘の付いた尻尾を前に出し、ガラガラへびの様に音を出して

震わせた。

俺はドラゴガンの銃口を蛇の顔に向けた。其の両目は虫の時と同じ三つの眼球があったが、昆虫

特有の複眼ではなく、切れ込みの様な瞳の蛇の眼になっていた。

リリースブラックが前に長く伸びた口を大きく開けた。其処には虫の脚みたいに節のある牙が

ズラリと並び、それぞれがバキバキと音を立てながら蠢いている。

其の内の八本が蜘蛛の

脚みたいに異様に長く、先端から紫色の液体が滴り落ちている。

「やっぱり生け捕りは無理だ！此処で殺すしかない！」

今の状況に面している俺は、駆真の言葉に反対する事はなかった。
神矢も黙って頷く。

「仕方ない、作戦変更だ……行くぞ!!」

俺達は蛇とに向かって走り出した。

「絶対二…逃げ切ッテヤル……終ワッテ……堪ルカアアアアアアアアアアア
ア!!!!!!」

向かってくる俺達を迎えるかの様に、相手も虫の脚みみたいな牙を見せながら、破裂音の様な咆哮を上げた。